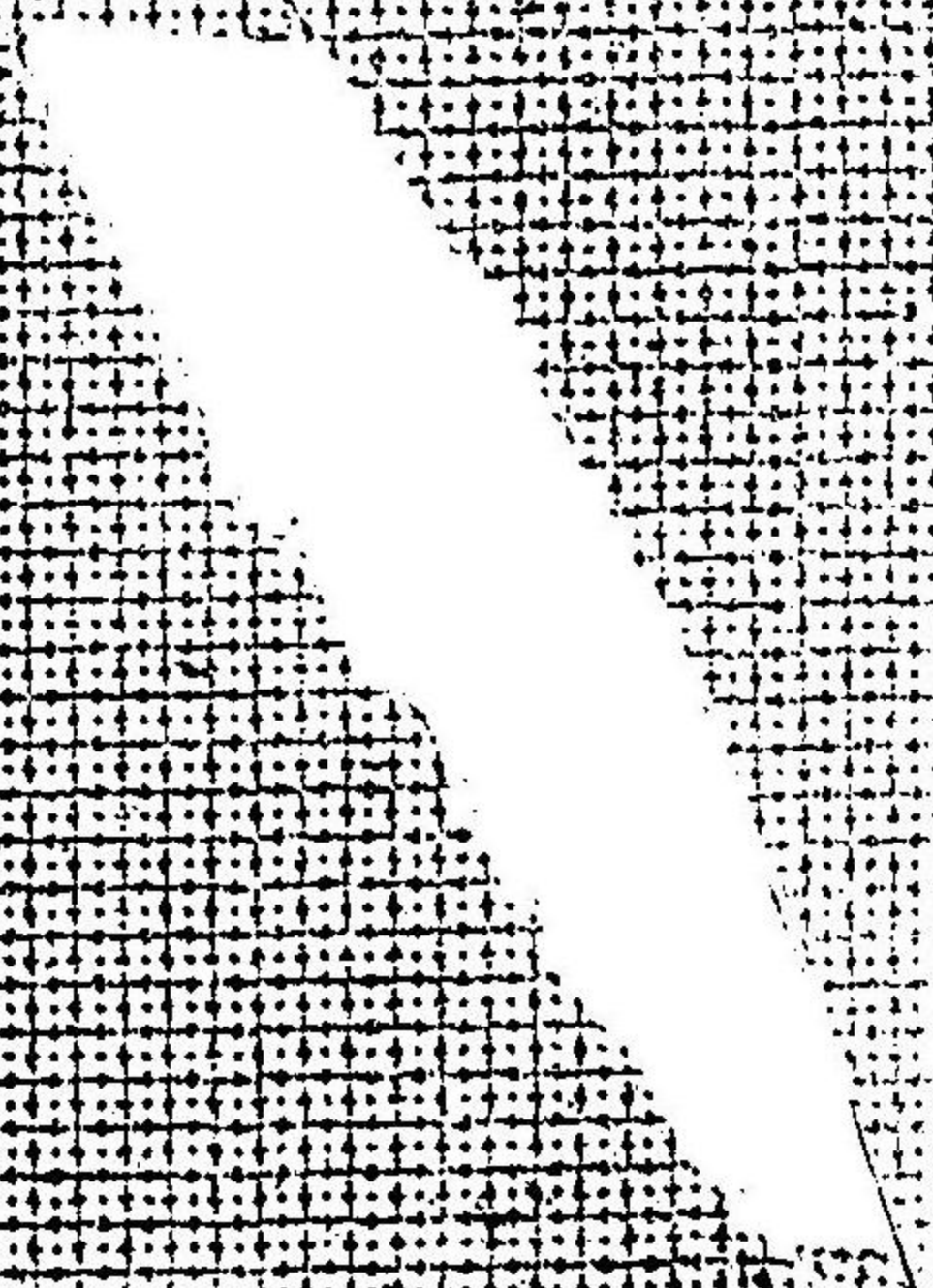




21.11.20

小羊漫言

坪内逍遙著



小羊漫言はしがき

春舎漫筆といふ冊子に我が叙事の反古を集めて廿三四年の夢をうつしたれど、
きは同じところに書きすてしが若干あるうちより、有斐閣のあると評論の反古を
集めて一冊とし、世に出ださんとせり、人のごと立ちて言ふ小ひつじのそゝろを
と、名けつ

讀賣叢譚より日本文學史の評までは讀賣新聞に載せし廿三年中の作、其餘は
廿四年の作なり新聞紙雜誌等に掲げき梅川の評と近松が時代物の畧評とは廿
五年にいたりて公にしつれと起稿せしは廿三年の末なり
酷しき語格の誤と際立ちて拙きと明ある間違とは此のたび訂正を加へたれど
すべて根本の思想は今の意見と殊されるをすら態と元のまゝに存したり

明治廿六年六月初旬

著者識

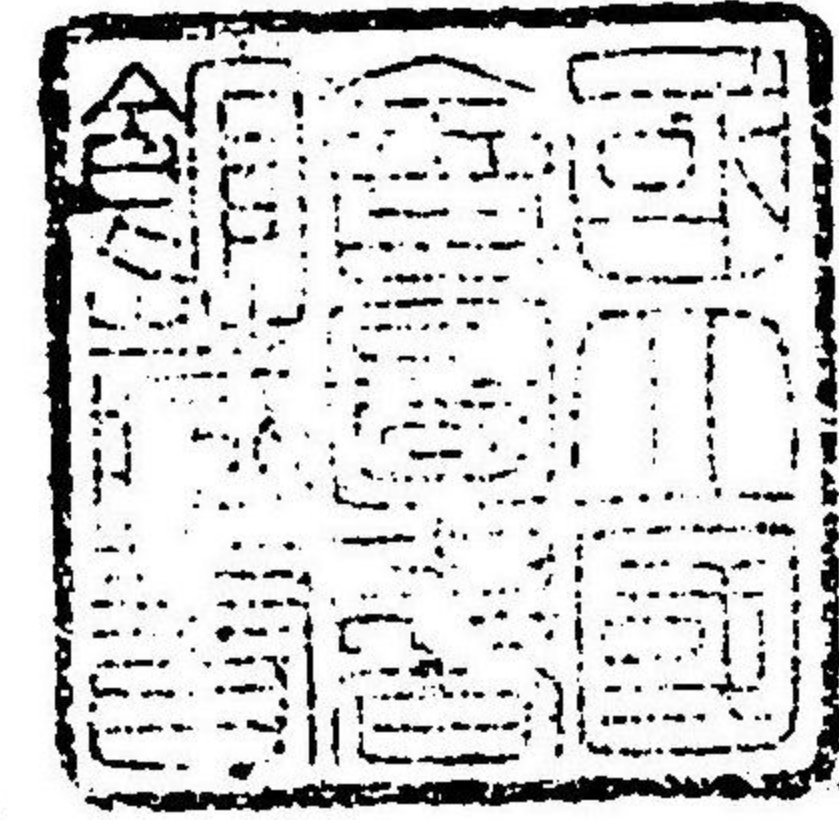
9/4.6 Ta 651 R

目次

小羊漫言

目次

○讀賣叢譚	一
○羽檄	六
○我國竟にシエーンスピヤ無からんや	十
○擬投書	十七
○明治二十二年文學上の出來事月表	十八
○明治二十二年文學界の風潮	二十二
○明治二十二年の著作家	二十八
○新聞紙の小説	三十二
○博覽會餘所見記	三十九
○兄弟文學 (其一、其二、其三、其四)	四十五
○『天路歷程』	五十九
○明治二十三年上半期文學界の風潮	六十三



260943

目次

○小説三派	七十一
○『勝鬘』と『桂姫』と	八十六
○『此のぬし』と『教師三昧』と	九十二
○三上高津兩『日本文学史』	百五
○妄想録	百十二
○奴	百十二
○舊幕時代の學者	百十三
○結構的批評	百十五
○『眞善美日本人』	百十七
○讀法を興さんとする趣意	百二十二
○『女殺油地獄』を讀みて所感を記す	百五十一
○近松が時代物	百八十八
○『めいどの飛脚』を讀みて梅川を評す	百九十五

小羊漫言

坪内 雄藏 著

讀

賣

叢

譚



讀賣叢譚

大人となれば波の返る毎に人さまの感慨ありて樂しき年賀の聲もさす
 かに樂しとは聞かざれど一年を重ねる毎に行末の見にて頼母しきは小兒の齡
 と國の齡と雜誌新聞紙の齡となりそは彼等の年とる毎に其だけにおとなびそ
 れだけに智恵まさり又其だけに貫目もつき個人としては國の益とあり一國と
 しては世界の益となり新聞雜誌としては世人の益となればなり扱も我讀賣新
 聞が其たぐひに漏れぬこそ嬉しけれ吾人むかしは小新聞と賤しめられいがめ
 しき向には小供あつかひにせられ心外の年月を経しこともありしがそは已に
 忘らるゝ噂となり雜譚は生ひたちて大人びたる論説とあり今年はまだ初子を
 生り名けて叢譚といふは親の幼名に因るなり
 叢譚何の爲に生れたるか親論説の手助して社會の評判をせんとてあり思ふに
 今年廿三年は國を人に喩れば國の爲の一月一日なるべし人の上にては一年の

計此日にありといへば國の爲には千歳のはかりごと或は今年の用心と準備とにあるならんされば頼母しき望多きにつれて心じらひも亦多ければ忙しきこと一ツ二ツにして足らず政事上の事も社會上の事も教育經濟文學等の事もことしよりは一層力を入れて誠實熱心に企圖せざるべからず破壊の世已に過ぎて建前の時に達したりとは識者の繰返して言ひし事なれども去年までの經歷を見れば材木の選好み何事の上にもかしましく土臺の石すらも置きあへずしてこゝに棟梁のいさかふあればかして職人の一時に泥みて其日の手間賃を食るも見ぬしが今年是最早ムダをすべき年にあらず小異同は餘所にして諸共に國益となるべきを圖らざるべからず其中政事上社會上の事は心ある人の夙に心づきてあれバ今更に新しくいふ迄もあけれど心掛りあるは文學の上なり吾人今の文學を譏りて拙し卑しとは言はずされども公平にいへば濫りかはしきこと比なし色々の材木散りて山をなせども未だ棟梁の出るを見ずまた明治新文學のたしかある礎の置かれたるを見ず偶々こゝかしてに門戸の建てるゝを見ぬにあらねどもは個人の住居にて日本文學氏の公宅とはいふべからず所詮今の文學は一個人の文學にて日本を代表すべき眞の文學とは思は

れず斯ても言魂の幸はふ國と云ふ實あるか併ながら明治の歴史上より言へば新文學の發達は社會政事よりも後れて生まれりさすれば斯うあるも自然の順序なり怪訝するに及ばず舊文學の破壊されしはやうくさのふけふの事あり否舊文學の礎まだ悉皆は除かれぬなりさすれば建前の遅々たるも今更のやうに驚くには及ばぬものから斯う諦めて傍觀せんは隱者仙人の所爲にて人たる行ひに近からず吾人こゝに感ずること深ければこそ自ら揣るに違わらず今年叢譚の一欄を設けて専ら此筋の事若しくは社説に漏たる社交上の事を評判し遍く有識家に質さんどす夫新聞紙は文學の分家にして文學は吾人の親分あるに子分たる吾人が嗚呼がましく親分の舉動を評判せんとするは冠履顛倒の沙汰に似たれど負ふた子に淺瀬の喩もあり且はみだりがはしき當代の習ひとて是非もなしいふまでもなければ吾人もどより文學長屋の職人あがり左甚五郎の腕かければ飛彈の匠の經驗あるにあらす向後吾人の論ずる所何として千古不拔の確言ならんや墨繩の引ちがひ定めし多からん規矩の間違もまた莫大なるべし但吾人水天宮不動尊に誓をたて知りつゝ墨繩を横さまには引かじおのれが一時の榮利の爲めに決して受負めく仕事はせし一念文學氏の註文を重ん

と慾を離れ利を忘れおはれ未來の棟梁の爲に大伽藍建立の下圖を作らんと斯誓つてのけふの首途若し志しの嘉みすべきを識者大家の酌むあらば吾人の説の非なる時には一言の教を吝まるゝこと亦く吾人の議論の足らざる時には數句の補ひを賜へかし吾人君子の度量なきも過つては露懐むるを憚らば吾人の本願は斯文の爲に犬馬とありて九牛の一毛を裨益せんと欲するのみ豈他念あらんや

さりながら退いて思ふに凡そ言ふ所を聞かれんとするには最初に信用を得る事肝要なり扱信用を得んとするには自ら價値を披露するが佳し是れ賣藥を弘めんとて能書を配ると同じ手段されど國の爲にすることなれば君子も強ちに咎めざるべし且は彼れ自慢といふもの一應は甚だ面憎きものなれど自惚のありたけを打明けたりと見ばかかゝに可愛き所ありて彼の人聞のよき偽謙遜が内に大自慢を包めるより遙にうつくしき所あるべし以上手前味噌をいふ前置として、そもや我『讀賣新聞』は主筆大天狗高田早苗坊が専ら論説の起草に従事し竹のや仙人が小説を擔當し並んで脱俗の仙筆をふるはれし頃より一種出色の譽ありて夙に大雅の賞翫を得しがことしより仙人我社を去り餘所の大業に

籠られたること我社にとりては残念されど仙人筆を収められぬからは我文學にとりては何の損あくむしる仙人が此等の峯かしの峯に移り文壇の前鬼後鬼を取鎮められんと我國の爲に願はしきことなり且將我社も損は受けず何となれば其後の文運幸に拙からで仙人飛行し去たる後忽ち許多の將星ありて我社の屋背に降止まりまかもおのゝ光を分つて我新聞の紙面を照せり先づ小説の欄間の上には舶來藥研にて西鶴を細末にし扱人を殺し人を活す一種の仙丹を鍊らんとする紅葉山人といふ將星あり禪學より出て和漢洋に入り和漢洋をぬけて西鶴に藏れ西鶴の美醜を看破つて豁然大悟し更に俗人に戻らんとする幸田露伴といふ將星あり花實繁簡剛柔濃淡の八行を具足せる落花漂絮といふ將星あり又西洋書いろゝ讀み下は讀本の薄きより上はウエブヌタル大字典の厚きまで常に其座右に置き剩へ和漢の書を見るといふ博學坪内逍遙といふ小生あり又不斷の投書家には洒落本其者といふべき幸堂得知といふ通仙あつて芝居道の不動明王、櫻庭妙翁の後を承けて時に逝多伽童子とあり犴羯羅童子の只好子と共に遍く劇界のモ、ンガアを悲引す扱同盟の列國には文壇の梁山泊硯友社の諸文豪思案、眉山、漣、柳浪、漁山、九華をはじめとして一百有餘人の豪

傑あり並に文壇のナリムヒヤ山、新聲社の諸神祇、隅外、越智東風、三木などいふ都合十二柱の尊達あり加ふるに折々の寄書家には縁雨醒客といふ文學通兼東京通あつて或時は『ダンシヤツド』の如き諷刺文を草し或時は『書籍の戦』の如き嘲諷譚を作り我社の光榮を補くるあり況んや兼好法師に似たる桂のや主人、ゴード、スミスに似たる四莫亭主人、ラムに似たる市隠子、アヤソンに似たる斯病逸史、スチールに似たるYY生皆將來の寄書家たらんことを約せられたるをやあせけなく有たけの自慢を言はゞ吾人なかゝの文學通にあらざらんや我人が文學の評判をすることの不當ならざるは尙儒者が仁義を講じ浮屠氏が慈悲を説き、玉が鼠を捕り、晝頭に空腹を感じ、徳が妖に克ち水の低きにつき、鼠仲と鳴くの不當あらざるがごとしと信す此を以ての故に明日より折々撥譚を書くべし

羽
檄

胸算よりも忙しきものは大晦日とかやことし廿三年は吾人日本人の政事上の大晦日ともいふべし上下の負債山の如し油断せば難義立どころに至らん覺者、仙人、道樂者、當世學者、愚人、小供、無慾者の外は手を束ねて難義を待つべしや忙し

羽

さ推して知るべし此時吾人ヤツギとあり文學の議論ものゝしく書くとも誰か讀まん誰かうなづかん思ふに二の膳三の膳の品數多くておツクうあるは泰平の饗應に宜しといへど矢矧の修羅場には恰好あらず、かゝる時何物か擲飯の手とりバやくて立ながらしたゝめ易きに優るものあらん吾人此理を思ふ故に所論毎に短くはしより成らばさんしよの小粒にしてヒリゝとせんことを期す素新聞紙の用は廣く讀まれて廣く益するにあり徒に道樂者の間食の料とならんこと何ぼう口惜き限なり夫太平のかたちは下戸の穩當に食事せる姿の如く革命の紛亂は上戸の爛醉して暴出たるに似たり儀狄一たび製りてより帝王の天下を養ひ以て百禮を治むといふ此物、世の中太古に戻らば知らず今更禁すること出來がたし但願はくは節したし然るに世の不埒者飯を棄てゝ酒を選ぶ是亂を喜ぶものか酒界には之をノンダツレといひ政界には之をアマゴイグといふ酒はまことに天の美祿、飲むは佳したゝ飲まば人をしてニートヒヤに遊ばしめまた混元の世に返らしめよ照々たること春の腸を貫くが如く喧かあること口の背を炙るが如くあらしめよ文武兼備之を良將と言ひ酒飯左右之を上下戸といふ上下一致之を君民共治といふ惟るに文學の政事に於ける點心の酒家に於

檄

羽

けるが如し、點心のみを好む者は下戸中の下寄りなりとて、膳外に退くるもの未だまことの、上戸にあらす竹のや仙人酒を好めど、好んで、點心に口を觸る、議事堂へ驅る車の上にも、長くても一欄半「發譚」を讀むの餘地なからんや、一袋の密柑も時に胸を爽にして、惡醉を救ふ吾人のおさなき文も、或は政事家の一笑を得ん、美人の一笑には國を傾くるの憂あれど、丈夫の一笑にはたま／＼其度量の潤きを見る、聞く昔ビユーリタンの一黨笑を忌み、點心を忌み、只管酒精の苛強きを重んじ、悉く下戸を政事外に逐ひ、えかば因果あやまたず、王政復古して、チャールス二世酒を好むや、上下靡然として、酒に溺れ、全國ヨイ／＼の果となりきど、かや又佛蘭西に於ては、ダントン、ロベスピエルの徒、一時法外に爛醉して、下戸を盛殺すこと、万を以て數へしかば、國人酒あるを知て、飯あるを知らず、終に蛇丸の如きナポレオンを崇拜し、剩へ歐羅巴一面を酒の海としつとぞ、ベツ／＼話を聽くさへも、酒くさし思ふに、ことし廿三年は新年會、懇親會、黨員會、響應會、說得會、慰撫會、籠絡會、すびき會、賄賂會、成口の同胞は、酒に維日も足らざらん、吾人深く先繰して、渠等の胃を痛め、酒亂をはじめ、酒に身を果さんことを恐る、此際温州の爽かなるか、若くは密柑の清々しきありて、其醉腸を洗ふを得ば、點心の功も亦大ならずや。

檄

羽

しさは、せに至らぬも、濁醪中一點の紅梅餅、また以て酒腹の力なきを救ふに足らん、併しながら、吾人元來山の手の小賣商人、吾人の店に貯ふる所、何ぞ大身の口に適はん、願ふは八方の大雅たち、吾人の志しの在る所を知らば、幸ひに君が後園の寶果を投せよ、敢て西洋果と日本果とを問はず、又分量の多きを欲せず、所詮吾人の本意、下戸に食はせん、の心にあらす、下戸にのみ食はせん、とならば、別に菓子店を開くもよし、日就社は菓子店にあらす、廣く世人をもてなすと、共に殊に上戸にすゝめんとす、今の上戸多くは、點心を屑とせず、況して忙しき最中能く、點心に及ぶ上戸幾人かある、投票家願くは、此意を酌みて、唯一顆若しは、一きれ、少きは、ど更によし、願くは、投せよ。

檄

幸ひに社友より、已に寄せられたる、點心二三盆あり、分量此のくらゐが可し、見本として、左に掲ぐ

大家取調委員——我國人シエリクスピア、スヰフト、パイロン、スコット、リットン、の輩、貴國人の最負にあづかり、毎々引合に出さるゝ、段名譽の至なり、然る處、往々筋違の比較履歷等、これあり、我輩の迷惑、勘からず、向後は取調委員を設け、確なる報道を得て、後渠等の名御採用下されたし、敬具

築地 英國人 〆 〆

近松社の設立を望む——吾人の近松に於けると英人の沙翁に於けるとは品こそかはれ崇拜の度頗る似たり只彼は批評的に沙翁を研究し我は多く近松に心酔す沙翁の作も悉く美ならず況んや近松をや名に惚れて實を見わけぬは至愚の業也若し眞に近松を愛せば其作中何々が最美なるか又何故に最美なるか又年代よりいへば何々が壯年の作にて何々が晩年の作か又其間に作者の技術觀念見識等が如何に發達し變遷せしかを調ふべし壯年の作には活力あれど老後の作は生氣なしといふは詩文の妙を以て放逸なる想像にのみ歸するものなり沙翁の壯年の作を讀みて晩年の作を讀めば殆ど別人の如し蓋し沙翁と雖も人及び人の運命を知りしは晩年の結果なり吾人は年代的兼批評的に取調べたる近松院本論を得んを望む又之を研究する近松社の成らんことを望む

淨瑠璃生

我國終にシエークスピア無からんや

詩かぬ種は生へず習はぬ經は讀まれずと知りながら兎もすれば浩歎して我國俗は意地無きか今の政治界にグラッドストーンを出さず又文壇にシエークスピア

ヤを出さずと罵しること傍人の無理といふべし我新文學はまだ漸く十何歳にも足るまじきを物にならぬとて咎むるは酷し焉の鷹を生むといふ話あれど天下何の處にてか鷹に鳩はぬ焉が鷹を生みしグリーン、マアロウの次にシエークスピアの出たるフト見れば不審なれどグリーン、マアロウの徒素より唯の焉にあらす又當時の英吉利は鳥の居ぬ郷にあらす燕雀ならぬ許多の大鳥已に大空に舞ひつゝありしなり現にモリア、ワイヤト、サルレー、サッセル、の輩前後相ついで新思想を啄み新詞文の巢をこしらへたりきされば徳孤ならずシエークスピアに隣つてスペンサル、ベーコン、ロウレー等の出しを見てもエリザベス文學の偶然ならぬは知らるべし又近世のはじめには何の文名も無かりし獨逸國にギョオテ、シルレルの生れたる是も不審の一ツとすれど由來を究むれば何の不思議もなし蓋し彼等に先だちしウヰンケルマン、シロプストク、レツシング、ウヰーランド、ヘルデルのどもがら豈唯の文人ならんや我國俗は兎角に短氣にて物の因果を追ふことをせず彈を見ては鳥を炙らんことを思ひ俗にいふ生れぬ前のむつき定めす扱こそレツシング、シロプストクの出ぬうちにギョオテを望みサルレー、マアロウを得ぬうちにシエークスピアを待つ望の成る難いかな且

や人は自由の勢力といへどそれは社會を船に比せば船を遲速するの力あるを
 いへるか、全く自然の潮流に逆つて舟を行らんこと思ひもよらず、シェーッスビ
 ヤも一個人として見れば天然の詩人の如くなれど社會の上より見れば時勢の
 生みし子なり彼の女王の世にあらずば彼を生む懐のあらんやうなし其他ソル
 バンテス、ローペ、カルデロンの西班牙に出しも時勢の力與つて多きに居る識者
 の耳にはかゝる事入るも管なれど忙しさに忘れたる人の爲に言はんそも第十
 六世紀の末に英吉利文運の盛なれば其由縁一にして足らずまづは天下の大勢
 なり彼の學藝復興といふことが伊太利には始まりて全歐に及び次第に中古の
 暗を破り新思想と新想像とを此國に齎し人の心を富せしが一ツ又ルーサルが
 唱へ始めし宗教改革の餘波こゝにもあふれ宗門の觀念の一新せしが一ツ又女
 皇を失はんとせる謀叛人續々滅び遂に女皇の大敵たりし蘇國女王メレーが難
 なく刑臺に落命し加之舊教の棟梁西班牙王の大艦隊が元寇の如くに攻寄せし
 を神風に吹覆へし悉く破り退け國土平隠新教安固となり英人の志氣振ひしが
 一ツ又冒險者輩出して屢々萬里の遠洋に旅し若くは不毛の異郷を踏み國の智
 恵と富とを増し國自慢の氣盛なりしと共に女皇を國の本尊として崇め重んず

るの念厚く上下自づから一致せし等さまの因ありて扱人の心に餘裕を生
 じはじめたまことの文學に心を潜め人生の批評に従ひしなり夫の中古時代に
 は人々天國の尊きに比べて人生の慕なきを卑み人を研究するの趣味を認めざ
 りしが當時の英人は然らず又夫のアン女皇の朝には人々首府にのみ意を注ぎ
 てさながら人生に限界を立てしが當時の英人は然らず蓋し彼等の留意せし所
 は人間全体なり人間の善惡、人間の短所長所、人間の笑及び涙なりき扱人々が斯
 くの如く人生の留意せる時代となれば人の想像はれのづから人生に向ひ人生
 の活畫を得んことを樂ひとりづの境遇中に喜怒哀樂の描きいだされたるを
 見んと欲す此に於てか希臘人が悦びし單樸沈靜の彫像又は單純なる情懷のみ
 を表する抒情詩又音樂も當時の人間の心には充たすされば人の性格を緯とし
 人間の運命を経とせる脚本といふもの自然に此時に生れいで國自慢の氣が國
 人を鼓舞せる時に當り鬱勃たる新想像を驅つてシェーッスビヤ、フレッソナル
 又マッソナルを生むに至れりさすれば當時の文運の興隆を國家の餘融と國
 自慢の奮發とに歸するも誣言あらずかゝる例尙あり西班牙の文學もまた之に
 よりて發暢しきといふべしソルバンテス、ローペ、カルデロンの輩出せしは實に

チャールズ五世帝が歐洲大半に君臨して剩へ且亞米利加新陸をも統御せし時代なりき西班牙王國の威光の赫々としてかゝやき列國懾服せし時代ありきされバこそそのころ中古文學の陳套を打破して奮然新文學を開きし者は時に干戈を操つて武功をあらはせし勇士ありき然り當時の文人大かたは武人にあらざりしはなし必竟西班牙の文學は士氣奮發の自然の餘波あり
つらく我國を見るに君子國日本等の名已に尊し國自慢の念の吾人同胞の胸に鬱勃たるは必然なりまかも維新以來歐米の列國と競争して未だ付て追つかず辛く追すがりて後れざらんとするのみ息きれ口渴き殆ど息ふにいとまなし已に息はん違かし何の餘融かあるべき已に追つくに及ばず何の國自慢士氣の奮はざる自然の果のみ然るにことし國會成り我が局面一變し少くも外象は歐米の列國に匹敵し内質も隨つて進まんとす士氣奮はざらんとするも得んや況んや明治廿三年以前に許多の文人輩出し新文學の種を蒔きおけるをやエリサベス時代の第二期大翻譯大論文大著述の時代將に咫尺に逼らんとす英人ブルツク、エリサベス文學の第二期を評して曰く千五百八十年以後の英國は喩へば血氣の青年の如し當時の文字には少壯の原素充滿し殊に詩は戀愛荒唐を旨と

し想像をほしいまゝにせざるかし然れども其次の程度に至れば英國の氣格稍々老成し従前は題目の奇を求めこゝかしこにさまよひし心も漸く專に國家に注射し愛國の詩歌盛に興り歴史院本こもく出づ是れ英國文學の丁年時代也扱其次に至り國人の思想更に内に向ひ深く人生の批評に留意し主觀的の著作盛んに出づシェイクスピアの晩年の作(悲劇)は此大勢に伴へるものなり云々と今我文學を見るに此評に中る事甚しとせず嗚呼我國遂にシェイクスピア無からんや但丁年の時代の今漸く來りつゝあるのもどかしきを奈何せん今の物識の務はみづからシェイクスピアとならんとせずして世をして早く丁年とならしむるにあり吾人今の文壇に未だシェイクスピア其人を見ずまかれども國をして丁年たらしむる力ある人の未だおのれを知らずしてみづから大詩人たらんとして空しく名聞に驅らるゝを見る嗚呼渠等何ぞ奮つてシェイクスピアを作るの道を開かざる全國人を老成せらしむることを力めざる
若し我國の大勢が大に文學の興隆に適せば吾人豈辯を好んで知れたる事をかしましくいはんや明言すれば吾人尙心の底に幾分か將來に恐わり何ぞや國會の開設は未だ以て我國俗の國自慢を鼓舞し士氣を奮發せしむるに足らざるべ

しと恐れたり彼獨逸國の文學の如きは全國が外國に凌辱せられ挫折分離せる時に起りしがそは國自慢の裏ともいふべき國辱を恥づるの念に由來す現にシレルの如きは毎篇自由獨立を歌ひて時に統一を唱へしにわらずや我國の有様を見るに條約の改正未だ成らず國辱はた雪がれたりといふ可らずまかも我國の受くる所の耻辱は獨逸國のもとの日を同じうして語りがたし故に之を愷くの念割合に柔弱にして或少數の人の外は口には之をいふも念底には掛けす優悠として白駒を往かしむ吾人ひそかに恐る此体にして續かば當時に慷慨して自由を歌ふシレル未來を看破して人生を語るギョオテは更あり當時に失望して前人に戻らんとする懐内回顧の詩文人すらなほ終に出でざるべしと嗚呼國自慢の念いまだ十分に高からず國辱を怒る心も亦未だ大ならず我國終に大詩人を出さざるか

何ぞ然らん國粹保存の折木の響は愛國心のしのゝめを告ぐる聲あり平民主義の鐘の聲は自由獨立の曙光を報ず條約改正論の沸騰廢娼論の湧出其の何れが是なるかは扱措く其由來せる源を問はば何れか國自慢の礎を置く者にわらざらん國會の開設には吾人未だ文學上よりして大に重きを置く能はず頼む所は

先覺先進の利他精進の行ひなり願はくは渠等をして己を棄て榮利を離れ國の老成を圖らしめよ國まづ丁年たらんか我國終にシエーッスビヤ無からんや

擬投書

女の髪と文章——式部の垂髪一丈あまりらうたげなれど今に向かず物語の文章みやびやかかれと當世には用ふる所奇し鍋町形馬琴調と共に廢れて束髮の和洋折衷これもまだ氣に入らずガツッリ島田爲永形と卑まれイチヤウガヘン新聞の續物と輕んせらる何時いつの間にか流行る倉前風これ元祿に戻る前まへ驅か此どころ女の髪文章にのッこされしが今に見よ岩佐又平の女繪目の前に躍るべし女の髪と文章の道行これを退あきら歩りといふか何の……女房娘の心經は文人の心經と五分くの忙しさ斯でも無しあゝでも無し釣た曲つた下ったと鏡と脱はなくら工風盡て錦繪と相談艸雙紙を参考書これかあれかと新しん形がた狩が皆美形を作らうといふ心也誰は誰にかふれた又まねたとそしるは不了見なりまねる人なくかふれる人なくバ銘々の丹精その場ざりとなるべし我も彼も互ひにかふれ佳いどころ採りあうて扱あ好いた格好のお髪が出來ます落れば同じ谷川の水也文章と

てもその如し元祿文をかく人言文一致を書く人翻譯體をかく人折衷體をかく人皆是素絹を作る人あり古人繪は素よりすといはれたり素を作る丹精結構至極あり東髪流行ッて衛生に心づき鍋町麿ッて上品を旨とする如く代謝するさまの文体いくらか好き跡を残さるべき只一言の注意は後から見ても美形前から見てのびっくりはまだよし女房にしてから去狀はかきたくなし

尾花屋生

明治廿二年文學上の出來事月表

こゝに文學といふは重に小説をいふ也小説に文學の全稱を冠らすこと不當なるに似たれど今の小説は新文學の骨髄にして大に在來の和漢文に異なる所あり吾人は未來の日本文學の要素が多く此部門より作らるべきを信ず故に此杜撰あり

一月 『國民の友』の初刷に端物小説三種を附録とす美妙齋主人の『蝴蝶』春のや主人の『細君』思軒居士の『探偵ユーベル』繙譯皆悲哀的なり讀者或は是を奇とすされども譯ありしにわらず『國民の友』に小説の附録を添ふる事

これが始なり○『新小説』といふ小説雜誌思軒居士竹のや主人南翠外史等を主筆として發兌せられ『都の花』と並び行はる彼には素性の明かならぬ若年の上手多く此には有名の老成家多し○此頃より冊子小説或り端物小説殖に大概は雜誌を舞臺とす○文章彫琢の必要人も言ひ當人も感ず隨ッて糊口の爲に書く人減り名の爲に書く人殖ゆ

二月 前年美妙齋主人思軒居士などが論せし韻文論またナヨト波だつ忍月居士、岡外漁史、池袋清風其他二三の新聞紙これにあづかる岡外漁史の論を讀みて「へーそれでは西洋の詩にも平仄のやうなものがありますか」とはじめて驚くもの澤山あり

三月 『我樂多文庫』改良して『文庫』とある文壇の梁山泊惣出西鶴の羽ばたきソロソロ世間にひびく

四月 向島に小説家の小集あり老成家新聞に關係したる二三十人集る曙女史万緑中に一點紅を現す○『國民の友』大家玩讀書目十種といふものを掲ぐ當代名家の畧傳として價値あり

五月 此頃『女學雜誌』頻りに文學を論じて『美即ち善』の説を主張す極實派の反

動漸く起らんとす

- 六月 之より先『新著百種』といふ一冊讀切の端物小説毎月のやうに出づ紅葉山人の『色懺悔』つづいて竹のや主人の『堀出しもの』出づ○學海居士の作『文覺勸進帳』といふ脚本多少の改刪を経て梨園に上る居士の脚本今までにくらもありしが公に首府の檜舞臺に登りしはこれが始まり又學者の作が芝居となりしもこれが始めなり
- 七月 竹のや主人が前かど新聞紙へ掲げし小説及び續き物『ひら竹』といふ題號にて此月より陸續出づ南翠外史の『こぼれ松葉』出づ同じ由來の物也これより竹のや主人の妙廣く知らる
- 八月 『國民の友』の夏期附録にのびの社中作の『おもかげ』といふ韻文(翻譯)竹のや主人の『良夜』(小説)思軒居士の『消夏漫筆』北邨散士の『流轉』(小説)掲げらる○時に政事上に於ては條約改正論の熱度極點に近づく文學界には何の影響も無し
- 九月 『女學雜誌』大に小説及び小説家を論ず○西鶴文次第に流行し言文一致少しく下火とある

- 十月 和漢洋三体の文を調和するの必要衆の感ずる所となる又時の文學の花多くして實の少ききに心づく○高田早苗、岡倉覺三、森田思軒等盡力して演劇協會を再興す土方宮内大臣會長たり其の發會に學者の作はじめて公に講談師落語家の口に上る○是より先裸美人の畫坊間の繪草紙屋に一ツさがり二ツさがり遂に澤山さがる道德家慨き美術家呆れ兵士喜んで買ひ書生ソット買ふ而して其由來を『國民の友』の初刷に歸する者あり吾人伴てツラの佛國に出たるをバ佛國の腐敗に歸せしものあるを開けり未だ佛國の腐敗のツラに由來するを説くものを聞かず○『文學評論』しがらみ草紙』といふ新誌ののび(新聲社)より出づ國外漁史落合直文等これにあづかる
- 十一月 此頃元祿文殊に西鶴熱頂上に達す隨て文章の巧拙を評する者四方にあらはれ文派の分類をあす文章の宗門を作る笠村宗思、軒宗、徳富宗等の名此間に定まる
- 十二月 之より先三昧道人飄然關西に去りてかしの文學を御せしが此月『新著百種』中へ『松花錄』の作あり爰に出たる露伴子の『風流佛』と共に古風

にして嶄新雙つながら文章の珠を聯ぬ○北邨散士』しがらみ草紙』中には慨然小説家の責任を説く

以上洩れたる事定めし多かるべし爰には只思ひ出づるまゝを掲ぐ若し文學界全体に影響せる事又は全體に影響せざるも其反動と思はるゝことあらば願はくは記して寄せたまへ

明治廿二年文學界(重に小)の風潮

昨日の叢譚に二十二年に於ける小説界出来事の月表を掲げしが漏れたる事多ければ爰に思ひつくまゝの評論を加ふべし先づ言ふべきは昨年の文學論の傾きなり他の振を見て我を直うし史傳を讀みて身にひきくらふるは哲人のする事なれど社會全体に係る事となれば兎角他事として回顧かへみぬ向もあり斯くして進まば一個人は過あやまちを再びせねど社會は過あやまちを繰返すこと無しとせず我人身の程を思はずしてこゝに昨年を回顧かへみるは聊かさる向の注意を喚おこぼんとてなり扱昨年中の文學界(小説界)の經歷を見るに理想上より言へば不満足ふまんじくの事多ければ比較的ひかくてきに言へば喜よろこばしき進歩を見たりといふべし實際上其上の進歩を

望むことは叶はざりしなり當年文學の木鐸となり意識して又は意識せずと輿論を導かんと力めしは重に『國民の友』『新小説』『都の花』『文庫』『女學雜誌』等なるべし就中『國民の友』の初刷に三種の端物小説を載せたるは一時の談柄となりぬ『裸蝴蝶』の噂高かりしを見て世の注意を惹きしは知らる且件の端物以來世間の小説が總て端物形となり前年の如く冊子の小説を出すこと稀になりぬまかれバ斯短くなりしは『國民の友』の影響かといふには自ら別の理由あり他なし此以前より文章ぶんしょう推おし敲きの必要を感じる者又之を説く者交々出で暗に糊こ口の爲に書く俄文客を抑おさへたり『國民の友』の推敲論(築水漁夫)の如きは其殿なりきまかにるに大手腕あるにわらずバ長篇を推敲せんこと難ければ漸く名を重んずるの餘り小説次第に短くなれりさりながら此現象には尙外に理由あり一ツは社會が骨の無き長物にあきたると一ツは小説雜誌流行して作の短かきを貴たがひしが故なり此點に於ては『都の花』及び『新小説』が模範を與へたりといふべし以上理由はさまざまなれど統括していふ時は世人の目漸く肥こねて文章ぶんしょうの妍か醜いに心附きしと著者が其名を大切に思ひはじめとしに因るこれより文章ぶんしょうの彫てい琢てき盛さかなり此年中に出し高田早苗の『美辭學』今村長善の『文章哲學』は恰も時に適ひたる著作

文章の彫琢盛なると共に浮華虚飾の弊相伴ひて來れり心ある人は早くも看破して眉を顰め民友記者が文學の目的は人を樂ましむるにあるかど論じて文學の定義に主觀客觀の別あるを述べて文士の任ずる所更に高かるべきなりと言ひしは明言なり讀者に悦ばるゝは文學の受性をいへるのみ玩ばるゝが文客の本意にはあらずされど民友記者の言も何等の反響を文學界に聞かざりき斯くて四月に至り長谷川辰之助が『文學の本色及び平民と文學の關係』といふドブロッウボフの論を譯して浮文を誡めしも同じ着眼より出しあらん是また何の反響をも聞かざりき六月に及び内田不知庵『詩文の感應』と題して詩文の妙は風姿にあらずして風情にあり徒に彫琢を事とせば六朝の浮華とあり明代の輕佻とあらんと論じ後又『文學の粉飾』と題して其漏れたるを補へり是亦時弊を痛むの文あり其他民友記者の『愛の特質』を説いて我邦の小説家に望むといふ論文も源は同じ不満足の泉なるべし扱年末に至り北邨散士の『小説家責任論』いで眞理の發揮人生の説明及び社會の説明をせぬは小説にあらずと説き宇宙主義を唱へたる是また時弊を哀むの餘か扱此間女學雜誌が嚴然『善美唯一主義』を主張し屢小

説家を誡めたる其の論の道行こそ異かれこれも時弊の反動あり夫れ傳導師は斯くの如く多かりしが昨年の暮果つるまでは廣く當局者に向つて感銘を與へたりとは思はれず
兎角する間に文章術の進歩驚く可きものありき言文一致は次第に成長して家を成し且自づから數派を作れり一ハ山田美妙齋を祖として歐文の原素多く一は尋常の談話を体として俗に近し思案柳浪漣などの文体は是なり二葉亭と四外とは前の二派とも異かりて又相同じからず而して其門徒に乏し其外二葉亭の体より出て更に一派をさせるが如き嵯峨のやの一体あり細別せば限さしされど去年中最も盛かりし言文一致派は第二派即ち文庫派のものなりき扱言文一致の技倆右の如く上達せしと共に他の文体の技倆も上達し森田派の翻譯体紅葉派の折衷文ますく精緻に近づき加ふるに淡島に西鶴を噴出する等の事ありしかバ文章を重んずるの傾きと文學界の反動とが相合して言文一致熱大に弛み『讀賣』の竹のやが文章の小道具を嘲倒するや輿論大に在來文に向ひ冬季に及び蝸牛露伴天外より飄落して『風流佛』を出すや西鶴熱白熱度に達せり隨つて『むら竹』の陸續出づるや竹のやの信仰者俄に八方に湧出し笠村宗の名噴々

たり蓋し輿論の目大に文章に肥ねたりしなり併ながら此間翻譯文の本家及び言文一致の本家は敢て衰へたりしにわらず又其信仰者を失へりしにわらず思軒の『探偵ユーベル』『伊太利の囚人』若くは湖處子の『故郷』『此家』及び『行樂』の如き又は美妙齊の『いちご姫』の如きは文を好む者尙其技を賞して讀めり只當時の輿望に合はざりしのみ之と同時に新體韻語に關する議論文海にさゝ波を起しき韻語論はこれより先前年中既に或人々の折折に唱へし所にて其筋の者の注意を惹きしが當年一月に至り池袋清風の『新體詩批評』といふ長文出たり彼れは所謂『博士派の新體詩』を刺り且和歌に押韻の難かるべきを説けり三月に至り忍月居士の譯詩『まばく』出づそは無韻にして無調なりしかバ論者多くは之を非とし『日本』讀賣等の新聞に非難の聲きこゆ遂に『獨逸文學の隆運』と題する短編の詩論出たり西詩に平仄あるを公示せるもの恐らく漁史がはじめなるべし扱六月に及び森三溪の『日本詩文論』出で支考許六芭蕉等の和詩を引き押韻の難からざるを説く八月『國民の友』の夏期附録に『新體譯詩あり譯詩の法丹精を盡せりといふべし然れども褒貶双つながら高くは聞はざりき思ふに多數の人は精讀せざりしならん此のはかにも二三の先覺が工風を凝らせし

跡見にたれども總て世の中を搖かすに及ばざりき要するに新體韻語に關する意見は少數の肺肝に蟠まれるのみにて未だ大方の同感を得ざりき喩へバ水を盛れる藥罐の火にかざされて久しからざるが如し沸々の音尙微なりと雖も程なく騰昂する時あるべし但し此熱騰せる水によりて靈妙の詩想を融化するの日は未だ豫め期する能はず素絹未だ成らざるの日は繪の巧拙を語る可きにあらず嗚呼我新詩人は二重の困難に當る者なり『詩式』を定むる『と妙想を生む』との二ツあり吾人は本年に於ける韻語の前途を刮目して看んとす
以上言へる如く文學に對する輿論の傾きは文學と文章とを同視するにありき其證の一二を言へバ冬季に及び『女學雜誌』に『近體文章三家』として徳富森田、櫻庭の三氏を挙げ後又『近體文章十家』を挙げ『東西新聞』に『小説八宗』として重に文章を論じたる若くは『小文學』『文庫』等の雜誌に見はたる批評の専ら文章を褒貶したるかど何れも文章を主とせるあり扱又元祿文の行はるゝと同時に元祿物の價高まり貸本屋、古本屋、利益を得、翻刻熱また少しきさせしが甚だしきには至らざり

明治廿二年の著作家

明治廿二年の著作家

昨年中の小説家は從來の作家に比して數十歩を進めたりしや明かなりされど所謂進歩とは文章の上にして觀念の上にあらず觀念の上より言へば當年の小説は依然として局部小説なり即ち或社會の人物或社會の事件或る一種の情操等を描くに力を盡して全局(即ち人間の運命)に留意せしもの殆ど無かりき然るも一体に文學の理想は技量と共に高上となり四五年以前には専ら脚色に泥みし向も今は人間の性情に留意し人柄を描くを大切とせり是實に著明ある進歩あり併しながら尙ら當年の悲哀小説を見るに先づ泣いて後に立案せしものは殆ど無く立案して後に泣きしもの多きが如し作家の目に涙あつて後に悲哀の人物の成りしにあらで悲哀の人物を作りて後に作家強ひて涙を絞りしかと思はる春のやの『細君』の如き其一例なり美妙齋の『蝴蝶』も巧なる丈に同じ非難をまぬがれず

當年春のやは筆を絶つて退隱し年の暮まで何事をもせず又二葉亭は『浮雲』を中斷して雲間に隠れたりされば此二人は當年の小説界に殆ど關係する所あかりき此間雄飛せるは美妙齋を筆頭とせる『都の花』の諸家、思軒、竹のや、南翠を主筆と

明治廿二年の著作家

せる『新小説』の諸家、紅葉山人を筆頭とせる『文庫』兼『新著百種』の諸家、お八重及び『露子姫』を著はし且常に批評に従事せし忍月居士、風流佛』を著して忽ち英名を知られたる露伴子、關西を席卷せし三味道人、獨り脚本壇を占領して優然たりし學海居士、専ら小説の翻譯に従事し時に文學を評論せし關外漁史等其尤なるものなり其他そこべくあれどひとり特別の社會(新聞社等)にのみ力ありしは除くさて以上の諸家何れも特質あり長所ありて素より優劣を定めがたく將た巧拙を論ずるの要なし只一言公平に言へば前にいふ欠點は多少諸家(翻譯文は除く)共にまぬがれざりし所かと覺ゆ蓋し昨日の叢談中に言ひし文章彫琢熱の八方にひろがるや勢の至るところ安然たる大家と雖もいくらか傳染せし所無きを保せず一呵して十編立どころに成るといふ竹のや主人だに彼の『良夜』と『堀出しもの』どには稿を更へしかと思はるゝ節あり吾人はド、ク、キンシーが六十度下書きせしこと又はマコーレーが一句半章を綴るに數十卷を参考せしことを知るものあり決して彫琢を非(わづ)まとは言はず只彫琢の重に文章体裁等の上にはばかり用ひられしを憾むのみさればこそ當年程題號、文体、趣向、人物(編中の)表装及び体裁に工風の費されしこと近頃稀なり尤も作家自身は或は心附かずせしものあり

明治二十年の著作家

らんされを傍より見れば玄か見ゆるなり喩へば『色懺悔』の題號已に奇にして文体趣向人物二人尼亦大に奇なり又竹のや主人の自傳体已に奇にして例に似ぬ真地目更に奇あり其他『いちご姫』の着想頗る奇にして『風流佛』また真に奇想なり或は題號の奇あるあり或は体裁の奇あるありおしなべて皆珍らし吾人素より珍らしきものに飢ねたり豈文學の嶄新を喜ばしく思はざらん只其珍らしかりし割合に讀者を感銘する所深からざりしを憾むのみ案するに趣向文体等は小説の肉なり肉に入る力六分からば魂に入る力四分となるべし慾には魂に七分と思ふのみ只それだけの事なり併し斯くあること一方より見れば文學製造時代(過日我國遂にシェーッスピア無からんやといふ叢譚にていひし)の自然あり作家の庸劣あるが故にはあらじ

必竟昨年の小説は概してセンシメンタル小感情的のものにて廿五六才以下の心に面白かりしものあり然らざれば『Not inspired, but made』なりされば『風流佛』に於て一種の光明を認めたるの外人間の運命を語れるが如き作殆んど嘗て見當らざりき是或ひは讀む者の目の至らざるが故か其が中に北邙散士の『流轉』は流俗を脱したる高潔の觀念を包みしや明けし只想像の火よく此の觀念を燃やして炎々たら

明治二十年の著作家

しめしや否やを疑ふ扱小説家のみならずおしなべて言はんはんに昨年は一〇個人競争の時代なりき岡目より見る時は互に奇巧を闘はせし跡掩ふ可らずされば人々の批評を試みるや言ひ合せたらんやうに文壇を戦國に譬へけるも故あり但し當時の戦は南北朝の戦にもあらず朝敵征伐にもあらずむしろ生存競争の戦ひありき作家皆思ひくく據り守る所ありしならんまかも斯文の爲に是非せずしてれのが嗜好によりて是非せるもの多かりしに似たり批評家の中にも此傾き多少見ねき批評が主か、奇論が主か、文章が主か、譏るが主か、將た戯るゝが主か分別しがたきもありき併しながら此等みな文學製造時代(i.e. 新案提出時代、材料採集時代、美醜ふきわけ時代、素絹製作時代、筆ならし時代の止むを得ざる勢なり只願くは今年は素絹の製造を止めて徐ろに繪の事に取かゝり作家は造化の觀察に入念し批評家は過日言ひし如く大詩人を作る下としらへに社會を老成とならしむべし今の諸家の伎倆は已にラム、フォンテインたるに耻しからじ此上は『ハムレット』『失樂園』又は『フハウスト』の如き大觀念を入るゝ頭腦こそはしけれ

新聞紙の小説

友を擇ぶに初見參の判断は先入主となるといふ恐れなければれのづから見違ひ勘しとは古人の言なるが是一理にして純理ならず直覺の効能は人にこそよるべけれ無經驗の少年が始めて偽君子に見えんに争でか偽徳を看破し得べきさればとて親み交はること深ければ魚肆いさなやに寄宿して腥きを忘れ藥種屋に奉公して藥臭きに氣づかぬが如く醜きをも妍うつくしと見るに至らん只夫の粗忽ならずしてかたよらぬ目にこそ眞の判断は存すべけれ社會の事を見る目にも間々此例のあてはまるべきあり夫の新聞紙に始めて小説の載せらるゝや世人多くは目を見張り新聞紙は新しき事實を報道すべきものなるに事ふりたる作物語を掲ぐることに於てある可からずなぞ罵る者多かりき然るに西洋の新聞紙にも小説はありと噂するに及びて非難の聲いつしか消ねつ今は嚴めしき向の新開紙の外は何れも競つて小説をかゝぐさすれば初め小説を斥けしが道理か後にこれを容れしが是か何事にも西洋の手振が後楯となるものならばバコーセツトもよし決闘もよし裸体像もよし壯麗の私娼もよし賄賂もよし秘密選舉會もよし

新聞紙の小説

吾人思ふに新聞紙に小説を載するのは是非は西洋の手振に問ふに及ばず新聞紙の務は素より報道のみにあらねば讀者の娛の料を作るもよし但し新聞紙の讀者は少數人にあらずして(内實は兎も角も表向きは)社會全体なれば賢愚老少男女を問はず皆新聞紙を讀むといふことを忘る可らず是新聞紙の冊子と異なる要點にして冊子の著者と新聞紙の記者と用心を異にすべき所以なり或意味にて言へば冊子は割合に有限なる讀者を有し新聞紙は割合に無限なる讀者を有す第一冊子は價も貴く又品によりては専門家にあらざれば買はぬものもあり新聞紙は然らず些も雅心みやうしんなき者もフト買ひとりて讀むとあるべしされば記者にして注意せざれば娛しませんとして不快を覺はさせ益せんとして害を蒙らせ思はぬ罪を作るとあらん蓋某の調理の長信の口に適はざりし如く奈良茶を嗜む口はヤタイチの下物に舌鼓は打たじさのみならばまだよけれど支那料理の膏濃きは日本人の胃を痛め小兒の喫烟は動もすれば暈めまよを起さしむ就中小説は少年の注意を惹くものなれば記者力めて當世に注目し社會と我との關係を察せずば不本意の危害を醸すことあらん若しかの美術といふものが絶對的にいはるるものならば吾人は信ず裸体美人の像も淺ましき筋の書も其手際だに

新聞紙の小説

新 聞 紙 の 小 説

巧妙ならば或は美術の仲間に入るべしと併しそは絶對的にいふ美術の上にて社會に見すべきものにはあらじこれを絶對的美術家は美ともせんさりながら廣くいふ社會には階級幾段もありて人の品さまなり雅人は鹿の聲を聞いて秋の哀れを知り獵夫は同じ聲を聞いて彈藥を取出す祇園精舎の鐘の音も沙羅雙樹の花の色も見聽く者の心にこそよれ人さまの见解作者の思ふやうならず木下藤吉郎の所行は時に借倒しの口實となりお七お染の身の果は間々同感を喚ぶにわらずや蓋し諷刺は高尚なる謎なり只の謎さへも智恵なければ解きがたし況して高尚なる謎の誤解すれば害あるものをや是を賢愚混淆の社會に見するはわやうさことあり兎に角に新聞紙の小説には吾人かゝる作の載せられざるを願ふむしろ有益にして面白きものか又は無害にしてうるはしきもの佳し斯く言へばとて吾人敢て勸懲主義を復興せよといふに非ず社會と新聞紙との關係に留意し禍の種を蒔かざれといふのみ此筋の議論は夙に『報知新聞』が論せしことあり又『女學雜誌』が論せしことあり只彼と此と異なる點は彼は此論を小説全体の上にいひ吾人は新聞紙の小説にのみいふ是には深き譯われを論の横道に入るを忌めばこゝには悉く言ふに由なし只一言いへば冊子とす

新 聞 紙 の 小 説

る小説は新聞紙のものよりも用心刻鏤すべき餘地多ければおのづから誤解せられぬやう本意を明かにするを得べし又讀者を限るを得べし喩へば我『讀賣新聞』は身しき記事なしとて今の大方の愛讀を得たるが突然若し身しき小説の我欄内に上ることあらんに親達敏く之を認めて其子女の讀むを禁ずるを得べしや老人は多く小説を讀まざるに要するに新聞紙の小説は冊子となれる小説よりも一倍の責任を負へるものも也さればおのづから不自由多し尋常の小説家の如く樂屋落をいふこと能はず何となれば讀者は多く他人なればなり又大に溢がること出來ず何となれば讀者は多く俗人なればなり已に此不自由の牢屋の中に在り渠争でか他の小説家と伎倆を比角することを得べき蓋し新聞紙の小説は純然たる文學的小説を以て見る可らずよし美術として欠くる所あるも新聞紙たるの義務即ち廣く益し廣く樂ますといふ點に於て本分を盡す所わらば十分賞美して當然あるべし然るに怪しむべきは今の作者及び批評家あり後者は新聞紙の小説を以て兎もすれば文人を上下せんとし文人もまた之にかゝづらひて少數の褒貶に目張り耳たて數欄の小説を綴るにだに彫琢の苦勞尠からざらんとす吾人は此等彫琢の當

新 聞 紙 の 小 説

人の爲に益あるを知るも新聞紙の爲に社會の爲に益あるを知らず或少數の讀者の外は殆ど留意して讀まねばかり夫れ文學を益せんとせば世に其筋の雜誌多し彼の欄内に掲げてこそ色をも香をも知る人に遭はめ當世の景況を知らんとする新聞紙の讀者は概して題目を走讀して心を惹く所に目を注ぐ何の暇あつて賞鑑を事とせんさりながら當人の神經はさもわらんこれはまだ酌量すべし只怪しかるは批評家なりもと新聞に載せられて後に合本とありし者をさながら新作を評すらんやうに小説の體を成さずと罵る斯かる人はアル并ソグの『スケッチ』を讀みて小説にあらすと叱りアヤソンの『ローセルド、カブリ』を非りて支離滅裂の小説なりといふべし世間の文章は物語の體を成しさへすれば皆小説と思へるにや不思議かり新聞紙の小説家が氣にして彫琢を事とするもかゝる批評家のあれバからん罪は後者の上にあり

扱新聞紙と冊子とは大に異なる所尙一ツあり新聞紙も冊子も世の傳導師といふ點は同じなれど著作者の手心ココに相違あり冊子は哲學者の見識を以て高、大なる意見を吐き或特別の人々 (Picked men) に向つて傳導を試みるもわらん噲へバ世尊が羅漢に説法ありし如く劣等あさまの傳導師を教へんとて無上の大眞理を説

新 聞 紙 の 小 説

くこともあるべし新聞紙は然らず其聽衆は社會全體かり其中には匹婦匹夫も含まれたれば冊子の調子にて説かバ大聲俚耳に入らで何の裨益する所無からん是故に大見識の冊子は社會に先だつこと三百里なるも佳し新聞紙は當世に先だつこと多くて十歩に過ぐるは非しさればとて或新聞紙の如く自ら身を下して當世と同一水準に立ち只管無明の徒に媚を賣るは是れ傳導師たるの職を忘るゝ者かり吾人は斯かる新聞紙を目して商賈人といふ傳導師とは言はず尤も吾人も或意味に於て新聞屋の商人たることを知らぬにわらず然れども其善く賣れんことを願ふは其言ふ所の廣く世に益あらんことを願ふに因ると信ず若しまた然らで新聞事業は全く金儲の爲かりといはゞ吾人また何をか言はんそれは格別若し夫の新聞記者にして哲學者又は美術家を氣取らば是嬰兒あなごに向つて後主を説く者か然らざれば古器物を見せて誇る者かり渠未だ今生を知らず豈後生の大切あるを解せん又未だ現物をも辨じ得ず況んや新古の差別をや新聞紙の調子の冊子の調子より低かるべきは自からの必要あり彼の新聞紙に掲げしものを見て淺し拙しと譏るものは奇人おかしなひととして除て置くべし

兎に角に新聞紙の小説は若年家の注意を惹くこと多し隨つて其惹きかた良け

れバ益する所も多し故に廣く讀まれ且當日に讀まるゝが肝要あり是また冊子
 と新聞紙との異なる點あり夫冊子の小説は百歳の後までも傳はるべきもの新
 聞紙は大概當日一日のもの彼は後の知己をも俟たん此は當日に讀まれずバ全
 編合せて八ヶ月澁紙の下張とせられて怨を呑むも慶政の亡靈には似て臆
 とだに現れん期無し文士の文を作る素より名聞の爲にせざるべしさればとて
 讀まれずバ人を娛ませがたく將た世を益しがたし娛ませず又益せざるもの吾
 人其何爲者たるを知らず
 さらバ廣く讀まれんには如何にせば可きかといふに局部の嗜好に訴へて普通
 の人情に訴ふるに若かず普通の人情に訴ふるには下にいふ條々に従ふを可
 すすすれば第一作者の丹精空とならず且廣く娛ましめ益すると共に今の或種
 類の作よりも眞の文學に近かるべし
 第一 小説にも當世の事情を報道するの意を含ませ成るべく當世を本尊とし
 現在の人情風俗又は傾き等をしめすべし
 第二 誰が見ても同感し得べき事さなくとも多數の人に解る事即ち樂屋落に
 ならぬやうにすべし

第三 親子兄弟並びて讀むとも差支あきやうに
 第四 過去の事又は未來の事を種とせば成るべく當世と異なる點を今の人に
 知らしむるやうに
 第五 所詮娛ましむると同時に當世の有様を報道するか然らざれば多少教へ
 導く心ありたし
 此注文おそらくは無理あらん局に當らぬ者のいふ事當局者の氣に叶ふ筈なし
 出來ぬとならば其迄ありせめて新聞紙を卅双紙の如くしたくあし一体に小説
 の數を減したし少くも新聞紙らしくあきを

博覽會餘所見記

序びらき

此記の序びらきせよと盼附られて獨り上野の公園へ出向ふ晴るゝを俟ちかね
 て沸いでし人の雲何處捕へて何といふべきや辛うじてくゞりぬけて會に入る
 聴て人の氣にうたれてふらくどありしが蹈こたへ思ふやう觀るべきは先づ人
 かそも物か列品もめざましけれと此人出もめざまし此雜多の人種皆同胞と思

へば多少の感あかるべしや先づ見よ女性の髪、風、衣裳の好み、身のまはり、身分は同じ程と見ねたる男の衣類、持物、身のまはり、同じやうの貌したる人のさまざまなる語音、調子、言葉癖、都人士と地方の人の姿態の相違、斯くも思ひ／＼ありし例昔もありしにや堅氣らしき奥さまの畧式、素人姿せる藝妓、大年増の派手衣裳、腰元の羽織被たる、これらはいふも管々し、其他色あひの取あはせ、上被下被の好み何を本として定むるや變化餘りありて統一なし、美といはまくすともいはれまじき也、或はこれを自由の氣の溢れとして祝すべきかされど能く思へばこれら皆秩序に伴はぬ情の自由なり、爰に知る風俗、今思ひ／＼となりて昔謂ふ禮儀格式は殆ど其影を没せしことを但し此事衣裳身のまはりに留まらばいふにも足らじ、更に源あるを知らば誹りて止べきにあらじ

又一つ目にとまりしは衣裳身のまはりに賸物多きことあり、唐縮緬、觀光縮緬、綿南部、綿お召のきはだちたる、あかし玉、吾妻玉の著きは誰れの目にも知らるれど綿繻珍の艶までを能く似せたる、綿更紗の下被となりて微見ねたる、唐縮緬子織の匂ひの芳艶たる、さては鉛色馬爪の麗しき、賸珊瑚の疵まで似たる、素人が暫と見て眞物と賸物とを分たんや聞く昔は中以下の人も斯うは賸物をよくるこばざり

きと分に安んじてありければなるべし、今は然らず、小き借屋に住む細君も上被ばかり眞の糸織被て下被は綿物にて化さんとす、是れ何の故ぞ、贅澤を好む故か奢る者何條氣のひける賸物を用ひんや不景氣の餘波か貧しき者上被に大まいの財つかはんや、因縁は外にあるべし、此事も衣裳身のまはりに留まらば半欄を埋るの要なければ、其流行の及ぶところ重大かり見よ衣類の賸ひを見ては爪はじきして自分せぬ者は女子にもあり、然るに他の賸物を見ては當世の眞物とし、剩へそれに倣はんとする者、男子にも多數あり、これを何と評すべき夫れ眞物と賸とは其皮相は酷だ似たり、殆んど判す可らず、而も唐縮緬は風にあうてまなはずして搖き本縮緬は波うちて翻へるが如く、又は唐縮緬子織の艶匂ひの目ざましきも所詮はきはだたぬ本物の温雅しき徳は及ばざるが如く、事にあたり物に觸て終に正体を明すべしと、かや況て久しくせば、翁屋の香水庫と日本橋の魚市とは色の差あらんされど世には只一夏の晴を目的とし、觀光縮緬に近眼を化し、秋となりて鬢へハリ果はぬけいづる見苦しさを思はず、一向日前を飾りあるくもあり、扱も奇怪至極やと思ひつゝ、我身を顧みれば鼠色になりし袖口についたる金色鈕、いつの間にか赤みてあり、嗚呼、これも滅金なりしか知らざりしゆゑ

とはいへど我、我に對して耻かし、思ふに世間我とおなじく知らでかぶれたるも
多からん心づかば再び鈕を減金する勿れ我が初度の餘所見の記これのみなり
以て序びらきの詞に代ふ

其の二

昔シテカルテ家居櫛の齒の如く比び車馬人籟雷の如きアムストルダムの街頭
を過ぎりし時我は林の間を通過て梢を拂ふ風の音を聞きたらんやうにのみ感じ
きとぞいひし哲學者の心形而下の物にあらで其の概念するところ甚だ遠く深
ければあるべし吾人餘所見の記作らんとて往ぬる日博覽會へ往き此處かしこ
漫歩せしが眉の間茫々として壁へば春秋の花一時に咲いたる大室の中に入り
たらんが如く心惑ひ目眩み何の發明する所も無かりきそは前にいへる場合に
似て其内實の非なると鴉の卵の鶴の卵に似て非なるが如し思ふに我は平生の
觀念漠々たれば心無差別に外物に掩はれ何等の發揮をも得爲さざる也同じく
人にして我と彼れとの間には涙一滴と大海との相違あり耻かしといふべきか
口惜しといふべきか扱家に歸りし後役目なれば止むべきにあらねば目鏡もて
見たる鼻先の事どもつくづく思ひ出しつゝ書はじむされど書くこともくお

博覽會餘所見記

博覽會餘所見記

かしからぬことばかり也これを書きならべて何の用あるか書く吾さへ知らず
況て他は何といふらん例へば地方の人の可笑かりし風俗舉動二ツ三ツ目にあ
れどそれらは果して可笑かるべき筈のものか將た可笑しかるまじき筈のもの
か若し可笑かるべき筈のものあらば可笑かるべき筈のものを可笑しといふば
かり世の中に可笑しきは無かるべし若し又可笑しかるまじきものならばそれ
を可笑しといふ本より違へり思ふに當然の事は可笑しかるまじきなり然らば
假に田舎の媪が五千圓の屏風を見て魂消たりとせんか魂消るは當然あるべし
これを可笑と笑はで質樸と褒むべきか山間僻地の民何れの世にか質樸敦厚か
らざりし取いで、褒むるだけが野暮なるべしさあらば異様の服装、異様の人物
それを拾ひて寫すべきか、それは淺草の公園に小屋張る人のする事に似たり屑よ
からず然らば若き男女の見よがしに繋り歩きたる、又は見に来たりといはんよ
りは見られに来たりと云べきさまにもてなしたる、若しは物知らぬ癖にトナシ
ンカンの品評下したる、或は譏るを見識と心得てか見る物毎に口穢かくケナシ
たる或は斯かる品取るに足らずといひつゝも内心欲しと思ひたる、其他良家の
旦那の如く見せかけてあはよくバ他の懷中物赤はんと規ひたる、法律の罪人と

成ぬやうに工風して地方の人をわざむきたる、彼れはスリと知りながら後の崇を恐れて見ぬ振したる、第一本館の入口にて草臥つゝ歸る人を意久地無しと譏りながら其身も機械館見残したる、我がしれる貴婦人がさる帶地褻めて通り過たざるを見て即坐に其帶を約定したる、我受持ならぬと知るべきかといはぬばかりに物問ふ人に對して或る番人の不深切なる、無法に館内を廻りて道に迷ひながら會場の順路をわると腹立たる、我心にさへアヤフヤあるを確かさうに品評して同伴の人に講釋したる、人の心は様々なれば銘々思ひ思ひ當然ありと獨り領いて冷淡に通る過ぎたる、他人の鑑定ちがひせるを笑止に思ひそれは云々此れは云々ど一々深切に誤りを正したる、此等深切なる鑑定家が細些の事よりして口論をはじめそれが爲他を教ふると留主になりたる、これらの振舞をや背綴るべき否これとてもまた詮無し何が故に詮無き、世人皆知りたればあり毎日の觀覽人擧ぐとも一何千人渠等會場を往來して毎に此等の現象を見る、見て歸りて其知交に語る、今はしも此等の現象を詳知したる者日本國中幾千万人の多きに及びたるならん然れども何の詮無し渠等は吾人と同じく見知したるのみにて會通する所なければ也みづから詳知してすら詮無くは無會通の吾人の

觀察を語るども何の詮かあらん已に詮無し詮無しと知りつゝ、書くは最も詮無し故に書きかけたる五六枚を火中して筆を投ず

兄弟文學

ふたごの似たるゝ更にもいはすまことの兄弟の似たるもおかしからず當然のことなればあり他人のそら似こそいとゞ目に留るものなれされば陽虎の孔子に似たるソクテラスの痴人に似たる忘れられぬお伽草の種ありけり戯作の本に見えし繪兄弟晋子か輯めし句兄弟などまた其たぐひあるべくやさすれば詩文小説にも腹がはりの兄弟はあるべし思ひ出して見ばやと床ばきれわるとき此頃の朝の現にこれかあれかと思ひたざるうちに先づ思ひついたるを爰に掲ぐ強ち西洋と東洋とを比べんどもにはあらねど和漢の間にある兄弟文學は物しらぬ我こそ知らざれ他は夙に心附いておはすべしと思へば重に西洋種をとりて蛇足の評をも加へ短く筋書を添ふることもあるべし承知の人は見ぬふりせよ扱さやうの對照をもつして何の益あるかと詰る人あらば此頃の天氣上野向島御らうじたかと答ふべし

最初に掲ぐべきは

東 『西遊記』 作者 未詳

西 『天道遡源』 英人バンヤン

なり此二書は形こそおなじからね腹がはりの兄弟といふことは争ふべからず
扱双つとも聖人の教を種として小説の形とせるものなれば何れ此批評は吾人
凡夫の本領にあらねバ只皮相をそつといふべし就中『西遊記』は粗末の翻譯を續
みしばかりなれば意馬心猿の喩は何れのあたりにあるか藏神、藏聲、藏氣の三藏
とは何の事か毎篇あらはるゝ所の悪魔王は恐らく六根の障碍なるべしと思
ひ測りながら終に無明のへろへろ矢合點の金的に觸たらしき手ごたへもなし
只皮相の姿をいへバ『西遊記』は複雑にして豊富なれど『天道遡源』は單簡にして淡
泊なり此は浪蕩にして荒唐なれど彼は温雅にして當然あり此は殺伐にして賑
かなれど彼は蕭條として秋のごとし『西遊記』は誤りて讀めば他界の『水滸傳』と
なるべく『天道遡源』は引きおはして一部の社會小説とあすに足る、後者に見ゆる
人物は人間なり前者にあらはるゝ者は天魔たるに近し扱も其人物の人の如く
ならざるが寓意の更に深き所以かはた人間を見せたるが作者の詩眼の優れる

兄弟文學

兄弟文學

所か免も角も雙方ともに宗旨にかゝるアレゴリー(寓意譯)似たりや似たり花わ
やめとまでは出でたれど其後は洒落も出ず論もあし比較の沙汰は金次第と聞
きしがこれハ天道極樂の沙汰なればトント何の詮方も無しさりながら吾人内
々に疑ふ『西遊記』は果して噂の如く徹頭徹尾人間の説明を主意とせるものか凡
眼をもて見れば要あき笑諷とせす西洋に謂ふ神仙叢話に髣髴たる所多し
と思ふは非か恐らくは非あらん識者もし斯文の爲に半日を空らし『西遊記』の細
評を語らば其巧徳莫大ならん君子豪傑を本尊として空間廣くかけまはらす
を規模の大なる小説と心得たる人もそれが爲に目を醒ますべく我家の猫を寫
生して猫を畫きたりと思へるものも又あらためて悟る所あるべし吾人不學自
ら其道の書を讀むこと能はず先づ取あへず學海先生の方角に向つて合掌し更
に槐南先生の方角に向つて三拜すあはれ不學の蒙を啓け
西洋にては『天道遡源』を讀まぬもの殆ど稀なるべし就中英國にては此書の行は
るゝこと聖書に次ぐといふ蓋しこれには文學上の價値の外二ツの理由あり其
文の平易にして何人にも解せらるゝと其主意の聖教に基けると此二ツなりさ
れバマコーレーの評にいふバンヤンの字林は平民の字林なり二三の神學の語

兄弟文學

を除けば文旨の農夫にも解りにくき句全くなし數葉の中に二疊音以上の字なきこと間々ありまかも言はんと思へることを限なく言ひ盡したること他に越わたり(中略)十七世紀の末英國に騷客多しと雖も最も高上の想像に富めるものはミルトンとパンヤンの二人のみ甲は『失樂園』を作り乙は『天堂迦源』を作ると、コーレーの評當れり『天堂迦源』も『失樂園』も共に人間の運命を語るものなり想像の力まことに高し唯異なる所はミルトンは希世の大學者パンヤンは殆ど無學の人なり而して其歸する所の一ツなる是不思議に似て不思議にあらず人間を知るは強ち學識に因らず偉なるものは覺悟の力なりトマス、シヨウも又パンヤンを評していふ「パンヤンの寓意小説に王たるは猶シエークスピアの院本に王たるがごとしエドモンド、スペンサルの寓意譚巧みなりといへども彼は事件の面白きをもて讀者を牽くこれは人間活動してそゝるに讀者をして同感せしむ」と佛人テーンもまたいふ「寓意譚にあらはるゝ人物は總じて死灰の如しパンヤンの人物は然らず皆活きて動く云云」と案ずるに寓意譚は作文の最も難きものか何となれば寓意の淺々しくて皮相に浮いて目を遮るは五月蠅(うるさい)けれどさりとて餘り沈み過ぎて並人に解し難きは朋樂仕事さなくバ獨(ひとり)よがりの比ひなり殊に一時

兄弟文學

一ヶ所にどゞまる寓意は政治家の機關新聞の舞臺に屬すつまらぬ一時の花なり喻へバスペンサルの『神女王』の如きは今他國人の心をもて讀めばねはむ唯の小説たるに近し理由を聽きし後に忝(かたじけなく)きは寓意譚の本意にあるまじまかにパンヤンの作はそれと異なり數百年の後吾々が讀みても感ずる所深し其寫せる所人間おれべなり廣き意味にていふ人間と其運命とが見ゆればなり世には自ら居ると高くて我作は高上なり故に俗人には喜ばれずといふ人もあらめどそは自惚(うぬぼれ)の隣(とせり)なり上智下根に通じてもてはやされてこそ眞(まこと)に大文人と云べけれ吾人の考へによれば目に見ぬ鬼神とあるは無學文旨の徒又は殺風景の徒の替名なり唯數寄者學者ばかりを喜ばすは古器物の寂(さび)が茶人を喜ばすと同じことなるべし近松の作が廣くもてはやされシエークスピアの脚本が土間連(どまんな)の氣に入りしを思へ此等はトロ、ブ、ドライデンの一時にどきめきしとは格別ありパンヤンの作も或意味に於ては近松シエークスピアの亞流なればこそ今に至るまで捌口(さげがち)はどまらでシヨンソンにもクウバルにもスコットにもバイロンにもウチーヅチーにもソウセーにもはめられ翻譯せられて終に全天下に洽からんとす是一つは前にいふ耶蘇教の底(こ)に由るとはいへど唯それのみの

力とはいふ可らずまことに「天堂迦源」は耶蘇教の無害なる武器として待きもの
あるに怪むべし此國の耶蘇教は日々に長ずれど此書の翻譯(漢譯)はあれどはい
まだ生れず宗教家の中に詩想ある人の乏しさが爲か何ぞ然らん文學に宗旨に
深切なる岩本善治氏あり何故に平易の文章をもて此書を編することを力めざ
る

此書の筋書を添ふべしと思ひしが「天堂迦源」にあれば要なしと思ひて省き
つ

其の二

東 『武藏おふみ』

作者 淺井了意(?)

西 『倫敦大疫病の記』

作者 マニエル、デホー

『武藏鑑』は明歴三百年正月の大火事の顛末を樂齋坊といふ同事件に關係ありし
人の懺悔話のやうに取做して一伍一什をものしたるにて慘憺の情景目の前に
観るが如しきだらかに書いたる記事文の上乗也「倫敦の大疫病の記」は其頃の景
況を目撃せし商人の手づから記したるやうに書做して一千六百六十五年に起
りし大悪疫の顛末を記したる也以上は其能く相似たる所なり扱其異ある所を

兄 弟 文 學

いへば前者は想像の空談を加ふること重に話の首尾にありて本文は事實其儘
なるが多く唯處々大げさに言ひ做せるのみ後者は稍や小説氣勝ちたり元來デ
ホーの此作は一千七百二十一年佛國に疫病流行してあはや英國にも傳染すべ
しといふ怖れ人々の心に遍かりし頃フト其事情に投せんとて故老に傳へ聞け
る事實を基とし所謂實から出たる虚話を並べたるなれば大体は總て實なるも
細かきは多分想像なるべしさはあれ其文章眞摯平坦にして片言隻句だに虚偽
らしき所無し學識大に進みたる近年までの統計家醫士のたぐひまでが此書を
事實の考證となしきとか其文才の並々ならぬを知るべし然らば多辯するまで
も無く假作物としての値は西の方勝なり了意は其下に居らざる可らず併しな
がら若し文章の可否よりいはば此相似たる二つの文輕々しく兄弟す可からず
且又其飾らざる筆の力にいと能く細き景況を寫しだし或は味ひなき數字町
名等を羅列して些も讀者を倦ましめずなかくに其頃の江戸倫敦を見るやうの
思ひあらしむる技倆は蓋し何れが兄ならん例へばデホーが疫病の犠牲を精算
して三万八千九十五人と書きしるし了意が火事に死せし者を十万二千百餘人
と數へたる或はデホーが病死者を埋むる爲に長さ四十尺幅十六尺深九尺乃至

兄 弟 文 學

二十尺の大穴をこゝかしこに穿ちたりしに彼等須臾にして塞がりぬと其埋葬の仔細の模様をいとも緻密に描きたる或は了意が淺草門なる火事の騒ぎを記し來りて老若火焰を逃れんとて高さ十丈の石垣より堀へ飛入ると書き下し「せめて命の助かるかと斯やうにせし輩いまだ下まで落附かず石にて頭を打碎き腕を突折り半死半生になるもあり下へ落つくものは腰を打そんじて立あがることを得ざる所へ彌が上に飛重なり落重なり踏殺され押殺されさしもに深き淺草の堀死人にて埋みけり其數二百三十餘人三町四方に重なりて堀はさながら平地よなる」と目に見たるやうにものしたる何れを弟と定むべきや唯巧者といふ點よりいへば西の男巧者なるべし何となれば渠ハ文章家といふ外に彼の「ロビンソン漂流記」を書いたる寫實小説家の腕を具へて虚つく事が上手なれば也渠緻密な叙狀しながら時々疑の地を残して右のやうには云るものゝ其實此件は目撃ならねば必ず然なりともいひがたし又はこれも直接には見ざりしゆゑ唯噂のみを記すなどいふ態とらしくなき疑を加へてますゝ虚を眞實の如くす東の男は然らず渠は「東海道名所記」に於て能文の譽れ高しと雖も必竟は眞地目の文章家なればにや此「武藏あぶみ」も多くは事實の纂録に似て機轉の虚は稀

其の三

かど見ゆさりながら此點は強ち文の疵とはならず兎に角に吾人は疵とせず事實的記事文を學ばんとならば此二者の書を取て相比べて後更に見よ二者は相似たるばかりかは東西の稀物也

第三の兄弟には小品ながらに名高き戯作物と端物ながらに大手腕の作に成れる滑稽本とを比ぶべし

東『四十八癖』 作者 式亭三馬

西『若紳士かたぎ』 作者 ホツズ

東は誰も詳知なれば言はず西はヤッケンヌの稽古書ともいひつべしホツズは戲號なり「若旦那かたぎ」原名は「スケツチエス、チブ、ゼ、ヤング、セントルメン」といふ若者の氣質好尚のさまゝなるを例の筆にて叙狀せるものなり今譯して形氣といへば其積自笑の形氣物と對してこそ名義は能く適ふべきなれど其實は彼れに似たる所少く却りて三馬物に肖たる所多しそは自笑其積は話を主として氣象性質の細きを客とし言はゞアル井ソグの「Hans」に似たるに三馬は専ら性癖を主として脚色趣向を立てねばなり「若紳士かたぎ」もまた然り但し三馬の

兄 弟 文 學

兄弟文學

『四十八癖』は大抵家を有てる年輩男を寫せるに『若紳士形氣』は其表題に見ゆる如くねはむね部屋住の若者なり都合十二章結論の章を加へて十三章とす其名曰は羞かしがる若紳士、ごろつきの若紳士甚だ深切なる若紳士、武人ゆかす若紳士、政事家めかす若紳士、家内の若紳士、口惡の若紳士、芝居風の若紳士、詩人めかす若紳士、道戯がる若紳士、いかもの若紳士、婦人向の若紳士、是なり扱兄弟の位附をせんとするに團扇は何れへもわけがたし今思ふに『四十八癖』に代ふるに『百馬鹿』をもつてせばなかくに釣り合ひよかるべし双方とも弱所を寫し出して讀者を笑はしむると同時に轉たおのが身を反省せしむ滑稽は客にして諷刺は主人也作意は五分五分にして此所勝負無しと雖も『百馬鹿』の輕妙には『若紳士かたぎ』も瞭若たるべし唯其筆ゆきの上に就いていへば兩者甚だ同じからず三馬は重に問答と獨語とをもて人物の性癖を見せヤツケンスは大抵作者の筆を用ひて細く傍より様子を叙狀す前者は折々口穢なく『百馬鹿』にての如く頭下し馬鹿と罵り又時としては筆を舞はして態とらしく道戯て落話を作る是日本人の長所にして又其短所なるべし英の作者は然らず渠は飽までも諷刺を主とし好言たらくの輕薄少年をも甚だ深切なる若紳士と題して例の如く叮嚀に叙狀し偶

兄弟文學

々正面より非難する時も口穢からず激しからずさながら一面識の人に向ひて某には交際ひたまふなど忠告すらんやうの風情あり是先づ異なる所也式亭は輕くヤツケンスは重く前者は獨語問答を肝腎とし後者は舉動風采を綿密に寫し力めて說破せぬを用心とすされば三馬の作を讀めば上手の落語を聽くが如く面白くヤツケンスの作を讀めば通人の茶話を聽くが如く可笑し『浮世風呂』の作者は人のアラを穿ちつゝあるものゝごとく『ピシキツク』の著者は人の弱所を觀察しつゝあるものゝ如し今更に押ひろめて概べて兩者を評判せんに一氣呵成は式亭の得意にして片言苟くもせざるはヤツケンスの持前也三馬は畫工とすれば鼻の曲みたるを描いて口元の愛らしきを寫さずボツズは斜睨の醜きと共に其後姿の麗しきを示す要するに前者は睥睨し後者は注視す此は殆ど世の中を見て泣かず彼は折々目をまばたく二人相肖ざる所著しさはいへど又大に似たるものあり何ぞや二者共に人間の脾心に入らずヤツケンスは全力を外面に用ひて敢て煩惱の由來を知らせず之を讀者の自覺するに任せ三馬も專念に習癖を穿ちて其出來りし源を示さず物足らぬ所あり吾人はじめ三馬を以て京傳より深しとせりき不知庵内田君駁して曰く非也京傳は三馬より深しと實

兄

にや三馬は淺かるべき也或場合は京傳よりも淺かるべく紫よりチッケンスよりは淺かりさりながら其奇才は作の大小と著眼の淺深とを以て大にチッケンスの下に置く可からず諷刺家サテリヤとしては三馬は甚くとも我國の参考館物也
附ていふボツズの端物の中別に『若夫婦形氣』といふ十三章の作ありこれも八文字屋物に似ずして三馬物に似たり又思ふに三馬はチッケンスよりも彼の著名なる『カルテン、レクチュールス』の作者英人ドウグラス、セロルドに比して殆ど浦次郎と瀬川采女との如くあらん

其の四

第四の兄弟には英國に最も古き大寓意詩と此國に最も近き大稗史とを比べん已に其名の上に見ゆる如くこれは不當なる比較なり詩殊に寓意詩と稗史とは別物あれバなり然れども其名と形との異なるに拘らず着想の相似たる斯ばかりなるは外に見ざれば假に空肖ウラナの酷しきものとす

東 『南總里見八犬傳』

曲 亭 馬 琴 作

西 『フヘアリー、クイーン』神女王』

エトマンド、スペインナル 作

先づ皮相よりいはん、『八犬傳』は羅漢中の小説を種として我國の戰國武士を見

兄

弟

文

學

せたる叙事詩風の小説也『神女王』はホームズ、アリオストーの叙事詩を模範として中古騎士の勳功を見せたる寓意ある叙事詩なり『八犬傳』の著者は我稗史壇の泰斗『神女王』の作家は英國四大詩人の隨一、馬琴は孔孟の教を元として仁義以下八行を人に擬へて八犬士を作りスペインナルはプラトニー、アリストートルによりて十二の美德を定め之れを十二人の名士にしたて、希世の寓意譚の趣向をたつ何を着想の相似たるや剩へ尙別に似たる事あり馬琴は『八犬傳』に叙して曰く文武猶花實也未見其花惡得其實耶故孔子曰有文備者必有武備若夫其勇有餘而一文不通則其行侏離譬如沐猴之戴晏中畧由是思之三綱無道亂離世行似猿梟者雖有記傳實錄而不足見矣是吾所以作八犬傳也中畧於是乎善可以勸惡亦足懲云々トスペインナルもまた曰く此書の全體の目的ハ温雅德行に訓練せる高上なる人即ち君子の風を涵養するにあり中畧殊に主人公アーナルは大度寛仁の徳を代表せるものとしたり蓋し此徳ハアリストートルによるも他の説によるも諸徳の最も圓滿あるものにて他の百行を包含すればなり云々トされバ曲亭の旨とする所は文武兼備へたる人物を示すにありてスペインナルの望む所は士風の醇粹を寫すにあり教誨の旨一揆なりといふべし馬琴は里見義實を作りて

兄弟文學

八夫士の歸着すべき中央の本尊としスペインサルはアーサル公を作りて十二名士の上に居らしむ所謂大主人公なり僭別に神國の女皇グロリアナ(神女王)を作りてこれをアーサルに配すべきものとし且つ十二名士の主君とす馬琴が初に伏姫を作りて八夫士の山來を開きたるに似たり去りながら其の相似たるは皮相の空肖のみ其内部の性質を見れば『八夫傳』と『西遊記』と異なるが如くに異かれりこは着想の似たるにも拘らで作の本質の同じからざるに因るあり案ずるに曲亭の『八夫傳』を綴るや胸中先づ八夫士の趣向ありて扱後に思ひつきて仁義以下八行に擬へし歟何とされば八徳を人に擬するは甚しき寓意小説の沙汰なるに全体の工夫を見ればむしろ史の演義を語るもの、如く寓意は淺近ある勸懲の爲におははれ又時としては潤色の爲に藏れ間々仁義八行の説明は二の町となる事あり且や八行を人に擬するは因りてもて人間を説明すべき爲なるべきに馬琴の旨とする所そこにあらず八夫士の八行の靈たることは全篇の大趣向には強ち密接なる關係ありし所詮曲亭の八行を探りしは人物を作る爲の方便にして全篇の趣向にあらじ然るにスペインサルの『神女王』を編むや其工夫これと大に異かれり渠は先づ十二徳を得て扱後に全篇を工夫せしからん何とされ

ば人物已に寓意的なると共に全篇の趣向悉く寓意的なればなり

此の説原稿未完なりき、今補續せん暇もあらずはた完結すべき程の價值あるものにあらねば未完のまゝ、茲に掲げたり只一言もて二者の相違を掩はんスペインサルは出世間の詩人、馬琴は世間の作者なりこれ其の祖述する哲學の然らしめし所ありスペインサルはプラトンの唯心哲學を奉じ馬琴は孔孟の現實教を奉せりスペインサルの作は徹頭徹尾夢幻境の趣にして比喩周密精緻着想幽妙飄逸而して叙狀描寫の句々總じて作家の出世間的詩肺肝より出でたり馬琴の巧妙豊富にして虚飾の形容と借用的詞藻とを縦横自在にしたる叙狀描寫に似す

ホワイト氏譯『天路歷程』の評

いぬる日兄弟文學の中に『パンヤンの』『ヒルグリムス、プログレス』と『西遊記』とを比べて前者の我國語に譯せられざるを憾みしが此の頃築地なる外國紳士ホワイト氏態々書を寄せてみづから譯せられたる『天路歷程』を示して吾人に披露せよといはれき誠に『天路歷程』の名は吾人嘗て聞うざるにはあらずしがこれを

天路歷程

も漢譯とばかり思ひ誤りたりき今此書を見て先づ聖教の爲に賀しホワイト氏の勞を謝し併せて思ふ所を述ぶ

『天路歷程』はホワイト氏の譯とあれど其文を見れば頗る小説を嗜める人の筆に似たり麗しく又流暢にて難所尠く女小供も解し得べし若し原書が並々の書ならば吾人は此を良き譯といふべし併し亦がら名著の譯としてはわかぬ所多ければ茲に思ひつくまゝの評言を加ふこれは彼の神聖なる夢想者を推重する心厚きより出づるなり又彼の教を重する心より出づ譯者幸ひに辯を好むとあ思ひたまひそ吾人思へらくハンヤンの作の他の千万の作に優る所以は其信心全篇に溢れ一字一句虚飾浮華あらぬ所にあり平淡の中に無量の誠の籠れるにありと吾人彼教に昏しと雖も未だ『ヒルグリムス、プログレス』を誦する毎に聖書の俗解を讀聞かされたらん如く思はずバあらず絶えて虚榮市の文學書類に似ざればあり然るに今『天路歷程』を見るに行文をさく馬琴を學びて所々浮靡に近く俗間に行はれたる凡小説を讀む心地す原文の簡なるを引延したるは彼と我と文格異なれば止むを得ずとするも虚飾を加へて原意の質撲を損ねたるは口惜し試に二三をいはゞ斯るべしとは白糸の結ばれ解けぬ妻や子はとあ

天 路 歴 程

るは陳りたる淨瑠璃の文句也そればかりあらばよけれを調のいと浮きたる嫌ふべし況して結ばれ解けぬとのみにては憂に沈めるの意通せざるをや又返す言葉も泣顔を峰に刺さるゝ心地してとある是ハンヤンの用ふべき文句歟其他『善哉柳太ぬし』といふ句のふさはしからぬものから何々しつといふ筆癖の曲亭を學びて文法にたがひたる皆取除きたき疵也爰に如何ばかり原書と譯文と趣同じからぬかを見る爲に誰も知れる『疑念城』の一節を抜き示すべし譯文にいふ

天

路

歴

程

去程よ此所を去る遠からざる地よ疑念城と云へる城廓あり此の城主は絶望齋とて容兒魁偉の剛の者なるが今朝しも早起して郊外を遊歩なすに大地よ二人の眠れるを見る是れ別人ならず從道望道ふり絶望見るよ聲荒く呼聲し汝等何者なれば何處より來て我領内よ遊み入るさいふも怖しき荒男子の如何なる業をも爲し兼ねは紫振よろれと知られと二人は大いよ驚きて起直り香々は道よ迷ひし旅の者怪しき業を爲すものならずと只管詭を耳にも懸けず黙れ奴輩汝等夜中斷すもなく我領内よ潜入り我地を踏み我地よ横はるぞ奇怪なるいざ追立て、迷返らんさいふよぞ二人は之を敵がたく身の過しとみなれば言葉なくく、追立られて云々

これを及ぶべき丈け直譯にすれば左の如し

愛も渠等が臥しとて一處より遊からぬありと疑念城といへる城ありけり其主は巨人自來
 といふ渠等が今眠りたりしは件の巨人の領地なりきされば彼の男朝早く起いで、田野をあ
 ちみち遊遊させらるうちフト領内に熟睡せし信者多きを望みを見いとしめ憚りしき聲よ
 て起きよと呼び何處よと来て愛も何せるぞと問ふ二人は回國者なりと告げ道に迷ひきと露
 りぬ其時巨人いふ汝等今夜我地面を蹂躪す我地面に横臥りて我權利を侵害せり此の故も我
 と共よ來らざるべからずと二人は隨ひ往がざるを得ざるは彼の彼等よとも力強ければ
 なり彼等はまゝ殆ど言ひいでん言葉なかりき已が過を知ればなすけり

右は斯くの如く譯せよとて譯したるにはあらず原文の質撰平坦なるを見せん
 とて也又「天城」の有様を叙状せる條下を見るに譯文は左の如し

從道望道も愛も及んで證すべなく死ぬも生るも命なりと覺悟を極め身を躍せて水の中へ
 飛込りたり斯くて從道は次第ノ一深淵へ沈み覺束なくぞ見えけるが大い叫びてあなやま
 の大浪吾を巻く早や溺れんといへば望道は心安かれ從道のし音いま水底も足の隔れとぞ
 氣を勵せし從道は否とぞ死の苦み今吾身も追れり吾も乳と蜜の流る、陸地天國を見るも
 となけんぞ云々

直譯は左の如し

さて彼等は身づくろひして水の中に入る程も信者は次第一沈みの體て其其友望多をよば
 ひつゝいふ我は深淵へ沈む大浪我頭上を越ゆ波みな我をおふふ望多や其時他はいふ安

せよ我兄我河底も隔る氣づかひなしと其時信者はいふ嗚呼我友も死の悲み我身に過すは我
 は乳と蜜との流る、國を見ざるべしと

原文は經文を讀むが如く平々淡々たり要するに「天路歷程」はintelligibilityの點に
 於ては能くmissionを盡したれど未だ文壇の物にあらず大に弘法せんとせば更
 に洗禮を要すべきが如し夫れ已に聖教を奉じたる人は「ヒルグリムス、プログレ
 ス」を讀んで後に聖教の尊きを知らざるべし願くは聖教を信せざる者をして此
 書を擧て天城に詣らしめん然せんには此書月桂冠を戴いて扱後に文壇に降ら
 ざるべからず

明治二十三年上半期文學界の風潮

ことしの春の例にあらひて七月までの風潮を批判せんとてふりかへり見るに
 目ざましき事の多からぬぞ本意なき去年は文運の淀みなく進みし時なり掛く
 ども小説界にては糊口の爲にものするもの減じて名の爲にものするもの増し
 杜撰粗漏の文章藏れて琢磨せる文章あらはれ加ふるに元録文學の新空氣文界
 を爽かにし森岡外落合直文、井上通泰、内田不知庵、幸田露伴、末兼湖處子等の輩出

して文壇を風靡せし時あり去年の暮に身まかりし文學狂はいかに今一年を死にどむながりけん末の進歩の兆いちじるしかりし故なり然るに年明けて後は初春の苔のきをひ目さむる計りなりしに似ず花早く失せて秋風立たぬうちに四方山の若葉の病葉のやうに凋みゆきたる此魂祭に彼魂あくがれ來しならば神ぞ紅葉君より借用呆れて開いたる口を之閉がざりしからんかくおれるを世人は政事といふ外道の所爲なりといへれどいかゝあらんいでや上皮のみを見ればこそ今年は大小説大詩篇大著述大覺悟大觀念の世とも見えしがそは楷子の新しく高樓にかけられたるを見て一躍りせば登り果つべきものと思ひはやりたる類なり登るは楷子を一つ／＼踏むきりと知らば今年の一休は楷子を製り終へて登り試みる前に識人の腰まさぐりて青葉蔭に先づ一服する時なるべし下手の考は休むに似たれど上手の休むは考ふるにおおしエーッスビヤの昔を聞くに彼れの腕節は彼の『ソッネット』を綴りし時已に大かた成りぬとおぼし是廿八九才の頃ありし乎それより『ハムレット』出でしまでは十餘年経たりきとすれば廿八九より四十までは彼れが修行の時なりき學者の説に彼の胸に『ハムレット』の趣向浮びしはたしかに三十幾才の時にて其成りしよ

り甚くとも五六年以前ありし證據ありと案するに『ハムレット』はシエーッスビヤの卒業論文か『ハムレット』の後には『ハムレット』幾篇もありと見ゆれど其前に無きを思へば其餘に腕を養ひしこと知るべし此春もいひしが去年は製作の時代にて譬へば素を作る時なりしかば假に彼の詩仙の成立にくらべば廿八九才の頃に當るべし詩仙の天稟なるだに修行に十年を費やしきとせば此一二年の中に大觀念の傑れたる作を見んこと難かるべきは勿論ならずや今年は明治文學子がはじめて修業門に入りし時なりそも修業といはゞ精進して怠るまじきなりシエーッスビヤは情に溺れて世間を知らざるロメオの哀しきを寫せしより知に溺れて人間を知らざるハムレットの憫れなるをものせしまで其間幾星霜を経たれど彼れ一年も休まざりき其證は彼の専ら時代物をものせしは此間ありと聞ゆればあり然るに明治文學子の修業はこれと異かりて此大切なる時代に隠れて修行せぬやうに見ゆる人の次第に増しいよ／＼多からんとせるはいと訝し人は之を見て文學さびれたりといひあへり併しながら浮屠は山籠りして修行すといへればこれもさる類なるべくや兎に角に物書く人の藏れたればとて文學の衰へたるにはあらじ元よ

り出版と著述の多寡とを標準にしていへば文壇の寂れたること争ふべからず
 と雖も目を眩くらぎて深く氣運をトへば去年の文運の前へ進みしと同しく今年も
 前へ進めること明かなり先づ文學の内界に於て進み次に其外界に於て進めり
 内界とは文士の着想の前年よりも進めるをいひ外界とは文章の去年より時に
 適ひたるをいふ

文章の事は別にいはんと思へば省き爰には内界の進めるを辯すべし去年の
 暮までは其道の人の外は著作を評するに大かたは文章の妍醜をもて上下し又
 は漠然と人情を寫したり否寫さずさとのゝじるのみにて評の作者の觀念に及
 べるを聞かざりき聞かざりしにはあらねど爰にいふ意味のものにあらざりし
 なり今は趨勢大に改まり普通の讀者だに稍や眼あるは文章とはいはで若眼と
 いふこれいちじるき進歩なり素より如何なるを善き着想といふかは其人々の
 心々にて同じからず或は勸懲主義が味方を得たりと誤りて閑聲を擧げたるも
 あるべく或は文章のうるはしきに慊あはれぬ心より非を此點に求めたるもあるべ
 しそれは何れにもせよ目の稍や形無きものも向へること實あり「江湖」朝野等
 の新聞紙並に「女學雜誌」等が人情小説を纖巧と罵り規模の大さを作れといひ

今の作者は痴情のみを愛とするか何ぞ愛國の愛、愛民の愛をかゝぬなど叱りた
 る若しくは龍溪居士が今の小説の偏れるを歎きて「浮城物語」を著したるなど其
 いふ所の當否は暫く措き總て着想を論せしものなること明けし其他批評専門
 の人々の聲もますます、此方角に向つて高くありぬ、聞外漁史が「まがらみ草紙」にて
 此春のはじめ去年の「詩眼」を評したるが如きは恰も時に適ひたる「漁史の繪畫論
 の中より借るものにて先づ本街道を開きしものあり或は忍月居士が罪過論を
 反覆して作者を警め或は不知庵主人が觀念論を叮嚀にして末技者流を提醒し
 たるなど元より今年にははじまれるならねどさすがに一層を加へたるに似たり
 されば露伴子の作を評して觀念高しといひ湖處子の作を批して思念純潔なり
 などいふ聲の普通の讀者の間にも聞々聞ゆるに至りしこと一つは批評家諸氏
 の反響を傳へたるに過ぎざるべしと雖も斯かる反響の成立つに至りしは抑々
 また時の進みたるに因るなり乞ふ讀者と共に批評家の勞を謝し明治文學の前
 途を祝せん

夫の政事の爲に文學衰へたりといふが如きは形を見て魂を見ず今の文學界の
 内證を知らざるもの言なり客氣の新作者出ざるは實にや政事の影響ならん

戯れに小説をものすることの廢れたるこれも同じ源ならん又主大小説主義の霹靂は多少卵中の言文一致をおのゝかして殺し國文學の疾風は多少巢籠の俗文を吹拂ひしとあるべし併しながら斯くの如き作者はたとひ生るゝとも巢立たず巢立つとも高くとバトし暫くは羽搏つとも明治文學の雲に沖るは所詮燕雀の少なき翼には頼るまじけれバ其の退縮を見て文學退縮みせりと思はんは彼のサムソンの願髻をきさみみて彼れの怪力を失はしめたりと思はんにひどしまこと政事の文學界に及ぼしたる影響を知らんとならば已に家を成し門を成せる作者に就て其痕跡を尋ぬるを當然とす人は謂ふ今年は物かゝぬ作者の多くなりたると共になべての作者も怠りがちなりと前は事實されど後は誣なり後の誣を辨する前に先づ前の事實に就いて彼等作者が政事のさはがしき爲めに筆を取めし跡あるか政事の紛雜なかりしからバ彼等は引つゞきて著述すべかりしかを否か見るべし

本年にありて殆ど半隠れ去年の目ざましきに似ずと見ゆるは竹のや主人南翠外史並に美妙齋主人の三人あり彼等皆前年に於ては八方に馳騁せる將星なりしなり言文一致の盛にしは美妙齋の力あり窪村宗の譽は竹のやの文章より掲

り想像豊富の評は外史の作出づる毎に噴々たりき元より今とても將星の名は依然たりといへど光はやうやく目ざましからず他せられたるよりはむしろ自ら稲まんとするものゝ如し今年となりて竹のや主人の作は『朝日新聞』に見えたる『小町娘』と時々の劇評旅日記の外には『勝國』の一篇あるのみまだ其他にも端物はありしかとおぼゆれど爰には廣く知られぬはさし措く又美妙齋主人を見るに『醉沈香』を去年の作として除けば『都の花』に出たるは『いちご娘』の後段を圍圓せるものゝみあり後『改進黨』に助力して『文壇叢話』と『人よし男』の作ありしが其他は取出でいふべき程のものにあらざ殊にいちじるきは南翠外史の退隱なり『有喜世新聞』の昔より『開花』『改進黨』と三代を経て雄麗自在の健筆をふるひ數年の間殆ど二月とは休まざりし作者が今年となりては『殘燈』の作一ツのみにて『破魔弓』は去年の作として除く久しく黒幕の中に藏れよし黒幕の中にて臺張の丹精ありしにもせよ此を又浮世にいで『新世帯』を結ぶこととありしまでに他の作無かりしは怪むべし二豎に腦まされたりとて斯くて休む人にあらざるをや或はいふ外史病中匿名にて淨瑠璃体の小説を『改進黨』に出だしきと予もこれを知れるるか只何故に外史があらぬ名を掲げしか又いふ竹のや

は専ら近松の著書を調べて其傳と論とをものせんとし美妙齋は思想を練りて之を韻語にあらはさんとすと是また實事なるべし只何故に元の如く隨感隨興の筆を用ひざるに至りしか眼ある者は其理を察るに苦まざるべきをこれをも政事の影響といふべしや

人皆其然らざるを知るべし政事上の紛雜なきも彼等は暫く引籠りて工夫すべき時に臨みしかり其他二葉亭の二葉のまゝなる嵯峨のやの時頼と共に世を歴ひたる春のやの返咲きして又忽ち淵みたるこれを政事の影響とすべしや爰にいはずとも前年よりの消息を知れる人々は知るべからん以上六人を除くの外は別に異なる状を見ず蝸牛の角は故の如く變觸の大なるを載せ梅花の句ひは新に文園の風情を添ふ學海の波は舊に依りて洋々思軒の月はひかしながらに射し入り況してや綠雨の爽かにそゞぎ紅葉のますゞ錦を懸け岩底の清水潺湲として清く萩のやの露玲瓏として珠を散らし湖處俗に遠く小金井崖を見ず加ふるに隱鷗の盟暖かにしてまばらくも文海を去ることなく長閑に中流に來往して細かに漁翁の意を認むるあるをや若し此間に立ちて不知庵の夕勤の鈴の音に觀念を凝し恐ぶが岡の月の影を罪過無うして詠めんには誰か文學

を衰へたりといはんや見よ『新小説』は休めりといへども『報知新聞』新に我黨に同盟して龍溪居士の閑雅の筆爰にまた光彩を放つ『都の花』の艶あせたりといふと勿れ『江戸紫』の色やうやく方に濃か也徒らに『江湖』の流星を惜むこと勿れ『國民』の明星なほ輝げり我社不敏なりと雖もまた常に時に先んじ文運を導かんと力めて休まず百年一日の如し見ずや文學のチャムピオン雲の如し文學さびれんや寂れたりといはんや

小説三派

總評

『新作十二番』とは春陽堂より發兌せる美本の讀切物にていづれも名家苦心の小説也第一番は竹のや主人の『勝鬨』第二番は紅葉山人の『此ぬし』第三番は美妙齋主人の『教師三昧』第四番即ち最近は發行の三昧道人の『桂姫』なりいづれわやめ草ひきもわづらはれておのゝおるかあるは無けれど氏も育も流石に殊あるこそおかしけれ先づ『勝鬨』と『桂姫』とは色も香も大同にて小異也然るに此の二つと『此ぬし』とを比ぶれば心も形も大異にて小同ありさて又『此ぬし』と『教

師三昧』とを比ぶれば色も香も大同にて小異也然るに『教師三昧』と前にいへる二つとは心も形も大異にて小同なり具にいへば『勝鬪』と『桂姫』とは着想も文章も専ら在來の粹を採れるに『此ぬし』と『教師三昧』とは新文脈をまじへ用ひて着想も頗る外國ふりなり詳きことは次々にいはん爰には便宜のため假に『勝鬪』と『桂姫』とをもて同類の固有派と名づけ『此ぬし』と『教師三昧』とを一味の折衷派と稱す

所謂固有派とは物語を作るに事を主として人を客とし事柄を先にして人物を後にする者也人間の浮沈榮枯流離轉變を語るを主として傍ら種々の人物を點綴し正邪順逆の跡を紙上に躍然たらしむるもの也此派の物語ははじめより事變を主とすれば奇異の事をも偶然の事をもさしはさむ且又必ずしも主人公を設けずたゞ主人公を設くるも事話の脈絡を繋がん爲也蓋し大かたの事變は主人公の性行より來たるとせで偶然に外より來たるとする故に必ずしも主人公を要せぬなり夫の固有派の巨擘曲亭の作を見るに悪人は暫く措き忠良の人の上に起れる禍は大抵天の爲せる災にしてみづから招けるはいと稀なり其他京傳種彦の作も轉變流離の誘因を偶然に歸したるが多し例へば里見伏姫の不幸

小 説 三 派

も自意識を標準としていへば自ら致せるにはあらで全く其意識の外より來れり又芳流閣の災難も信乃が心の罪にはあらで圖らず外部より來れるなり即ち事と人の心との間に災厄と性行との間に必ずしも密接ある關係無し事を主として人を客とし事を先にして人を後にしたればなり所詮此派の作者は俗にいへる三世因果の説を理法とし若くは天命の説を理法とするあり就中曲亭の作はをさく三世因果の説によれり『八丈綺談』『春蝶奇縁』『累解脱』等を見てもまづけしそれだにおしなべて小乗の心なりまして其末流に及びては此の理やうやうおぼろげなれば人心と事變との縁ますく遠くなり動もすれば宿命説の趣に似たるものあり草双紙などに見ねたる忠臣孝子の災厄は間々宿命の所爲とも見ねて理無し有爲轉變諸行常無しと解せば解すべしまからざれば卷を措きて天道の是非を疑はざるを得ず在來の作者が筆を曲げても毎に團圓をめたくせしは一つには此不審を釋かかんが爲なりしならん恐らくはおのが心にも安せざる所ありければあるべし到底近年の固有派は天命の説を作者みづからは意識せずもあれ奉じたりと見て可なり榮枯福禍を必ずしも人に歸せざればなり此派は外國にも多かりき中古の物語類はいふも更ありスモーレット、フヒー

小説三派

ルザングの徒頗るよく性情を寫せれど其實は事を先と云たる也スコット、ヤツケンヌも亦間々然り只後者の旨と云たる所は事のみにあらず人にも在り事を先にすれど事を主とせざる所異かれり此差別は次の折衷派と共に説くべし折衷派とは人を主として事を客とし事を先にして人を後にする者也前の固有派と半は似たれど半は異なり人を主とするとは人の性情を活寫するを主とする謂にて事を先にするは事に縁りて人の性情を寫さんとすれば也性情は形無きものあれば有形の事變に縁らざれば寫しがたき故也具にいへば或る特別の人物を作りて其人の榮枯轉變に於ける心の有様を寫すあり前の固有派にては事主にして人物客たれば人はれのづから事の附物とありて客觀あり云かるに此派にては人を主とするが故に人物おのづから主觀あり換へていへば人物の哀歡悲喜を外よりのみは見で内よりも見るあり英雄の心緒紊れて絲の如しと客觀的に叙し去らで時として其の亂れたる様を寫すこともあり但し人物と事變との間に主客先後の關係こそはわれ未だ因果の關係なければ人物必ずしも主觀とはならず蓋し此派の本意は或特別ある事變に於ける或特別ある性情の状態を寫すにあれば未だ必ずしも事變をもて其人に由來すとせざるあり是別に人を因として事を縁とする派のある所以あり

(其二)

小説三派

新作十二番を評するに斯かる管々しき辯何の要かあるといふかる人もあらんが評者は此辯の止みがたきを知る也今の批評家中には間々第二派の眼をもて第一派を評し若くは第三派の眼をもて第一派を評し徹頭徹尾取る所無しと抹殺する者ありかゝるはホームズ、ブルジョルを評するにソホーヴズ、ユーリビヤズの眼をもてシミルトン、ダンテを評するにシェーリッスピアの眼をもてするものに似て少しく理にたがへりげにや叙事詩もドラマも其詩たるや一つなり梅も櫻も其花たるや一つなり然れども花に種々の別あるは争ふ可らず櫻或は花の王あるべく梅或は花の兄ならんさりとて梅は梅櫻は櫻なり櫻をめぐる眼をもて梅を評する人をば色をも香をもよく知るものといふべきか嗚呼の風流雄汝櫻の外に花なしと信せば何ぞ先づ櫻の梅にまさるを説き兼ては梅を枯らすべき方を講せざる古たる梅園に就きて其花の櫻あらざるを笑ふ風流雄の名にも似ではしたきか否

西詩に三派あり抒情詩と叙事詩とドラマとあり其中ドラマをもていと高しと

小説にもそれに似たる派あるべし前にいへる固有派は更に名づけて主事派若しくは物語派ともいふべく其次の折衷派は又の名を性情派若しくは人情派とも稱すべしさて別に第三派を置きて之を人間派と呼ぶべし即ち人を因として事を縁とする派あり第一派即ち物語派は最廣き意義にていふ叙事詩の形にて第三派即ち人間派は最狭き意義にていふドラマの結構なり而して第二派即ち人情派は其事を先とすること甚だしければ叙事詩となり其人を主とすること重ければドラマの形とならん常は兩派の界に立てりさて物語派と人間派との別は明かにて物語派と人情派との相違も已にいへりひとり人情派と人間派との別はなほればるげなれば今少しく次にいはん

人間派とは其結構をいへば人の性情を因として事を縁とするものなり其事變を縁とするは前に人情派折衷派に就きていへるに同じく有形の事變に縁らざれば人の性を發揮する能はざればなりこれまでにははとく人情派と一つのなりさて其異なる所をいへば人情派は或事情に於ける或性情の狀態を寫せば足れりとし若くは或事變の或性情に於ける影響を寫せば足れりとし故に性情と

小説三派

事變との間に人と事との間に主客先後の關係はわれど前項後項の關係はわれど必ずしも因果の關係無し即ち人を物語の主とすれども未だ人をもて事の主因とはせぬなりされば事の起りて後にこそ人の心は動け人の心まづ動きて後に事の生ずるにはあらず此理玆に盡しがたし下に「此ぬし」と「教師三昧」とを評するを見て察せよ我所謂人間派は然らず先づ人を因とし事を縁として一果を寫し此果を若くは他の事變をも合せて縁として更にまた一果を書き終に大詰の大破裂若くは大圓滿に至りて休む偶然の事變を使ふことは物語派と同一けれども其事と主人公との間に因縁の關係の離れぬ所たがへり是もどより眼目の差をいへるのみ小同は三派相通あるべし管々しくは例をもて證せざれどもシエークスピヤを讀みたる人は評者の言の大に誤らざるを知らんマッペスの逆心まづ萌して弑逆の事起り弑逆の事縁となりて彼が罪惡ますく増長せしを想へ又ハムレットの懷疑固より存じて腸九回的煩悶とちりオセロの妬疑一たび萌して血涙千行的慘劇を醸せしを想へ客觀的哀歎は概して主觀的性情より生れたりしを想へ則ち人心と事變との間に先後の關係ありて又更に因果の關係あるを見るべしされば傑作のドラマを讀めば吾人恍として因果の理

小説三派

小 説 三 派

を見且雜然紛然たる人實に一定の理法流行することを冥悟す而して其理法たるや幽明にまたがり有爲無爲に涉り虚靈より出で、實相に現はれ實相寂滅してまた虚靈に歸す例へば『シーザル』のドラマに就きてブルータスを見よ彼れ思量足らでシーザルを殺し亂を醸し身を殺す羅馬の内亂といふ實相はブルータスが遠慮の周から編に靈界にのみ彷徨せし結果とも見るべしさすれバブルータスの敗^全たるはみづから致せるなり自業自得なり天を咎めんや人を怨みんや主觀的ブルータスが客觀的ブルータスを造りいだせしなりブルータスの失墜は身招自致なり然らば吾人のブルータスに對する感想は只一の惻愷慈悲の心あるのみかといはんは然らず吾人は客觀的ブルータスを貶すと同時に主觀的ブルータスを貶すこと能はざる由あり彼れの義と勇とは吾人遂に貶すこと能はざればなり彼れ現界に於て敗れたれを隱然靈界に於て凱歌を歌へるを聽けばなり吾人が到底ブルータスの義を美とせざるを得ざるを想へ則ち此明界の背後に更に又一の幽界ありて人間の妍醜を定むるを見るべし是前に虚より出で、實に現はれ實滅してまた虚に歸すといへる所以なり而して此理法は吾人がドラマにて暗に觀る所にてまた人間に於て暗に見る所なり蓋し浮屠

氏の謂ふ三世因果の理も其底を叩かば此理に外ならざるべし將た哲學の究めんと欲して未だ明釋する能はざる所も或は此理に外ならざるべし現在の人智は只冥々裡に此ことわりを知れるのみ未だ明かに釋すること能はず

(其三)

小 説 三 派

上の如く解すれば「人間派」は人と事と相因縁せるを寫すをもて足れりとせで更に虚實幽明の相纏綿して離れざる趣を寫すものなり即ち人間の經緯を取りて因果を織倣せるものといふべしされバ「人間派」の寫す所は其形は小かれど其心は大かり其相は一なれども其實は万かり其表は特殊にして其裏は普通其色は偏にして其理は圓なり夫の「人情派」の其形も其心も其相も其實も其表も其裏も其色も其理も大かた特殊あるとは同じからず又夫の「物語派」の偏に普通なるども異なれり案ずるに「物語派」は俗に謂ふ因果説を體し若くは天命の説を奉じて普在せる事相を寫すものから其相の由來をば明にせずさるが上に本來人物を主因とせざれば甲人に於ける天命も乙人に於ける天命も汎然漠然として一なるが如く平等の理はあれど差別の實なし死したる觀念はあれど活きたる觀念はなくせネラリチーはあれどインヂヤチヤは無し此故に或は讀者をして

小

說

三

派

世に因果あるとをば知らしむべきが因果の關係をば知らずる能はじ或は讀者をして人間に理法あることを知らしめんが其理法の人に因縁せる由をば知らしむる能はじ先天的にもものして後天的にものせざればなり演繹的に筋を立て、歸納的に筋を立てざればなり

茲に件の三派を物に喩へていはん先づ人に配していへば物語派は支体の如く人情派は五感の如く人間派は魂の如し又之を畫に配せば物語派は文人畫の梅の如く人情派は一枝の梅の密畫の如く人間派は根幹枝花残りなく畫ける油畫にも似たらん文人畫の梅粗かれども梅の全体を見るべく密畫の梅花細なれども一斑に過ぎずひとり油畫の梅は其全体を見ると同時に枝葉根幹花の關係せる所以を見るべし又之を學問に配せば物語派は常識コンセンシスの如く人情派は諸科の理學天文地質植物動物の如く人間派は哲學の如し常識は廣くして淺く科學は狭くして深く哲學は廣くして深し

併しながら此等の比喩は其質を評せるのみ必しも三派の優劣をいへるにあらず然るを若し比喩を進めて哲學は科學の親あるゆゑに人間派は毎に人情派に優れり常識は科學の材たるに過ぎねば物語派は最も下なりといはば是恐らく

小

說

三

派

非事非事あらん猶風韻ある日本畫の粗なるを見て密なる油畫に劣れりといはんが如く一向に形に泥める沙汰なり哲學の名は尊しといへども其の説まことに高からずばまことに深き科學に及ばざると違し、ダーキン、ハクスレーの學說をもて謬妄ある獨斷哲理に劣れりといふは狂愚ありさて又物語派を常識に比したるも只其形の上をいへるのみ其表に現はるゝ所のいと廣くして淺きをいへるのみ寸鐵よく人を殺す、俚諺に見ねたる常識の大獨斷教に優ることあるを思へば普通の常識ばかり眞理に近きものはあらざるべし常識豈卑しかるべきされど世の物語派即ち事を主として物語を作る人々の中には間々事を重んずるの餘りいつしか事の奴となりて我また人物を奴とし奇しき事を語らんとて有るまじき人物を作る事ありかゝるは常識界を離れて詭辯界に入り若くは妄言界に蹈込めるものともいふべし文化文政の名家に此失多し

また案ずるに我國の純文學の幕の内ともいふべき小説並に淨瑠璃の多數も大かたは物語派也即ち事を主として人物を客とせり演劇の臺帳すら諸派の雜種にて中には純然たる物語派あるも多し今の批評家往々我狂言作者を責めて彼等學淺くして識足らず何ぞ共にドラマを語るに足るべきと叱すれど是思ふに

小説三派

的を誤りたる沙汰ならんたとひ彼等狂言作者をして大なる學と高き識とをもたしむるも今の批評家が望める如き西洋風のドラマをバ争で得作らん何とあれバ彼の主とする所と此の主とする所と全く違へばなり批評家はドラマを得んと欲し作者は叙事詩を作らんとす作者批評家に迫られて進退難れ谷まり鋭意奮發して『一口劍』の主人公のやうにありて千鍊々万鍛々吓將莫邪を作り得たりとするもまた益なし批評家侯の所望は日本刀にわらず正宗にわらず支那劍にもわらず莫邪にもわらずマヌカスの短劍なるをいかにせん侯の注文理亦くもあるかな試に想へ今の文壇誰か學海居士を推して博學卓識の文人とせざらん而も居士の作の曾て批評家の旨に稱はざるに非ずや又見よ竹のや主人の近作『大田道灌』の脚本を誰か彼の作を評して學足らず識足らずといはんやよし絶對に高しとは云ひがたきも相對には高かるべし而も此作を批評家に示さば彼れ果して何といふやらん吾人は正に美といはざるべきを豫言す是併し亦がら兩家の技倆の拙きがゆゑに然るにはあらで作者と評者との間に旨の異なること甚しければならん作者は水を望み評者は山を望み作者は東に向ひ評者は西に向ふ漸く進みて漸く離れ漸く巧にして漸く拙あるが如くに見ゆるなり嗚呼西方果して彌陀の淨土か上人何とて其然る所以を説教せざる

(其 四)

小説三派

臺帳の事はさしおく小説に就きていはんに西洋にてもドラマの趣旨のをさささ小説に用ひられしは實に近きころの例なり前にもいへる如くスコットは物語派と人情派との間にまたがりし作者にてザッケンスの如きもまた然りさてまたサカレーとても重に人情派の作者と見てよかるべし『ペンデニス』『ヘンリ、エスモンド』などを見『グニナ、フヘア』などを見るにも人の主題となれる跡は明かかれど人の主因となれる證はおぼろげなりジョーシ、エリオットの諸作は評者の詳しからぬ所なれど嘗て見つる『ミッドル、マーチ』によりて判ずれば頗るドラマの旨意に稱へり思ふに英國に於けるドラマ的小説家は彼女史ひとりに止めたるにやあらん知らず女史の外にも尙あるにや夫の近世の魯獨にこそドラマ的小説家も多しとは聞たれれれもいと近き程の事あり又佛蘭西なる諸作家バルザック、ユーゴ、ゾラ、ドデーの徒は或は我所謂人情派の界を越えて人間派に入れりともいふべからんがこれとてもまた近世の作家あり詮ずる所ドラマ主義の小説界に入りしは十九世紀に於ける特相といふも誣言にあらじ尙いと稚

小 説 三 派

き現象ありウエルネ、ハツガードの徒はいふも更なりホルムズ、ブレット、ハート、ヘザントの如きものも我批評家の評言を聴かば恐らく惘然と自失すべし批評家の説の非あるにはあらねど其説の新しければあり然るに何事ぞ今の批評家所謂人情派の小説だにいと／＼稀にある我小説壇に向ひて唐突にドラマ(ギョオテの『フハウス』)シェーックスピアの『臺帳』を標準として物語派の作を批判し叱咤一聲して是小説にあらすど喝破す嗚呼是文壇の救済主の聲か物語派の名家みづから信するに厚く且頑かたくなにて絶たて改進せんの心なくバ事も無ければ改進せんの心あらば彼等そも何の方角に向ひて進むべきぞ何故にドラマ主義を奉ずべきか茫々然として知るに由なく百花爛熳紅雲蒸すが如き中に立ちて梅まづ畏れて散り桃また次ぎて散り李も散り杏も散り梨の花も散らんとせん此時に當り幸ひに櫻の咲くあらばよし唯四五の櫻の書と只二三の櫻の枯枝とが空しく文壇に横たはらば花を散せし咎は何れの嵐の罪とせん吾人は今の批評家の花に慈ならざるを怪しむ

斯く長々しく辯じたる頗る辯を好むに似たれど吾人は唯標準を別にして諸家を評せんと思へばこそ止むを得あきら此斷をいひつるかれかゝる差別の我文壇に

小 説 三 派

現在せるを信すればなり西洋の差別を適用せるには無し詩を評するに抒情叙事、ドラマの三質を別つ如く小説にも或別を立つることの甚だ用あるを感ずればありたどへばドラマとしては上乘あらざるも叙事詩としては上乘なることのあるが如く叙事詩としては傑作あらざるも抒情歌として傑作あることのあるが如く人間派、人情派の作としては甚だ妙ならずと見ゆる作も之を物語派の作とすれば甚だ妙あることのあるべければあり此別を非かりとする人あらん乎其人は事物の平等を見て差別を見ざる人あり世に絶対あるを知りて相對あるを知らざる人あり一あるを知りて万億あるを知らざる人あり宇宙あるを知りて國家あるを知らざる人あり國家あるを知りて我あるを知らざる人あり我あるを知らざるは死せるあり死灰あり

此故に評者は『勝鬪』と『桂姫』をもて物語派の作とし『此ぬし』と『教師三昧』をもて人情派の作とし下に其然る所以を辯せん敢て此四者の優劣を判せんとにはあらず其質の相異される所以を分析せんとす是もまた評判の一種あるべし但しかの三派の別は素より評者のほしいまゝにせる差別あり幸ひに十中一の正しきを得ば好辯の譏をまぬがるゝに庶幾からん

『勝関』と『桂姫』と (其一)

『勝関』と『桂姫』とは其結構をいへば共に事を主として人を客としたる小説也又共に文章をもて勝るものなり故にまづ文より始めん勝関の文章はをさく平安堂と柳亭とより脱化したるものとおぼしく優美あれど艶あたらかず輕妙あるが中におどかしやかある所あり穩當ある雅俗折衷文あり夫の曲亭の文に比べて七五綺麗の嫌ひあく夫の淨瑠璃の文に比べて関雅優美ある所一入優れり情迫りても文態とらしくは急ならず事卑しきに涉りても姿流石に風流みやびたり蓋し柳亭の粹を抜きて更に加へたる所ありとおぼし物語的折衷文の上乗ありといふも過言にあらじさて『桂姫』の文章を見るにこれはひねと院本を休として近松の貽を奪へりとおぼしく風姿洒々として淡きが中にまたおのづから婀娜たる所あり雅俗折衷の鹽梅前の『勝関』の文と相あらびて兄弟たりがたくほどく至極に近きたりと評すべし殊に『桂姫』の文は大胆ある雅俗言の折衷也さながらの俗語より一轉して忽然と雅文に入る所水晶盤の上を白玉の走るが如く虹の七彩の相没してうつくしきが如し一糸の接目だに見えず麗しきこと自然其ものゝ如

勝 関 と 桂 姫

し大胆ある雅俗の折衷此に至りてはとく極れり評者思ふに此般の絶妙好辭は其旨意を離れてももてはやすに足らん夫の清樂の聲は其樂譜を知らぬ者には何の意味も無けれど我れこれを聽きて美とす美と感せざるを得ざるなり此二編前にいへる如く事を主とせり其事を主としたるは一つなれど其脚色しやくしきは甚だ異あれり蓋し『勝関』は事の變換を主とせること『桂姫』よりも重し故に主人公と見做すべきものおし否むしる主人公と見做すべきもの卷毎に輩出す故に時間を使ふと廣く又空間を使ふこと廣し故にまた偶然の事案外の變踵を接し局面絶間無く轉換す有爲轉變の相まことに歴然たり其徹頭尾の主人公無き證には上の卷を開きて小主人公の多きを見よ腹十文字にかきされる島山政長も若君を守護して落行く平三郎左衛門も頼智もて君を救ふ遊女妙も御兒丸を怪みたる細川政元もさては志貴の八郎もさては若君御兒丸もいづれか主要なる人物にあらざる若くは中の卷の木澤敏長遊佐九郎二郎初花姫小六太禪門又は下の卷の義植尼公竺阿の徒いづれも名代下の役にはあらず人物いともいとも多おほにして而も其輕重相當れり御兒丸主公あるが如しと雖もそはアーサル公の『仙女王』に於ける若くは里見義實の『八犬傳』に於けるに同じく物語の脈を繋ぐ

ための料のみ而して斯くの如きは素より物語の常法也『平家物語』も此法により『源氏物語』も此法により『八犬傳』も此法により『田舎源氏』も此法によれり『源氏』に光君ありて『田舎源氏』に光氏あるは其理『勝鬃』に御兒丸あるにひとし素より主人公と名づけば名づくべけれど蓋し事の脈を繋ぐ爲のもの、み扱『勝鬃』の脚色を案するに先づ島山の滅亡を叙して御兒丸が落魄の緒を發き斯くして忠臣と節婦とを發揮し更に義豊を政元とを點綴して忽ちまた一忠臣(志貴八郎)を出しやがてまた討手襲來の事を叙して主従流轉の因を作る事を主として人を客とし事を先にして人を後にする法に適へり扱中の卷に至りては轉じて初花姫の事に及び先づ木澤敏長の偶然、或家に立寄れる事より發端して遊佐をいだし姫をいだし小笹をいだし菖蒲をいだし禪門をいだし即ち事を先にせる也さて菜屋の口を借りて御兒丸が大和奥の郡に潜みてゐる事を言しめ此事を案にして人々の發足を呼起し途中の厄難を呼起し御兒丸との遭會を呼起す是また事をもて事に接ぐものなり下の卷とても亦同じ終に義豊の亡滅して御兒丸の安堵するに至りて結局す終始ことごとく客觀的敘事にして整然秩然たる物語なり之を物語として何の著き欠點あるか評者は未だ知る能はず詮するに種彦

馬琴得意の筆法我固有派の本性なり

(其二)

勝 鬃 と 桂 姫

翻りて『桂姫』を見るに其脚色痛く之と異なれり上卷花賣の卷は玉をまるばすやうなる花賣の乙女の聲をもて突如と端を發す此聲縁となりて藝妓舞子の聲きこに客あらはれ乙女あらはれ姉の袂へ縫下る五六才の禿切あらはる、纏てまた突如として斬たくと人雪崩此脚底飛鳥的事件を縁として花賣の愁傷を呼起し善四郎の似而非深切をあらはし花賣の素性を明し善四郎の毒計をはのめかし母親を見せ母子の情を見せそれより流水の低きに就くが如く事情の必然を因縁として主人公が流轉の境界に墜るさまを結びいだしたる是また事を主とせるものにて純然たる物語の体かれとおのづから『勝鬃』とは同じからず蓋し三昧道人の本意此等事件をもて主人公墜落の因縁としたればなり筋に事をもて物語の主題とせずして物語の因縁としたればなり具に云へば『勝鬃』の事件は多端にして奇なれども偶然なるが多く『桂姫』の事件かどはかしは單純にして奇あらざれど尙一篇の精髓也彼の惡漢の毒計ありて桂女の艱難も滿篇の悲哀も生ぜし也試みに乙女が惡漢にすかされて其宿におもむき巧みに彼れに説かるゝ條

を見更にまた駕にのせられて後の事情を見よ譬へば桂女は善四郎に突かれて千尋の深き谷に轉落つらんものゝ如し一轉して木の根にとゞまり再轉して岩角にとゞまらんとすれど終に得とゞまらで三轉また四轉す其度に傍より更に押おとす者ありされば其たばかられて妓に賣らるゝ手續はとゞ自然あり讀者あらかじめ彼れの逃れはつまじきを知る也其事情の必然なるべきを知る也事と人と事との關係密にして作者が事を主としたる本意明かなり

勝 閨 と 桂 姫
『勝閨』は然らず事件甚だ複雑にて甲の事乙の事丙の事丁の事縁となり經となり相纏綿して流轉艱難を織いだし來る然れども此等の事件大抵偶然に起れるものにて事と事との間に必ずしも密接の關係無し譬へば『勝閨』の事件は人物のさしてゆく其先々の道に當りて偶然生ひ茂れる荆棘ともいふべし例へば平が妙女に頼りて御兒丸を女にしたてつるも偶然思ひつける策也而して妙と夫婦になりしは此偶然が媒也是恐らくは必然の勢ならん然れども端なく若君に難義のふりかゝるに至りしは偶然政元が途中に於て女装の御兒丸を看抜つるに基けり扱八郎が尋ね來つるもむしろ偶然なるに近く木澤が姫に遭ひしもまた偶然也又姫君と御兒丸とがめぐりあふに至りしも偶然也是併しながら作者の川

心をさゞ奇なる事を點綴して興味を加ふるにあれば也是また物語の本意にして曲亭得意の結構也必然なるが優れるか偶然なるが優れるか未だ述かに判す可らず何とされば人間界の事間々偶然に起ること多ければ已に事變をもて主とせるからは多く偶然を寫せばとて強に非しきことにあらざるのみか却つて實際に近ければなり有爲轉變の思議す可らざるを示せばなり

勝 閨 と 桂 姫
要するに『勝閨』は猶『太平記』の如く桂姫は猶淨瑠璃のごとし前者は廣くして粗く後者は狭くして密前者は事繁く人多くして一場所一人の上に詳しからず後者は人少く場所狭くて或一身或一場所の事詳し即ち桂姫はさながらに移して我劇場に演ずることを得べし之を幕に分てば上の卷は西京の幕にて下の花園の卷は東京の幕にて大詰なるべし上の幕を場割に分てば四條河原の場大和大路人殺しの場三條川端介抱の場新門前の場先斗町善四郎宿の場桂の里の場一本松の場大津驛の場等とすべしさて又東京の幕も同じ譯にて扱くとも三度舞臺を換ふるに足るべし或は作者の用心もあらかじめこゝに在りしか

人或は或一時一場所に於ける主人公の性情の躍然たるを見て『桂姫』の小説は暗に人情派若くは人間派の脈を伏したるものと思ふもあらん然らず主人公桂女

此ぬしと教師三昧

は決して此編の主因にあらず將た作者の主題にもあらずそは作者が上巻にては専ら主人公が落魄の因縁(即ち事件)を詳叙しさて又下巻にては其因縁の結果たる主人公の或一種の覺悟を見せたるにても志るけし若しまことに人を因とし若くは之を主題とせば其覺悟を得つる次第を最も明細に叙状すべきに(即ち主觀的に叙すべき等なるに)作者は主人公の口を借りていと軽く客觀に叙し去りたり其本意の此にあらず彼れにあること明けし前にいへる所を總括していはんに『勝鬪』は奇事奇談と忠臣節婦とを巧みに綴り合せたる物語派の小説にて其文は穩當なる雅俗折衷文なり又『桂姫』は必然的事情を因縁として一女子の落魄といふ事を結び出したる物語派の小説にて其文は大膽なる雅俗折衷文也共に人間の轉變を命に歸し運に歸したるものに似たり人『勝鬪』を讀まば人世の有爲にして無常なるを知るべし又『桂姫』を讀まば世に不可抗の事情あるを感じて命の避け難きを知るとはあるべし然れども終に因果の我にあるとを悟るべき由なからん況んや人間に幽明の二界あるとをや

『此ぬし』と『教師三昧』と (其一)

此ぬしと教師三昧

『此ぬし』と『教師三昧』とは其結構を云へば共に人を主として事を客とし事を先にして人を後にしたるもの也即ち或一種の人物を造りて或事變を因縁として其性情を發揮せんとせるもの也具にいへば或人物をして或事變に遭遇せしめて其性情に於ける影響の機微を寫さんとせる也其結構は頗る物語派に似たれど人を主とする所に相違あり例へば『此ぬし』の作者は俊橋といへる孫落(みづからあざむける)學生を造り『教師三昧』の作者は志保子といへる我儘娘(スライム、サイルド)の自意識無きを造りて是が性情の動搖を活寫せんとせり而して前者は切なる戀愛といふ事に縁りて人を見はし後者は惡周圍といふ物(即ち事)によりて人を見はす『此ぬし』は俊橋を得て物語成り『教師三昧』は志保子有りて成れり其旨とする所性情の變遷也境遇の變遷にあらず其人を主としたるや明か也といふべし以上其着想の相似たる所也

さて又文章に就きて見るに『此ぬし』は松壽軒の文を親として間々歐文の脈を折衷し『教師三昧』は歐文を体として言文の一致を力め間々雅言をもまじへ用ふ前者は俗稱して元祿体といひ後者は俗稱して言文一致の新体といふ然れども其實は其名の異なるほどには異ならず又其語尾と接續辭との相背けるほどには

此ぬしと教師三昧

其用語は相背かず蓋し双方ともに新文脈をまじへ用ふる所の同じければなるべし唯夫の問答の言葉使ひは「此ぬし」は俗語に文章の薄きぬをきせ「教師三昧」は裸美人のまゝなり此所負勝無し又地の文の特質をいへば「教師三昧」は特癖に富むこと「此ぬし」よりも多く聲調の和はざる所も彼れより多しさながらなる俗言と用ひなれぬ漢語とをシラセ無しに相逢はせ若くは歐文の比喩をさながらに俗語をもて譯したるが如き所あればなりこは言文一致体の生れてまだ口を經ぬ程の病にて流石に若返れる元祿翁に及ばぬあり但し是は文の心をいへるにあらで文の形のみをいへる也

批評家往々紅葉を評して只一局部の妙想と文章とに泥める作者也とす或はさる事もありしからん特り此の作は所謂理想派の作に似たり我所謂理想派とは或一種の理法を得て之を活寫せんとするものをいふ鹿を追ふ者は山を見ずといふが理法あらば之を活寫するもの理想家なり「諸行無常」といふが理法ならば之を活寫する者理想家なり而して理想家と人間派とは先後の相違あり人間派の作にも理法見ゆる事あれどそは實際の人間界に理法の見えたると同じ譯にていは

此ぬしと教師三昧

バ自然にいて見ゆるなり理想家は然らず先胸に理法ありて理想的人間界を作るなり故に理想家の作れる世界には一法ありて万法無し一道ありて万道無し儒教ありて佛教なく耶蘇教ありて功利教無く厭世教ありて樂天教無し蓋し理想家の世界は理想家の小世界にして造化自然の大世界にあらす差別兼平等の大宇宙にあらざればなり所謂世界は孔老佛耶を容れて餘りあり所謂理想家の世界は一家言を容るれば充塞す前者は空間の如く後者は容膝の虛の如し前者は宇宙を壺中にをさめ後者は管をとりて天を窺ふ前者は富士峯の雛形を作り後者は富士の一面を畫く其差霄壤のみならず

併しながら世には富士を見ざるものあり富士の一面をも得畫かぬものあり又はじめより思議す可らずとして敢て天を窺はざるものあり彼等の世の海をわたるや落葉の木枯に舞ふと一般飄々泛々風休めば止まり風起れば舞ふ嗚呼此徒に比すれば理想家の高きこと幾等「此ぬし」を評して理想派と云ふは敢て貶したるにあらず人間派の更に高かる可きを諷するのみ

評者は假に「此ぬし」をもて理法を寫したるものとせり愛の力の無敵といふ事を活寫せりとす是或は評者の妄見からん併しながら若し作者の眼中に此理法無

此ぬしと教師三昧

くて此作ありとすれば評者は「此ぬし」の本意の何の邊にあるかを疑はざるを得ず批評家不知庵主人も曾て此理想を賞しきと記す又大概の人情派は理想派の作者なるを信すギツケンス、サツカレーも一方に於ては理想家あるを信す然るにさる事は作者の識らぬ所也といはば作者は何を主として此作をなせしか落めかしたる男兒の性情を見せんとてか戀に焦れたる當世娘の嬌態を寫さんどてか若し果して然らば「此ぬし」の作者はいと狭き義の技術派なり畫工と行を同うせる技術家なり嬌態痴態、恍惚、失望、無邪氣、磊落、小心等の性情を只離れくりに寫す者なり之を畫工に比していはば花を畫き鳥を畫くも花鳥と周圍との關係を畫かざるものともいふべし art for art school としても域の狭きものなりさすれば「此ぬし」は一帖の花鳥畫譜か

紅葉山人は式亭の穿ちに親して甘ずるものにあらずドウグラス、ジョエロルドの筆を得て揚然たるものにあらば肖顔畫工にあらず人物畫工あり人物畫工にあらず浮世繪の大畫工たらんとする者あり性情の種々を寫すと同時に件の性情を左右する理法をも寫さんと試みたるならん只夫の理屈を先にして人間を後にし實を本とせで虚を本とし一を容れて二を容れざるこそ所謂人情派の特質なるべけれ

(其二)

此ぬしと教師三昧

扱又此點は「此ぬし」と「教師三昧」が相同じき所なり紅葉も美妙も共に人を主としたる小説をものしあがらに其立案の次第を見れば二人ながら理法を本としたるこそ不思議され但し是人情派の多少理想派とあらざるを得ざるに基く事にて其人間派と異なる所爰にあり案するに「教師三昧」の根底は習慣と周圍とが人を作ると云普通理法にあるものゝ如し作者の本意を叩かば或はそれのみにはあらずともいはん素よりそれのみにはあらざるべし然れども「教師三昧」にあらはれたる所はなべて我評を證する也主人公志保子の生立を見るに「越めぬばかりにして育てられし結果やうく我儘娘となりて學校にあるを「楚囚」のやうに思ひしはまだまだすがに白糸のいと清き頃ありしを「間々教員室に居残りて四方山のはなし爲て舌を研ぐ稽古の重なりしがそもく身の落つるはじめとなり年十七となりて吉士を思ふ心のおこりて「邪道に足一足」こればかりはおのが心より生じたるに似たれど親をおどして舌を出す癖の偏に「女教師仲間なる羽田富江」の傳授なりしを思へばこれもまた周圍より得し影響あるべし其の他教員

室に居残りて男女席をまじへての天下無し徒では興無しとて阿彌陀の間食にやうく人品を下せしもこれまた尋ねて来て遊ぶ羽田富江の音頭の餘音あるべし斯くて清華學校へ中乗しては腐れたる大氣鼻を撲ち志保子の腸ますく汚れ其のみづから望む所を問へば只嫁入支度と間食と道樂がしたいと計りにて殆ど善惡の辨無し一向に周圍と習慣とに驅るのみされば志保子が我非を意識して其身を省みるに至りしは學校といふ惡周圍を離れたる後に多少の懺悔胸を突き五體刻木にかけられたるやうに思ひしは其惡周圍に遠ざかりて我家の門に近づき不孝の娘をも惡しとせで好める魚を炙り焼ける其いつくしみの香を聴きし時なり見るべし志保子の一舉一動一煩一惱總て外物の刺衝を得て浮べるとを素より心は水の如く情は浪の如くなるべければ風なれば浪はたつまじけれとさりどて全く淨水の如き心は聖人と小兒との外にはあるまじ人間の實際を見れば心の淨水まづ濁ればこそ風來たる時濁れる浪をわけ若くは先づ熱したればこそ風來たる時熱き浪をあぐるなれ志保子の如きは心の淨水に冷温なく清濁無し只常に汚れたる風に吹かれたるゆゑに汚れたる浪をわけたり即ち其性いまだ固からず其質いまだ確定せざる也具にいへば水の穢

くして穢き浪のわがれるにあらで風外圍汚れたるゆゑに浪の汚れたる也水の因にあらで風の因たること明けし志保子は猶白糸のごとし而して作者此白糸をとりて一篇の主公とす白糸の主にあらで如何にして白糸の汚るゝかを主としたるや明けし前に此作と『此ぬし』とを人を主としたる小説也といひしは他の物語派の専ら事を主としたるに對していへるのみ故に曰く『教師三昧』もまた理想派也

『此ぬし』と『教師三昧』とは其理想派たるや一つ也譬へば共に朧月夜といふ妙想を見せんとて春の夜の櫻を畫くものといふべし櫻は末にして朧夜は本也故に朧夜の妙想は明なれども櫻の上にはあらはれず否あらはれざるにはあらねど櫻の影こしらへたるやうになりて間々自然を失ひたりされば『此ぬし』にありては俊橋の性質作りものとなり『教師三昧』にありては志保子の墜落急突に失し殊に其末段の如きは作者の惡戯にこそ見ゆれ造化主の所爲とは見えず人を因とせずして事を本とし想念を先にして現實を後にしたればなるべし斯くいはいば人或はいはん何故に『此ぬし』の主人公を作物といふか俊橋の性情は躍然と見わたるをや前後何の矛盾かある評者汝は俊橋をもて眞の墜落男兒を

寫せりとするか掛くとも作者の本意は眞の磊落にありとするか作者の本意は磊落をもて自らあざむける一種の人物を寫すにあるをや是紅葉の美術家たる所以也夫れ大に嫌ふは竊に恐るゝ所あれば也女を見て大鳴し不潔物と罵る者は内心竊かに女の美に撲れんことを恐るゝものなり昔一婆子有り一庵主に供養して二十年を経にけり常に二八の一女子をして飯を送りて給侍せしめき一日ひそかに女子に吩咐めける事ありけり女子突然に庵主に抱きつきて今いかにぞやといひけり庵主曰く枯木椅寒岩三冬無暖氣と女子歸りてかくと告げしかば婆子我れ二十年いたづらに俗漢に供養しけりとして庵を焼き僧を逐ひけりと聞く女子を見て平然たるものすら尙危うし況や武者振ひするものをや俵桶の女を嫌ふは女を恐るゝが故にて其恐るゝは女を思ふが故なる事智者を俊たでも知るべき事なり作者こればかりの事を知らざるべしや紅葉山人は態とみづからあざむける男兒を寫せるなりと

嗚呼是れ『此ぬし』を辯護せんとして『此ぬし』を破るもの也右手の小川より救ひあげて左手の泥田へおしおとすものなり川も田も共に失墜なるべしといへども評者は川の田にまさりて清かるべきを知るあり而して紅葉山人の失は清き川

渡らんとしてよるめき轉びたるにあり只そのよるめき轉びたるこそ失なれ川をわたることは非ならず即ち作者は無上の無骨漢を寫しだして愛の無敵の力の之をも動かせるを見せんとせし也然るに理法を重んずるの餘り力人物に専らあらずしてまさしく岩木男と作らるべかりしもの終に世間に心中立の偽武骨となれり是豈作者の本意ならんや

若しまた我評を違へりどせば作者はいと狭き區域内にて理法を寫さんとせしもの也偽武骨に於ける切愛の力を寫さんとせし也偽武骨とは人情に脆しといふに同じ情に脆きものと愛の力の關係を寫さば何の益ぞ紅葉山人何條さる益もなき戯れをせんや到底偽武骨をもて作者の本意とする者は作者を愚にする者也

(其三)

『教師三昧』の着想は頗るブラの立案法に似て周囲の影響を重く見たる所面白し但其周圍を重んずるの餘り主人公志保子をはとく無意識の自動機械に作りなせり吾人此篇を讀みて惡周圍の無殘なる影響が次第に無邪氣なる少女をおとしぬるゝを悲む墮落せる少女を嘲らんとは想はずそは志保子は雪の如く淨

けれを常に周邊の惡大氣が彼れを驅りて魔道に誘ひしを知れば也案するに美
 妙齋が志保子の墮落を寫せる所は三味道人が桂女の落魄を寫せる所に相似た
 り共に勢の必至也只其異なる所をいへば彼れは事を主とする故に必至勢を因
 として桂女の境遇の變遷を歸納し此は人を主とする故に必然勢を縁として志
 保子の性情の變遷を誘致す而して彼れは孝女此れは敗徳の我儘娘なれど二人
 物に對する吾人の同感は同じ度也其共に無意識あるを憫れめば也桂女の悲も
 志保子の亂行も皆外勢の所爲也自意識を標準としていへば自ら招き自ら致せ
 りとはいひがたし夫のマクベスが意識して弑逆を行ひハムレットが意識して
 優柔不斷あるとは其の趣太だ異なれり必竟彼れにありては人因とありて事縁
 となれるに此れにありては事をさく因となりて人は却りて縁となれり其間
 は冠履轉倒の差ありこれを人情派と人間派との相異される點とす
 併しながら評者は強に人情派理想派を排するものにあらず東南極まれれば西北
 と合し理想極まれれば現實と合するを知れば也只其理想の圓滿に現せざりしを
 惜むのみ而して『教師三昧』に就きては更に一つの惜むべき事ありなくともある
 べかりし勸懲主義これあり『柵柙紙』早くも此點を評して『蝴蝶物語』を宗とせる

かどやうにいへるまことによくもいはれたり思ふに作者の寓意此假作的女學
 生を犠牲として幾多可憐娘の墮落を救はんの大誓願なるべしさればこそ口を
 極めて冷罵冷嘲して志保子其人をしてはどはど身を置く所を無からしめたれ
 此殘忍不自然なる嘲罵は美妙齋の本心にあらじ若しまた假に然らずとし作者
 眞實に志保子其人を憎惡して叱咤筆誅せるものなりとせんか其心太だ解しが
 たし何となれば若しかゝる憫れむべき自意識無き罪のなき乙女を筆誅するに
 だに斯かる鋭き筆法をもてせば他の意識して惡をさせる極忍極惡の奸賊を誅
 するにはまた如何さまの筆を用ふべき昔の歌人かにかしが其子をいましめし
 物語を聞きも知らぬやうにかいたるものかまこと惡むべきは自ら識りてす
 る罪惡あるべきに
 跋を見るに「一字かいて血の涙云々」三字四字とあれば骨肉の涙云々とあり作者
 の冷罵は勸懲主義よりいでたるにて本心にあらざることを明か也さもあらばあ
 れ評者は此不自然ある冷罵冷嘲の勸懲主義よりいで、作者の本心にあらざり
 しを喜ぶと同時に美妙齋が勸懲主義の一將となりしがために此微妙ある悲哀
 小説が甚だ殘忍なる滑稽小説と化したるを惜まざるを得ず嗚呼紅葉山人は主

人公を寫し誤りていとめでたかるべき妙想の範圍を狭うし美妙齋主人は勸懲
魔に誘はれて好トラジエデーを殘ひ了んぬ

三上、高津 兩學士合著 『日本文學史』 上 卷

日 本 文 學 史

地味季候を察せずして種蒔きくまらば人皆其愚を笑ふべし然るに今の文士動も
すれば我文學の地味季候を察せずして新文學の種子を蒔かむとす順序轉倒と
いふべし爰に三上、高津の兩學士多年刻苦して『日本文學史』を編纂し大に當世を
益せんとす此書は實に我文學の風士記也何の花の我國にはいとよく咲けりし
か何の實の最もよくみのれりしかは此書を讀めば瞭然たり此書一たび廣まら
ば熱帶地方の植物を取り來て強て我國に移さむとする者も大に悟る所あるべ
し程無く我文學の園生そのよはまことの花とまことの實とをもて埋もれん此書編纂
の法も頗るめでたし漢學佛教の輸入假名文字の發明等は我文學に影響を及ぼ
せる大要素なるが著者よく爰に心を籠めていと詳細つてらに説かれたり上卷は上古
の文字有無の論よりはじめて平安朝の文字をもて終れり其間の國文の變遷目
に見るやうに記叙評論して文例もいとゆたか也人の欲に限りはなければと我最

日 本 文 學 史

初の文學史としては誰か限りなく欲をいはいはむや只少しく欲をいはいはむ卷頭にい
と長々しき文學論是れ疣也凡例の中に短く記されて當然なり初學の便にとて
の老婆心切と見ゆれど文學論としては深からず初學の爲としては長々しきに
過ぎたり第二には古文に註解の無きこと教課書としては不足なり此まゝにて
は地方の教員は困すべし又總て文例を別にして本文の末に一束とせられたる、
却りて學ぶ者の爲に不便なりこれは評論の都度且論じ且例證せん方便利なる
べしざる例は西の文學史にはいと多く且よくすれば最も興のある法なるに何
故に用ひざりしか

何はともあれ我文學界にとりてはよき賜也文學に志ある人は一本を求めて座
右におくべし此書は日本文學の地味誌なり、地圖なり、地圖地味等を見て後にこ
そ開拓はすべけれ

下 卷

此書上卷の畧評は已に往ぬるころものしたりき今また其下卷の成れるにあへ
り我文學のために祝すべし聞く所によれば此書の上卷は已に國學院、東京専門
學校等にては教科書となり往々ゆくは高等中學校をはじめ哲學館、華族女學校等に

日本文學の本學史
 ても用ひらるべしとぞ此書の時の必需に適ひたる良著なること著けし
 比較上よりいへば上卷の方は日本文學の變移せる道筋尙さすがに單純なれば
 編者の苦心も割合に掛かりしならんが下卷即ち鎌倉時代以下の文學に至りて
 は文學稍や進化して多岐多般にありにたれば材料もおのづから雜駁多端なら
 ざるを得ずこれを分析し總合し取捨淘汰せる編者の骨折そもいかばかりあり
 けん思やるに餘あり偶々漏れたる事のあらんも穩かならぬ解釋のあらんも是
 はた止むを得ざる所なるべし殊には編者深切にしてをさく初學の便宜を思
 量し教科用書あればいと豊に文例を擧られたれば自然本文の區域を縮めて爰
 に此事のいはれでは叶はじと思はるゝ事の終にいはれで止みたりと見ゆるも
 流石に多かりおしおべていへば下卷は上卷よりも雜駁にて讀みて益すべき事
 も面白かるべき事も多からん代りにはまた難すべき節も多し併ながら此著の
 よしあしを云はむとならん先づ此書の文學史の破天荒たる事を思ひ兼ては此
 の書の教科用書としてもせられたる事をも思ひ扱後に兎角いふべきなり評
 者の見る所によれば編者は頗るよく其任を盡し凡そ我文學の生長に影響を及
 ぼせりと思はるゝ文章は殆ど網羅して剩せる所無きが如し人若し此書を繕か

日本文學史

ば日本文學の地味と地圖とは瞭然として見ることを得べく古來いかなる花卉
 のはなさきいかなる實のみりしかは此掌の筋を見るにも似たらん龔に評者
 が此書の上卷を評して風土記也といひしは此故也例へば鎌倉時代の文學と題
 せる編を見よ厭世の秋風立そめて梧桐の一葉の散り蓮の花のすがれて佛臭き
 『方丈記』も『平家物語』も此初秋にこそ咲きけれ正に是哀はしるき秋の夕暮にさん
 ありけらし此一篇は日本文學の初秋に於ける風土記也さて第五篇なる室町時
 代を見よ厭世の旨味は此時もまだ染透りたれど人々やうく秋にちれてや今
 は初秋の頃のやうに珍しげに秋々ど口毎にはいはずさりとて秋雨の淫がはし
 う降つゝきて野分おそろしく鄙も都も荒たればにや七草も疾くすがれ紅葉も
 早く散り霜雪徹すさまじく降て氷はりつめたる恐しさに辛うじてそだちし室
 の花だにいと稀也たましく其をさがめけん人は金殿玉樓に籠りて佳人の紅袖
 を屏風とせし室町聚樂の貴人のみちりけんかし夫の謠曲連歌さとの流行は臘
 梅寒梅の又來ん春を知らせ貌あるにも似たるべし此あたりの叙事は日本文學
 の冬枯の風土記とやいはましさて又第六篇江戸時代の文學に及ては四方山の
 草木よみがへり芽を含み花の兄も色めきそめ岸の楊柳も生きて見ゆるさど是

日本文學史

初春の景色也。隨て元祿の梅櫻桃李さても咲きたり匂ひたり霞や花、花やかすみ、此あたり豊に文例を擧げたるは日本文學の春の風土記を盡くしたりともいふへし、それより又次第に降りて寛政このかた文化文政とありては表面浮いたるやうにて裏緊り花やかあるやうに見えて沈み盛極りて衰へんとしたる是豈秋の風物にあらざらんや尾花萩女郎花の優なるは更にもいはず紫菀桔梗杯唐めいたるも色を競ひ唐なでして千日艸莖艸さど雅びたる又は俗びたるもの、數を盡して咲亂れたる文園はさながら羅綾の如くあり況して千代見艸の紅葉と共に錦の上に錦を添へたるをや同じ秋景色とはいふものからかの室町の秋には似ざりけり當年の人の心にはねそろしき維新の雪あらしわらんとは小春日和に端居せる嫗がうたゝねの夢にだに浮ばざりしなるべし此は是晚秋の園の記也

以上いへる如く春夏秋冬おしなべて日本文園の地味風土、花卉の品々、いと詳細に記されたる、いどめでたし明かにいへば何の世には如何ある文体と文致とが行はれ何を專としてものせしか其中の稀者は誰々なりしか其人の特質はいかに奇を頗る細に説かれたり蒙駝の翁に其もたる園の地味と花卉の種類とをき

日本文學史

けばとてこれよりは詳からし是書を評して良き日本文學の風土記也といふ所以也

爰に少しくあきたらぬ節をいへば此書我文園に幾回の大變遷(我所謂春夏秋冬ありしことを記し其都度花卉の品の變りし事を語り其花の形をも示したれど如何にして春の季の割合に長かりしか又いかにして春の暮れて夏となり秋とあり冬とありけるか其あたりの解釋はたばろげ也比喻を離れていはんに鎌倉時代の人は造化、人性、神佛人の運命等の大題目に關してそもいかさまの觀念を抱きたりしか當時の所謂厭世教とは如何さまのものなりしか本文に只少しくいひたる如き一時目前の感慨のみによりて起りしか若くは更に遠き因縁ありしか此あたり甚だ漠然たり南北朝室町時代とても其如し如何あれば厭世的鎌倉時代の究極して活動的南北朝時代を生じけるにや南北朝以後の文學には如何ある特相(主觀的特相)の現れてありしか、造化、人間、神佛等に於ける當時の觀念はいかさまなりしか此あたり又漠然たり江戸時代とてもまた其如し蓋し編者の主とせる所は各時代の文學の主題と客觀的特質とに止まりたるに似たり主觀的特相即ち當時の人情、觀念、着眼等に至りては概して搔撫に論じ去り其因

日 本 文 學 史

縁を究めずして止みたり此故にこそ此書は眞の文學史といはむより國文史といはむが穩當也といふ者あるなれ評者此非難を破らん力無し扱また卷末に至りては今一つ惜き事あり何ぞや編者の院本小説を叙するや勸懲主義に似たる定規を取りて假にも卑陋の嫌あるものは其形によりて取捨褒貶し就中叙事の中に慷慨めいたる論を交へたる事是也是必竟上卷なる文學の定義より派生したる結果あらめと所詮は文學をもて古今に通じて教訓の具と獨斷したるより生じたる弊也よしや一步を譲りて文學は教訓の具也とするも文學史を編まん折には卑陋ある過去の文學をも實際成立しものなれば叙せざるを得ざるにあらずや諭へていはんに假に正史をもて儒家の云へる如く訓誡の具とすども實際ありし事あらんには弑逆の事蹟をも記さしれれば叶はざるにあらずや元より教科用書なれば文例を擧げんは憚あるべし抽象的叙狀的に叙述せんには何の非きとかあるべき否細に叙せざる可らざるなり西鶴も其積も春水も將た黄表紙もこんにやく版も江戸時代の幾分を代表せる主觀的歴史なればあり殊にいふかしきは編者の所謂理想の解釋也編者は近松をもて不完全ながら理想を有りしといひたるが近松の理想の何なるかは竟に説かず此理想こそは主觀的歴

日 本 文 學 史

史の要素なるべきに明解なきこといふかし編者はまた西鶴其積等を斥けて何の理想も無く物かきしやうに叙し去りたるは如何にぞや蓋し戀情派にも理想はあるべく勸懲派にも種々の理想あるべきに馬琴流の勸懲主義をのみ唯一の理想の様にいひなしたるはいとく解しがたき所也其他俳諧者流を叙したる所も大抵皆形の上の評也本文の如く江戸時代の通俗文學は何等の普通觀念をも映射せざるもの、如しいかでさる道理のあるべき要するに此書の欠點は其主觀的國史とやらで客觀的文學史となりたる所にあり評者が此書を揚げて日本文學の良風土記といひ抑えて國文の歴史たるに過ぎずといはむとするは此故也併しながら此文學の風土記は其廣きこと春夏秋冬に涉り剩へ花卉の標本をさへに擧げまかのみあらず相互の聯絡をも叙したるものされば客觀的文學史としては十分其職を盡したりと云ふべし夫今日は磁石も亦く海圖もなく茫洋たる文海を航せんとする時也此明細なる文海の圖のいで來たること其道の人に取ては其効益いくばくぞ況んや羅針盤の功用さへおのづから其中に籠れりと見ゆるをや此書若し五十年前かたにいできたりつらんには何人か月桂冠を編者頭上に加ふることをたゆたひし

妄想録

博覽多識の餘業なるべき隨筆漫録を吾徒が倣はんは悪女の顰にもまさる物笑ひならんさりながら漫録にも種類ありて温故考證を旨とするもあれば只思ひいづるまゝを述ぶること『枕草紙』『徒然草』の如きもあり、我れ學に貧しいへと思ふこと無くてやあらん、言はぬは言ふに優るといふは燕若らば市川團十郎乙女ならばオヘリヤ姫若の抜いでたる際にこそいはめ、吾々づれば徒に胸にたゝみて言はざらんよりは打出てこそ教を受くる傳手をも得め、或物は皆無より佳しとは爰なるべしとひとりうなづきて限りなき思想をかきはじむ嗚呼の限の沙汰なりけり

想

録

奴

淺知と至聖との外は人間の究竟目的は何ぞと問はれて我れ之を證せりと輕答せざるべしされどおぼるげに遍く人間の爲にするありと言はゞ大かたの人類かん、或は之をなみして神の爲にするありと言はん、神を認めぬ間は領きがたし、

奴

或は眞理の爲にするなりといはん、人間を離れたる眞理といふものを認めぬ間は領く能はず東方の聖人は曰く一切衆生云々と、是人間兼或物なるべきのみ、人間を離れたるにあらす、西方の聖人は曰く天下同胞云々と、是豈人間を重しとするものにあらすや吾徒の眉間掛くとも人間無かる可からず人間の事業百千万億種政事家、實業家、宗教家、美術家、學者、文人、何ものか人間の爲にせずしてよからんや、然るに今の世偏に政事の爲に政事を行ふあり、是政の奴あり、偏に實業の爲に實業を力むるあり、是業の奴なり、或はたゞ學問の爲に、若くは美術の爲に學を攻め美を求む、是學の奴、美の奴降りては文章の爲に偏に章句を彫琢し些も他を顧みず、是文の奴、あり共に人間の遊民あり、鼓を鳴らして責むべし、若し夫れ私利私欲の奴と墮落して同胞を害はんものは嗚呼何をもて攻むべき

舊幕時代の學者

おしなべては言はれまじきが舊幕時代の學者ばかり多忙ありしは稀あるべし、當時は學者といへば何事をも知らぬこと無き人 (Jack-of-all-knowledge) と人にも

舊 幕 時 代 の 學 者

思はれ我れもまたまか心得たりしに似たり、伊藤仁齋がまかみ火鉢とはいかに書くぞと問はれて答ふる詞亦く未だ考へ申さず、追て御意得べしと言ひしよしと『八水隨筆』の中に記したるを、千萬例中の一なるべし、されば當時の學者はかゝる瑣細の事をだに知らざれば大なる耻のやうに心得、競うて瑣事の穿鑿に力を盡せしことは所謂隨筆の殆ど悉く瑣事の考證をもて埋もれたるを見ても察すべし、而して其考證は重に俗人の質問に答ふるが目的なれば、や隨筆の紙數と冊數とは多けれど吾徒が讀過して殆ど何の益も無きが多し、偶々玉片金粉のきにあらねど所詮玉片金粉たるに止まりて粧飾にも實用にも用ふ可からず、踏を換へて評せば其考證論辯、大抵一事一物、一時代、一箇所にのみ關したる特殊の事實に止まり、廣く應用せらるべき普通の理法にあらぬ故に其益は多くとも好古家若しくは好事家の娛樂の料とあるか否らざれば風俗史の材料となるに過ぎ、茶山徂徠の隨筆おほむね皆然り、『桂林漫錄』『善庵隨筆』のたぐひも博覽の癖ごとなり、併しながら斯の如きは強ち彼等に科學的思想の乏しかりしにのみ歸しがたしむしる博識博覽を譽とする習慣が此弊を醸しきと云ふべし、今の世の學者は専門に安じて未だ舊幕の學者の如くに博覽博識を宗とせざるが如くなれ

結 構

と、人に負惜み自惚の病のある限はようせず、同じ弊に引入られ、亦ん廣く知ることども要無きにはあらぬと深く知りてこそまことの用はあらめ、世間よ學者をもて博覽家と同視するを休めよ、學者もまた瑣事を知ることに汲々として大切なる日晷を徒消すること勿れ、若しまた自然に多く知ることを得ば之を分類し統括して或一理法を推定することを力めよ

結構的批評

維新前の批評はおほむね古格を墨守するをよしとせる保存的批評にあらず、個人の愛憎によりて妄に褒貶するの外なかりき、就中著作の批評は世に公にせらるゝ限は漢土の文人の弊を受けて、只徒らにはめそやして修辭の末枝をたふふるに止まり、廣く文學を益すべきもの稀なりき、維新の後外國の文物入るに及びて政治社交上の事物よりはじめて、次第に破壞的批評法行はれ、固有の事物としいへば玉石を混交して瓦礫なりと打破する風さかんになり、ゆき延いて歐化主義となり、聽て西洋崇拜主義となり、風俗も習慣も文學も悉く破壞せられんとしたり、就中文學の如きは其形文章も其心理感情も英佛の物に似ざらんを後

結 構 的 批 評

れたりとなし和文は貶しめられ雅俗の折衷文は飽かれ四書五經は古書肆の塵にまみれ馬琴種彦等も名聲を全滅せられあんどせりきそは當時のなべての批評が偏に破壊的ありければありざる程に機運一轉して西洋心酔の夢漸く驚き一轉して國粹保存主義となれるに及び萬に保守の風勃興せしかば遂に文學にも其餘波及び一方には元祿文學の熱となり他の方には所謂國文學の熱となりぬ併しながら此等は公平に評せば前の歐化主義の反動即ち破壊主義の反動にて情の沙汰多分を占めて理性の沙汰いと慙おしされば其前かた力を盡して他が破壊せし惡習慣を此反動の熱に浮がされて又回復せんと力むるやからあり過ぎたるは猶及ばざるがごとし蒼海の波の如く低く又高からんとは人間相のやむを得ぬ所とはいひながら幾たびも同じ事に行きて返らぬ日を消せんこと可惜ともまた可惜し案するに萬般の事今は結構建立すべき心組にて精密穩當に批評すべき時到来り他事は暫く措くひとり文學に就きていはんに西鶴を再興するもよし近松を稱譽するもよし馬琴もよし種彦もよし八文字屋も江島屋もよし只妄に反動の熱に浮かされて稱美するをなさで何故に彼等が稱せらるべきか其美は何の邊にあるか其醜は何の處にあるかと情の沙汰によらで明に理

眞 善 美 の 日 本 人

性をもて判すべきなり古文近古文の興隆もよしただし何故によきかを辨せで妄に修辭の末枝をかしましく罵りて時文の成長を妨げんとするが如きは子の取る能はざる所あり所詮今年の二月迄の文壇の模様は反動の熱の醒めざるものと見たりわはれ情を擲ちて冷に又誠實によしわし草の葉並撰わけて取るべきは取り棄つべきは棄て予が謂ふ結構建立的批評を行ふべき人のいでよかし何者か第一陣に駒乗いで、紫式部の文學者としての本相を科學的に鑑破して彼れは其の已に得たる文章家たる名譽の外に大詩人といふて層高き與一層高き名を天下の文壇に有すべきものか否かを道破するものぞ又何者か眞先にたちて西鶴近松馬琴種彦を修辭家といふ資格を離れてまことの文學者として鑑破するものぞ明治廿四年以後は文章軌範的批評の時代にあらず金聖歎的批評の時代にもあらず將破壞的批評の時代にもあらず世間幾多の才子、建立的批評の如何あるものあるべきかを案せよ

『眞善美日本人』

故の江湖新聞の主筆『日本人』の記者『哲學涓滴』の著者文學士三宅雄二郎氏一書

を著して『眞善美日本人』と題せり紙數僅に四十葉餘り眞に副々たる一小冊子の
み而して其文を讀めば言々肉有り句々血有り全篇活きて動き紙背に聲あるか
と疑ふ近來の快文字若し讀者を動かさざる文を死文と名づけば此種の文を呼
びて活文といはん

著者夙く哲學家をもて知られたり然れども曾て『江湖新聞』に『日本人』に氏の文
の屢々出づるや予讀みて竊にれもへらく氏は甚くども氏の文は冷灰的哲學者
の文に似すと己にして『哲學涓滴』の卷初二三章を讀みてまたおもへらく我見つ
る所大に誤らざりしに似たりと今や又此著のいづるにあうて予はますく我
見のたがはざりしを信せんとするなり案するに氏は多血性情熱的哲學者の一
人なり彼の虚靈界を重するの餘り殆ど現實界を忘れんとし終に人間を忘れん
とする冷淡死灰の如き出世間淡にあらて虚實雙界を兩脚にふまへて眉間常に
人間を脱却せず平等即差別を觀じて自國の眞善美を護らんとする情熱火の如
き世間淡なり若しウチーヅナーヌが言へる如く情熱の語をもて詩ありといは
ば若し理解力に訴ふると共にをさく感情に訴ふるを科學的當代の詩歌なり
といはば若しルーソー、バルン、カトライル、エマルソンの徒をもて抒情的散文派

眞善美日本人

眞善美日本人

の詩人なりといはば『眞善美日本人』の著者は正しく明治の一詩人にして而も詩
人の資に富みたること他の韻語家（ポエツ、メトルス）の比にあらずといはんそは其一句一解總て
活動的の血肉より成りて酷だ彼の豫言者の口吻に似たればあり其理想こそ同じ
からざれ其優劣こそあるべけれカーライルが當世の豫言者たりし所以ルーソ
ーが當時の豫言者たりし所以も蓋し三宅氏が今日に豫言者たらんとする所以
と敢て異なること無かるべし

シエーンスピヤの傑作を讀むや不易の活造化髣髴として吾人の眸に映ず而し
て其著書は迴然として天外にあるもの、如く吾人竟に其姿を見ず大ドラマチ
ストは宛然小造化翁に似たればなり然るに夫のミルトン、カーライル、シエレー
等の傑作を讀むや著者の理想界躍々として現じ讀む者の血は表えんとし肉は
跳らんとし無明はこれが爲めに明かならんとし懦夫はこれを得て起たんとす
理想詩人の豫言者たる所以は蓋し茲にあり若し『日本人』の著者をもて詩人あり
とせば實に此の後派に屬するものか思ふに三宅氏は同胞四千萬の迷夢を覺破
して未來に善美ある大日本國を造りいださんと試みるものあらん

著者先づ日本人の本質の條下に於きて宇宙主義と列國主義との矛盾せざるべ

き由を論證し「圓滿幸福とは眞善美を極むるを謂ふ」と前提し來りて其眞を極むるや猶金星の經過によりて太陽の距離を測るが如く及ぶべく多く及ぶべく異なる地より之をなすを要すと説き廬山の形かなたよりは峯と見ゆるも此方よりは巒と見ゆん峯を執り巒を執り彼是此非と言ふ廬山の眞終世見はれと隱喻し暗に歸納的論證の止むべからざるを諷して列國對立の必要を説き善を極むるも美を極むるもまた復然らざるを得ざるなりと辯じて竟に我日本人は其特有の材能を發達せしめて彼れ白人種の缺陷を補ひ眞善美圓滿の幸福界に進むべき一大任務を負へるものたるや必せりと斷じたる所極めて壯極めて快日本男兒誰か起つて賛同せざらん哲學的問題としての正否は暫く措く之れを愛國的抒情詩として見れば起し得て雄渾壯大頭首先づ大に振ふものと評すべし次に日本人の能力を論じたる一節は純然たる一編愛國のリ、ツク、ポエトリ、甚くとも之を諷める當坐は蜻蛉洲中蓋し一人の卑劣男兒無からん嗚呼散文界に於きて此大抒情歌を見韻文界中に此者を見ざるよまこととに怪むべき哉著者は更に進みて日本人の任務を論じ之を三段に分ちて第一に極眞に於ける日本人の任務第二に極善に於ける日本人の任務を説けり論序整々として一絲

も紊れず加ふるに證例いと豊なり此あたり稍や抒情詩的詩趣に乏しき代りに議論としての價は高からんとせり最後に第三の任務に論及し極美上に於ける日本人の任務は其固有の美質たる輕妙の能を發達せしめて各國の藝術と懋を駢べ相競争するに如くはなしと説きてたとひ其特質にして口を極めて稱揚すべきものにあらざるとするも非難を容るゝの餘地かからんには益々之を字内に撒布せよ之れまた人類の美を極むるに於て一箇の手段なりと斷言したる所稍やまた抒情詩の口吻に似て讀む者の肉動かんとす嗚呼我同胞四千万人皆起つて此小冊子を一誦せよ平等に徧りて差別を忘るゝは相對に拘らひて絶對を見ざるものと其惑ひや一なり且つ万般の詩文を讀むに只管冷灰的眼光をもてすること勿れ哲學科學の書と沒理想の世相詩との外は須らく時と處とを忘れずして讀むべきあり竊に方今の學弊を案するに似而非哲學の流行曲學の誇術漸く其勢を逞うして煩瑣的死灰的批評こゝかしこに流行せんとす一時の方便教を評するにも不易絶對の標準を以てし所謂杓子定規の狭く且窮屈あるを用ひんとする者あり彼等の言ふ所の如くにせんかッポツプも取る所なき妄言家にてカーライルも一個の妄信者ならんミルトンも一

個の偏信詩人にしてルーソーは勿論狂人ならんバイロンの抒情詩は總て皆愚人の囁語にしてシエレーの抒情歌は悉く痴人の謔言ならん然り或は妄語たるに過ぎらん但し之を妄語なりと斷じて敢てみづからは不言不説當世にも後世にも何の裨益する所無き術學者と擧ぐとも當世を裨益したる此等空想家どの功勞を比べバそもいづれをか高しとすべき起てや同胞起つて抒情詩人の理想を讀め、日本をして三宅氏が理想中の日本とならしむると否とは一に君等が心にあり三宅氏が果して豫言者あるか否かは彼の冷灰的僻見を脱せる情熱的君等が心に於ける此の書の影響の如何に因らん三宅氏は果して豫言者か否か余は敢て判せんとはせず、只君等の僻したる眼が此の明治のアルンドをして此當代の小カトリアルをして對手彈琴の械わらしめんことを惜むのみ、嗚呼聽く者のみからんかアデンスの武器庫を震蕩しきといふデモスセニズの雄辯も無人孤島の落雷のみ心耳を洗ふ、廣訶薩の妙音もサハラの荒漠に通へる風のみ

讀法を興さんとする趣意

人は其思想を他に傳へんとす

人は思想する動物なり人と思想とは離る可からず人は相感する動物なり人と相感とは離る可からず此の故に人は社交の動物なり人と社交とは竟に離る可からず哀歎苦樂の別を問はず人の苟も内に思ふ所ある時之を外に表して其同胞に示さんとするは蓋し此理に因る例へば樂天派の先覺が其所見を公にするは現在の有限を知らず忘想の無限に苦める者を慰諭せんとするに由るべく厭世派の先覺が其所感を公にするは此有限の穢土に知足して自ら醜陋に安んずる者を撻破せんとするに出づるからん而して大慈人大至人が其神聖の教を説くは遍く迷惑の衆生を悲引して有限と無限と幽と明との關係を明にし安養の彼岸に達せしめんとするに出づるからん案するに人間に此相傳へんの天性あるは造化の不可思議配劑にして相憐み相傳へて相提携することの人の天命たるに因らすんバ非ず然れども人誰か生れながらにして此隱秘ある天職を識るべき滔々たる天下、人の大かたは私情の動物也私利の爲に思を吐き私利の爲に情を語る才學識ある者は我が慢心に媚びんとて思を吐き私苦私樂ある者は其私を抒さんどて情を吐き以て世間の相感を呼ぶ之を前に謂へる使命に比せば其差ふ所幾ばくぞ吾人の多數は此差の善惡を知りて而も善に赴くを得ず斯く

論ずる者も早く已に奈落の底にあるべしさもあらば賢も愚も其思ふ事を
 表白して他に傳へんと樂ふや一あり人に其思を表示せんとする欲あるは天性
 あり動かす可からず

思想を他に傳ふる法

人は已に其性の自然によりて其思を他に傳へんと樂へり彼れは如何にしてか
 こを成就す夫れ人の心は其面の如く殊あり、思想を傳へんとする欲は同じけれ
 ど其本意は千差萬別あり例へば孔子釋迦耶穌の如く世を濟度せんの本願あり
 て高上ある教法を説きしもあり若しくばメンテ、シェークスピア、ギョオテの如
 く人間相の秘密を寫して普く世間に示さんと試みしもあり或はアリストート
 ル、ペーコン、デカルテの如く舊妄誕を排斥して新學問を闡明せんとするものも
 あらん或は近古の哲學者の如く有形無形の兩界を一貫して真理の根底に到
 徹せんと願ふものもあらん或は又尋常の多數の如く自家の才學を示して功名
 を博せんとするもあらん將た又大多數の男女の如く單に私の胸懷を披露して
 同胞の相憐を買はんとするもあらん其本意の多様あらんことは辯ずるを須ひ
 ず但夫の思想相傳の法は予は僅に二種あるを知るのみ著作とライティング話説とスピーキング是かり話

説は本題の外さればいはす乞ふ著作の事を説かん

上代の著作と今代の著作と

著作の名は一なれど上代の著作と近代の著作との間には其効用の上に相違わ
 り其故をいはん何れの國にても上古の時代には印刷といふことなく料紙さへ
 もいと乏しかりしかば随つて書き寫すことも盛ならず此故に偶々著作する所
 あるもそを他に傳へんはいとく難義なりき開明の今日にては便利自在ある
 印刷術の助あるが故に只我が思念を章句となして表白することを得ば立地に
 之を印刷して世間數萬人に傳ふことを得れど上代にはこの便宜無し第一料
 紙乏しきが爲に高上なる觀念も徒に古市の斷片に書きとゞめられ若しくは西
 洋ならば羊の皮紙の片端などに書きしるされたるのみにて永く作者の坐右に
 とゞまり又は古つゝらなどの中に押込められて風にも觸れず日光にも照らさ
 れで埋没せしこと多かるべしたましく寫し取りて相傳へしことあらんもそは
 數十人若くは多くとも百人に足らぬ小社會の間ありしなるべし物に譬へてい
 はゞ近代の著作は浮屠氏の謂ふ大慈大悲觀世音菩薩の如し筒の絶大觀念が作
 者の胸懷より解脱して或あした如意自在ある印刷の機械壇に來降するや料紙

の白蓮華紛々として翻り紫雲漲り黒龍躍り奇機回轉して靈響の瑟々鏘々たる間に件の大觀念は一刹那に化して三十三身とあり須臾にして三百三十身となり三千三百身となり三萬三千身となり其國語の行はるゝ限の大世界に入散して大光明を放ち奇妙相を現す其降臨して法を説くや豈嘗に十九說法にとゞまらざるべき讀む者の信心の次第によりて億萬の法を説くとも思はるべし大觀念の本尊は唯一位一跡あれど印刷術の功德によりて分身斯くの如く自在あり古代の著作は然らず比喻妥當ならざれども假に之を耶蘇教の唯一神にたとへんそも大自在全能ある神品の光明は元より廣大無邊にていとよく大宇宙を掩ふに足れど元是唯一跡不可分離的神品あれば分身八散せずして常に超焉として天上の世界に孤在せり信心渴仰のともがらは猶聖廟に於ける中古の香客の如く山河千萬里を遠しとせで我より進みて彼れに賽せんとせば大慈悲の恩波に浴すべきが他の彼を知らざりしものは憫れむべし件の唯一神品は曾て歸依渴仰せざるものゝ身邊へは降らざりし也之を明にいへば古代の著作は廣く讀まるべきものにはあらずりし也さうながら人の著作するは我が感想を他に傳へんと願へるに外あらねば件の神品いつまでか空しく天外に超焉たるべきむかし

耶蘇教の唯一神が時に人間に化現して濟度の遊歴を試みし如くに或方便を求めて世間に現れんと欲するに至るべし此に於てや朗誦朗讀の必要起り此に於てやホーマルは『イリアッド』を朗誦して希臘の列國を遍歴しヘロドタスは公衆をつとへて其史を朗讀しき上古の希臘人が文の節奏あると節奏なきとを問はず有調と無調とを問はで常に公に朗誦して以て衆人に聴かしめしは全く此必要に因ることにて又國土の東西を問はず誦し易き節奏文の先づ起りて無調の文章の後に興りしはた此理に因る也されば上古の時代に於ては著作と朗讀とは猶上唇と下唇との如く相伴うてはじめて人の意を發露し若くは車の兩輪の如く相裨けてはじめて人の思を運びき今の所謂默讀は恐らく其ころには行はれざりしなるべし

讀法の種類

然らば今日の如く教育普通したる世とありて一編の文章の忽ちに化して數萬部の印刷物となり同時に億萬人に默讀せらるゝ世となりては最早朗讀すべき必要はあるまじき筈也といふものもあるべし彼等或は論じて曰はん著述を朗讀するは古へ未開の世の必要件にて今の開明の世には要なき事也今の世は文

章の○意○味○を○解○し○誤○ら○ざる○ま○で○に○默○讀○若○し○く○は○素○讀○す○る○こ○と○を○教○ふ○れ○ば○足○れ○り
昔○人○こ○そ○耳○を○も○て○他○人○の○作○を○讀○み○た○り○け○め○今○人○は○目○も○て○讀○み○得○べ○き○便○宜○を○得○
て○而○も○今○の○人○は○概○し○て○普○通○の○讀○書○眼○を○具○へ○た○り○何○の○爲○に○か○朗○讀○し○若○し○く○は○朗○
讀○法○を○學○ぶ○要○あ○ら○ん○古○へ○は○朗○讀○法○と○い○ふ○も○の○實○用○技○藝○な○り○け○ん○が○今○の○所○謂○讀○
讀○法○は○假○令○用○あ○り○と○す○る○も○僅○に○人○心○を○娛○し○ま○す○と○い○ふ○美○術○の○末○班○に○列○す○る○に○
過○ぎ○と○と

かゝる論者は讀法に素讀あるを知りて他あることを知らぬ者なり予が謂ふ讀法
の如何なるものかをいふ前に先づ讀法にさまざまあることを辨すべし

讀法を大別して三種とす機械的讀法と文法的讀法と論理的讀法と是なり夫の
默讀も讀法の一種ありと雖も實は前にいへる三讀方をば無言にて行へるに外
ならねば茲に別目とはせざる也蓋し讀む者の才學識見の多少によりて其名は
同じやうに默讀といふとも其効用の實際は或は機械的讀法なるもあるべく或
は文法的讀法あるもあるべく或は論理的讀法あるもあるべければあり曩に塾
庭篁村氏が『國民の友』にて『讀かた』を論じてたどへ音讀せず黙讀かりとて心に
其調子を取りてよく讀みてこそ始めて書中の妙味は解せらるゝなれ云々とい

はれしは茲也默讀は人次第にて三讀法に相通と知るべし

機械的讀法 (Mechanical Reading)

機械的讀法とは俗にいふ素讀なり文章の句讀だに殊更には注意せずして只文
字の並びつちがれる順序を追ひて例へば小兒が論語大學などを素讀し老練な
る變則の英語學者が英文の朗讀をすらんやうに只さら／＼と讀流しゆくとい
ふさて此讀方をする人の聲いと朗かにて流暢なれば之を褒めて立板に水流し
たらんやうなりといひ之を譏りて素直なるノツペテ棒讀といふ扱またいと／＼
拙き時には之を嘲りて『辨けい』がナギなたを讀ども村雨過ぎての雨だれ讀ども
いふ篁村氏の謂はれたる『唐宋八家文のドウツヤ節にて種彦春水の作を讀み』三
馬の浮世風呂一九の膝栗毛を立讀にエー／＼と節あしに讀む輩は思ふに雨だ
れ黨の甲羅經たるにて氷柱黨など名づくべきものあるべしさて其氷柱の溶け
て立板に流るゝ水の如き讀かたあらば可きかといはんはんに是とて唯機械的に
さら／＼と讀流すのみなり傍聞きせん者の之を解し得るか否かを思はず故に
其聲は流暢にて朗かあるにも拘らず文意どころ／＼解しがたく若しくは唯お
ぼろげに聴取らるゝのみに止まることわり近年すなる謝辭祝辭吊辭答辭等の

朗讀は問々、此機械的讀法もてさら／＼としてのけらるゝ事あり此法にて讀めば文は哀げなれど讀聲は勇ましく言葉は悲壯なれど讀みざまは泣くが如きことわり所詮讀む聲に情無く溫度無く生活無し此法或は名づけて死讀法ともいふべくや關根正直氏が讀法の研究を創唱せられしは全く此弊を歎かれてなり今は教育普通の世あれど百人につきて死讀法を行ふもの甚くとも九十人の割合あらん而して死讀法にて文を讀める者に其文の本旨を解し得るもの予の経験によれば殆ど無し墓無き俚歌童謠も活眼をひらきて論理的に讀めば時に『毛詩』『萬葉』に髣髴たる旨味を含みたるを見るとあれど死讀せば『聖書』も一編の活字の排列孔聖の教のふみもシェークスピアの靈妙の脚本も甲は玉編の若干字が機械的に聯關して並列せるもの、如く乙はアルハベット二十六字が Odd combination を作りとも見ゆべし

文法的讀法 (Grammatical Reading)

文法的讀法は所謂朗讀法の本領にて又の名を正讀法ともいふべし發音法に合ひ句讀宜しきを得讀聲の緩急抑揚よく文意と調和して正當なるが故あり即ち文章を朗讀して他人の聽覺に訴へ彼れの視覺に訴へたらんと同様の感銘を生

せしめんと力むるもの也夫の讀書眼無き者が自ら讀まば前に謂へる機械的讀法によりて默讀若くは素讀するが故に殆ど其文旨の在る所を十分には理解し得ざるべきも上手が文法的に朗讀して聞かすれば自ら書を開いて見るよりも一層の感銘を起すべし聞く其かみに『太平記讀』といへるものありて『太平記』を朗讀して人耳を娛しませしことありきと案するに件の『太平記讀』といふもの、讀方は予が所謂論理的讀法に似たらんよりは寧ろ文法的讀法に似たりしものならん而も人々樂みて聞けりどあるを思へば讀法の巧拙によりて感銘に多少あること知らるべし

文法的讀法と機械的讀法との第一に異なる所は彼れは讀む聲に調子無く變化無く此れには讀む聲に抑揚あり緩急あり句讀あり多少句拍子の變化あり所詮文法的讀法にては文章の意味をいと明瞭にいと較著に會得せしめんことを旨とするが故に讀むに先だちて先づ深く文の品質に留意し且其體格を分別し細かに句讀に心を用ひをさ／＼發音の誤無からしめ兼て音訓の別を正し時に文義を斟酌して多少の句拍子を附け聲の緩急を考へあくまでも文章の本意を明晰からしめんと力む關根正直氏の所謂句切り段切りテニハの懸り結び等を

注意して讀むべき事とあるは是也。篁村氏が引かれたる某の説に「物語りの真味を知らんとならば先づ只本文をよく讀めかし讀方よく本文を讀め、詞と地の讀をよく分ち口切よく讀めば文義はひとり通じ讀みもて行くうちに無量の味ひは出るあり云々」とあるも爰也。世間時としては馬琴の七五文、俊基の吾妻下り、若くは近世の志士が作れる長歌やうのものを句拍子附けて抑揚頓挫して誦するものもあれどかゝるは唱歌的句拍字といふものにて拍子はあれど文法にも將た論理にも適ざれば是は一種の機械的讀誦法なり即ち五七、七五等の句拍子につられて我しらす調子づきて誦するのみ予が所謂文法的讀法の句讀並に句拍子は之と異なれり我に於ては聲を張るも文章の意味に因り聲を弛むるも文章の意味に因るあり例へば揚音は疑、不信、歎願等を表し抑音は確定、固信、命令等を表すること言葉通りに書きたる文章例へば三馬一九等の作にては敢て歐文の場合に異あると無し即ち聲の抑揚と弛張とは毎に文義に隨ふものと知るべし必竟するに默讀と朗讀とを問はず苟も文章をよく讀了せんとせば掛くとも文法的讀法に因らざる可からず或は然らずといふ人ありとせん乎予は其人を評して殆ど讀法の本旨を知らぬ者ありと言はんとなす就中朗讀の場合にすら文法

的讀法だに行はぬものあらば予は其人の何の爲に朗讀するかを怪まざるを得ず何とあれば已に朗讀すといはゞ人に解せらるゝが目的なるべきに文法的に讀まぬは文章の意義を明かにせぬにひとしけれバ也

文章の和漢洋を論せず記事叙事の文は大概此法によりて讀むべきあり其中和漢の文章は言文一致に遠きこと遙に歐米の文に越えたれば美文論文の類といへど多くは此法によりて讀むべきにや若し例を擧げていはゞ「文章軌範」の文章、『日本外史』の文章、『源氏物語』『平家物語』『太平記』等の文章は總て此法にて讀むべき也。夙に關根正直氏が唱へられたりし朗讀法といふは正しく此法と思はれたり但し氏の本旨も予が趣意も専ら國文、時文の朗讀法に關すれば漢文歐文に係る事は暫らく題外と諒すべし

因にいふ往ぬる日東京専門學校文學科の諸生關根饗庭の兩氏を聘して茶話會上に朗讀研究會を催せりき其折予もまた其席に陪すべしと約し且篁村氏と契りて同氏の所謂讀かた予の所謂論理的讀法を試みんが爲に同氏が作れる院本を讀まんと約しき然るに此事其當日に先だちて世間に漏れ太早計の徒ありて我徒を難し文學亡國云々とさみしき其意の在る所を案するに専門

學校の諸生をもて俳優の假聲を學ばんとするものと非り兼て吾々を責めしもの、如し其言の謬妄ある由は次々に辯すべし特に關根氏を誣いて同班としたるは予が所謂論理的讀法の俳優の假聲あるかあらぬはさし措き更に不當かり關根氏は文法的讀法を唱ふるに止まれり院本を讀まんと主唱せる者は予と饗庭氏とあり

以上いへる如く文法的讀法は文章の意味を明晰較著からしめんやうに文章を讀む法也文義は文法的讀法を得て火を覩る如く明なるべし併し亦がら凡そ文書の目的は文義を明にしたるをもて終れりとすべからざると猶批評の目的の文章の美醜妍媸を分析し金聖歎の結論を得て終れりとすべからざるが如し更に一步を進めて作者の本意をひしる作者其人の爲人を看破し人間と其作者との關係を明かにせざるべからず此に於てや評批的讀法(說明的讀法、解釋的讀法)即ち論理的讀法起る

論理的讀法 (Logical Reading)

予が謂ふ論理的讀法は歐米に謂ふ「エロキエーション」の脱化なり必ずしも朗讀の際に此法を用ふ可しとは言はず默讀の際には必ず用ひざる可らずといふ可

り悉しくいへば我論理的讀法は彼の文法的讀法の如く朗讀法の本領にあらねど百般の讀法の本領ありへブン嘗て「エロキエーション」を釋して曰く「エロキエーション」は自作若しくは他人の作を他を感動せしめんやうに(effectively)言ひあらはし若しくは演説する法なりと又ホエートリは論理的讀法のことを感銘的讀法と名づけ文意を明瞭に(plainly)有力に(forcibly)面白く(agreeably)朗讀するものありと辯じ其正讀法(文法的讀法)に優る所以は文の情と文の跡とに應じて讀音に若干の應變あるに因る云々と論じたり予の謂ふ論理的批評的讀法は上の定義とは要點に小異あり予は或る「エロキエーション」の謂ふ美讀法(artistic reading)を興さんとするなり美讀法とは管に文義を明瞭にし(文法的讀法)有力にし面白くするに止(ホエートリ)まらで其文自作あらば自家の感情を朗讀の間に活動せしめ若し又他人の文あらば其原作者の本意を朗讀の間に活動せしめ若し又院本中ある人物の臺辭あらば其人物の性情を朗讀の間に躍如たらしめんと欲するものあり更に具に之をいへば凡そ一文章を讀まんとするに當りては先づ其發音を分明にして彼の北奥の人の如くスドシドを誤ることなからしめ又東京の市人の如くヒドシドを誤ることあからしめ又音訓の別を正うする

などはいふも更也勿論文の品質、格にも注意して例へば朝廷宗廟聖賢を叙記したる文を讀む時は肅如として讀み山河軍旅を叙記したるには勇壯に讀み山林仙隱を叙記したるには清く宴樂歡娛通達を叙記したるには和かに、神怪豪俠幽險を叙記したるにはものすどげに、攬古搜玄雅勝を叙記したるにはいと寂びしく讀むべき、若くは文の情悲壯されば讀む聲も悲壯に、文の情優美ならば讀む聲も優美に、文の情急されば讀む聲も急に、文の情緩なれば讀む聲も緩に、情斷々たれば聲もまた斷々、情嗚咽すれば聲もまた嗚咽し、情怒號すれば聲もまた怒號すらんやうに及ぶべき限は文と情と相應相伴して緩急の句讀(Readings)に注意し聲の抑揚高低弛張(Propressions)に注意し哀傷奮激等の情を其聲の色にあらはさんとする心得あるべし、櫻庭篁村が「物語ものを讀まんには靜かに優しく聲づくろひして我も冠裝束したる心あるべし亦戰記ものを讀まんには聲も強く張り勇ましく其身も六具にかためたる心ならねば興味無し」といはれたるは此理をみやびやかに言はれたるに外ならずされば或は此法を名づけて活讀法といはんも不可なからん何とされば彼の機械的讀法の死讀法たるに對して其然るべき所以明されば也

論理的讀法の機械的部門に關しては歐米の學者中子細煩瑣なる法則を設けて子弟に教授せんと試みたるもの多くありシエリマン、アブソルプ、ヘブソ、其他枚舉に違わらず併し我が予は強に論理的讀法をもて朗讀の科學的方法とは信せざるが故に彼のホエートリと共に此等細則の益あくて徒に煩瑣あるを排するものあり又批評的論理的讀法の細則は蓋し以心傳心にして自得自證せざる可らざるものと信するが故に敢て實例を擧げて細則を説かず偏に其法の精神部門に關する最も大切なる(即ち默讀の際とても行はざる可らざる)概則をいはゞ凡そ論理的讀法にては彼の文法的讀法に於ての如くに強ち文法的句讀に拘泥せ専ら其文章の深意を穿鑿し批評否むし其文の作者若しくは(院本からば)其人物の性情を看破し解釋自家みづからが其作者若しくは其人物に成りたる心持にて其文中に見ねたる性情をもて直に自家の性情の如くにし誠實熱心に肺肝を傾けて慷慨せるが如く悲憤せるが如く哀傷せるが如く憤怒せるが如くに讀まんとするあり言葉を改めていへば彼の機械的讀法にての如く單に目のみをもて讀まず又彼の文法的讀法にての如く専ら智力のみをもて讀ま

で智と情と目と心と相助け相裨けて讀まんとするあり更に總括して狀せんに

は怒るべき文句には怒りて讀み笑ふべき文句には笑うて讀み急ぐべき時には急いで讀み沈むべき時には沈みて讀み總て云々あらば云々あるべしといふ論理に従ひて讀むが故に名づけて論理的讀法といふなり或は之を目して性情的讀法といふも妨かからん人物の性情に相應じて讀めばあり
即ち予が謂ふ論理的讀法は譬へば支那の文人の如きものなり俗稱は美讀法、姓は論理的讀法、名は感銘的讀法、字は批評的讀法、號は説明的讀法、別號は解釋的讀法、又の名は活讀法、綽號は性情的讀法若し之に尊稱を與へば人間研究的讀法などいはいはまし

論理的讀法の要件

論理的讀法を默讀法として行ふ時は暫く措く朗讀法として行はんとせば必ず先づ下の約束に従はざる可からず

(第一)言文一致の文章か然らざれば言文一致に近き文章にあらざれば殆ど此讀法は行ひがたく又假に行ひ得べしとするも假裝せる雅文には爛熳たる天真あらはれざること多く随つて人性研究の本旨に遠かるべければ論理的讀法は専ら言文一致に近き文章に於てすべし就中傑作の脚本をよしとす(此理は尙末に

詳論せり

(第二)言文一致の論文にもあれ院本の臺辭にもあれ之を讀まんとせば先づ其文の結構組織句切り段切りテニハの懸り結び等に注意し詞と詞との關係を明にすべし(文法を詳悉す)

(第三)文の品質風格を辨別し褒美、貶難、冷笑、諷刺、嘲弄、戲謔等の語氣の文章上に於ける特質、疑問、詠題等の語氣の相異なる所以、例へば同じく只一字のやの字なれど驚愕を表するやの字と怪訝を表するやの字と呼掛る時のやの字との間には語氣に相違ある事等を會得すべし(修辭の原理を詳悉す)

(第四)文法上に謂ふ語句の賓主と論理上に謂ふ語句の主客とは相異なる事、虚字助字等の讀みかた并に文法上よりいへば直に續けて讀むべき文句も論理上よりいへば所謂思入れの必要ありて句を切らざれば叶はぬなど臨機應變に注意すべき廉々を會得すべし(論理を詳悉す)

之を要するに論理的讀法を行はんとせば先づ悉く文章の客觀(即ち文法及び修辭法)を觀察して之を分析し解剖して其主觀(論理)に及ばざる可からず語を換へていへば論理的讀者は必ず先づ文章軌範的批評家となり金聖歎的批評家とな

り兼てコルリツツ的、ハズリツト的、セムソン夫人的、シユレケルの、ヴェルデル的、ハ
ドソンの、ドゥデンの批評家とならざる可からず此法を緯號あだなして批評的讀法と
いひ解釋的讀法といふは此故なり

論理的讀法の利益

以上の約束にても知らるべきが如く論理的讀法は賦讀あきと朗讀あきとを問はず必ず
先づ讀まんとする者に文法修辭論理を會得せしむるが故に多少作文の伎倆を
發達せしめ嗜好を高雅ならしめ觀察の力適應の力表白の力等を鍛鍊せしめお
しなべて智情意の三心力を鋭敏にする効あるべし是第一の利あり

又音樂に次いで聲音の美醜調子の當否等を研究する者は讀法なり故に節奏文、
韻語を創作せんとする者にとりては多少の裨益あるべし元より節奏調子等は
詩の外形たるに過ぎずと雖も詩と節奏文と同視せらるる計に彼此密接の關係
ある間は音樂の耳と音樂の嗜好とは輕々しく棄つべきにわらず

第三の利益は雄辯を鍊磨すべき助たすけとなることあり古來雄辯の學まなぶ可からざる
を論じて雄辯の秘訣は只一の誠意と熱心とにあり云々と論じ或は辯士は天成
なりと論じたるもあれどそは雄辯法の半まば技術たるを忘れたる辭論也彼の雄

辯の泰斗すら雄辯の秘訣三あり一に曰く活動アクトイブ身振手眞似二に曰く活動三に曰
く活動といひてみづからも屢々其法を鍛鍊せし事は世人の熟知する所あり其
他古今の雄辯大家も學びて後に上達せしが多しげにや至誠と熱心とが雄辯の
精髓にして靈火の宿る所あるべけれどさりて至誠を專一にせよといふ事は
其演説の當坐に臨みて人工アトを用ふるさとの意味にて平生學ぶ勿れといふ義に
はあらず猶平生文法修辭等を研究し置きてイザといふ時には神來インスピレーションに任せて詩
を作り文をもよよといはんがごとしすれば平生の讀法に人を動かすべき
伎倆あらんものは自然に雄辯の秘訣を知りて一朝大時機オカシキの來りたらん時に彼
のシエリマンがヘスチングスを彈せしが如く雄辯全院を搖かすこと無しとせ
ずシエリマンは實に讀法の達人なりしなり

併しあがら以上いへるが如きは予が得んと樂たのふ讀法の利益にはあらず予はむ
しろ論理的讀法をもて人性研究法ヒトノセウケンゲツポフの一端とし延いて人間研究法ニョウケンゲツポフの第一階とせ
んことを妄想する者あり若夫れ予が定めたる性情セイジョウ的讀法の概則によれば君子
の言葉を讀まんとすれば己れ先づ君子の心を知らざる可からず英雄の言葉を
讀まんとすれば己れ先づ英雄の心を知らざる可からずシヤイロツツの靈辭を

讀む時は剛愎慳忍執拗ある猶太人の心とありポーシヤの臺辭を讀む時は機敏
 聰慧にて情濃かある上臚の心とありマツシベツスを讀む時は功名の邪念燃ゆ
 るが如く黯憺たる想像蒸すが如く而も良心の刺撃を忘るゝ能はざる勇怯相半
 せる賊臣の心となりマツシベツス夫人を讀む時は朱唇毒を漲らせて傍人無き
 が如く而も女性を脱せざる情熱の貴婦人とあり或はハムレットと共に轉倒し
 煩悶し推理し或はオヘリヤと共に竊窈として逍遙し恍惚として歌ひ或はクイ
 モンと共に人間を憎み人間を賤み怒り怨み狂ひ罵り或はフォールスタッフと
 共に高きが如く卑きが如く勇あるが如く憶病なるが如く智あるが如く愚なる
 が如く道戯たるが如く真地目あるが如く憎むべきが如く憐れむべきが如き人
 物とあり或はイモーゲンと共に嫺雅優美貞良溫柔に或はミランダと共に清淨
 無垢無邪無念に若くはイアゴアの肺肝に分け入りて奸邪の骨底を探り或はリ
 ナヤード三世の臟腑を潛りて魔王の巢窟を焼くべき資料を求め或はヘンリー
 五世と共に妄想界を離れて現世の功德を専念し若しくは老道士プロスベロと
 共に安心立命の境を尋ねて浮世の善惡を知了するを得んには是豈人間の性
 情を探り天命の一端を窺ふ者に近からずや或は又タムバレインの臺辭を活讀

しては權勢餓鬼の煩惱の底止する所無きを感じフハウスタスの獨語を精讀し
 ては智識餓鬼の執着の果しなきを意識しハルパゴンと共に猜疑しては眼中人
 間無く人倫無く偏に黄金の奴とありジョエールマンと共に虛榮に心を奪はれて
 は四十にしてアルハベットを學び細君と擊劍を鍛錬し唱歌し舞踏し狂し亂し
 或はウヰルヘルム、テルと共に義侠の情熱火の如く一身輕きこと鴻毛の如く或
 はフハウストと共に無際邊の幽界をたどりて漠々たる黒雲の中にオルマズド
 とアーリマンとの怖るべき争闘を瞥見せば是豈人間の性情を探り天命の一端
 を窺ひ知るものに近からずや予は實に斯くの如き目的をたてゝ論理的讀法を
 唱ふるものなり實に斯の如き目的をもてり故に勢ひ叙記の文に重きを置かず
 して脚本に重きを置かざるを得ざるなり

嘲 雜

論じて此に至らば八方の反對論者ときこのゑを擧げて或は叱し或は綴み且嘲
 り且難じて曰はん斯の如くバ汝の所謂論理的讀法とは殆ど俳優の舞臺にする
 事を講堂にするものなり汝は俳優の境界に墮落して無用の遊民と化し世間俗
 の帶間とあり時好の翫具とあることを甘ずるかど

かくの如き難者は些も演藝と學術との區別を辨へざるものなりそも、俳優とは和漢洋を問はず身に假裝を被り面部支脈に多少の粉粧を施し軀を揺かし手足を働かし公衆の褒美を買はん爲に老少賢愚男女正邪の性情を研究し巧に其趣を摸倣し舞臺にいで、云爲し動作し演藝する者即ち終に演藝者たることを脱せざるものにて其目的の學問の爲にあらで人を娛しまするにある限りは其云爲する所概して摸倣に過ぎぬものあり併しかがら予は夫のビューリヤンの美術排斥論者の如くに敢て俳優を貶低せんとするものにはあらずさりとして世の學生をすゝめて梨園に上らしめんとするものにあらず故に少しく此條下に於て俳優と朗讀者との相異を辯せん

我國の梨園子弟は論外として暫らくさし置き歐米の俳優に就きて辯せん彼れ俳優といふ者と我謂ふ讀法の讀者とは其朗誦の方法に於きても又其朗誦の目的に於きても殆ど雲泥の相違あるなり只其稍や相似たる所は其外形の幾部分のみ嗚呼若し外形の相似たるを見て其質を同じかりといはゞ五月雨過ぎて這いづる青だいいしやうも聽て河の物と同じにせられて大黒屋の流し元に生捕どならん

解 嘲

第一に二者の手段一ならず俳優は常に他の聽覺に訴へて足れりどせで別に視覺にも訴へんとす故に假裝し粉粧し身振し手眞似し又其臺辭を誦す朗讀者は然らず専ら聽く者をして目のあたり其人の聲を聽くが如く感せしめんと欲する故に一に其聽覺に訴ふされば假裝粉粧せざるべきはいふも更かり身振せず手眞似せずまた敢て誦誦せんとせざるあり是我謂ふ美讀法の歐米の「エロキエーション」と相異なる要點あり彼れにては「エロキエーション」を教ふるにをさず誦誦 (Recitation) の法を取れるが故に勢ひ身振し手眞似せざれば俗にいふ手持無沙汰あるべきなり蓋し泰西にては身振手眞似をもて雄辯の必要件とし彼の活動を原則とすといふ教を奉じ平素朗讀法をもて雄辯練磨の一方便となさんと望めり故におのづから身振を要すべき誦誦の方法を用ひたり然るに予の考案は之と異なり予もまた論理的讀法をもて多少雄辯研究の資とせんと望めること前の「利益」の條にいへる如くなれど其本來の目的は頗る前人の謂ふ所に違へば敢て身振を勸めず又手眞似をも妙とせずさりとして自然に成れる Genuine のいどよく其情に調和せるものゝ如きはまた強ちに禁めずと雖も苟も技工

的、人爲的に拵へたらん身振は總て悉く禁むべしと思惟せり扱已に技工的身振を禁むべしと定めバ勢ひ誦誦の法を取ることを勸むる能はずは其手持無沙汰やらんことを恐れ又誦誦の爲に貴き日暮を徒消せんことを惜めバあり
 さすれば俳優は誦誦し身振し手眞似し讀者は端然として立ちて朗讀す其方法全く異かれり
 次に二者の目的に於て隔絶あり俳優の目的は(ガ・リ・ツ・ク、ブ・ス、ケ・ム・ブル、キ・ン、アルピングの徒もかは)貴紳の歡を買ひ公衆の褒美を求め自家の藝名を高うせんとするにあり即ち我を主とするが故に人間を客とするあり朗讀者の本願は然らず第一に朗讀者は敢て朗讀其物を以て目的とするにあらず只おのれを知る明無き限は専ら默讀に安んずること能はざるが故に我がいかにバかり人性の骨髓を探り得たるか人情を解し得たるか將た又之を活現し得たるかを聴く者に於ける感銘の多少に徴して試験鑑定し兼ては明かに善惡邪正妍媸醜の別を他に傳へて及ぶべくは彼等をして感悟する所あらしめんとす即ち大なる誓願を抱きて方便の爲に朗讀の手段を取るなり即ち一は以て人性分拆人間研究の方便とし一は以て誨導獎誡の具に供せんとするなり若し夫れ同胞人間に

裨益せんとせば先づ人間の性情を知悉せざる可からず朗讀者が性情的批評的讀法によりて人間の性情を分析説明せんとするは偏に先づ其資を得んとてなり即ち人間全軀を主とするが故に朗讀の法を研究す朗讀を巧にして我名を得んとにはあらず公衆に悦ばれんとにもあらずあくまでも我は客にして人間が主かれバありされば俳優は錢を納めて公に演藝し此れは専ら學友の間に於てし若くは有志の私會に於てす苟も智あらん者は多く辨せずとも演藝と學問との間に主客倒置の相違あることを知らん
 難者又曰はん假に一步を譲りて汝の妄想は或一二の達人には成就せらる可しと假定せんが朗讀の形を得て其本願を忘れ一句讀一抑揚今の所謂歌舞伎的假聲を行ふもの汝が未流に比々たらば如何是多望ある年少學生をかどわかして梨園の泥濘に陥しるゝものにあらずやと
 未流の穢きをもて泉源の清きを染つべしといふか、如何ある大聖の教法か其未流までも清かりし如何なる貴重なる原理か其未流までも貴重かりし嗚呼去りて黄河の本源を探れ
 難者更に冷笑して曰はん善し〜汝の大誓願甚だ善し只一つの懸念あり汝何

處に汝の臺本を得るか鶴屋南北の作河竹默阿彌の作汝が論理的批評的性情研究的人間研究的滅天倒地的朗讀法とやらんいふもの、臺本たるに適するか學海居士の作か篁村氏の作かいづれか汝の意に適へる豫め聞置かんぞ
嗚呼是我を破らんとして却りて我を誘うて我第二の本願を語らしむるものか
り予は我古來の文壇にシェイクスピア無くギョオテ無くローベ無くカルデロ
無くマアロウ無くシルレル無くまたユーゴ、モリエール、ブラウニング、イブセ
ン無きことを信す南北奇巧かりと雖も默阿彌豐富かりと雖も學海居士高雅か
りと雖も篁村氏輕妙かりと雖も未だ以てシェイクスピア的と評すべからず或は
又近松の靈妙時に『ハムレット』以前のシェイクスピアに髣髴たりと雖も彼れの
文脈には節奏ありて而も叙事文の混じたるが故に大抵は臺本とすべからざる
也予は明に恰好の臺本無きことを知れるものあり
批評家石橋忍月氏嘗て屢々戯曲の事を論じて舞臺戯曲の外に文壇戯曲を盛な
らしむべしと唱へたりきげにや我梨園の門閥制度と我劇場とに固着せる習慣
の牽制と俳優の人柄と看る者の嗜好とは今急に改めんに由無かるべし手力雄
の勇力ありとも將たウォルテールの破壊方ありとも悠々二百餘年來の劇壇の

臺石を動かさんと未だ遂に望む可からず假令幾分を改め得べしとするも予は
文壇ドラマの擴張獎勵を圖ることのシェイクスピア、ギョオテを生まん爲には
遙に捷徑あるべきを信する由ありて忍月氏を賛成し梨園の便宜に泥まざる文
學的ドラマの成らんとを望めり此に於てや性情の讀法の基礎を作りて豫め此
等文壇的ドラマの來降に準備せん爲に向迎の席を設けざるを得ず
何が故ぞや
試に思へドラマの形したるドラマは悉く人物の臺辭のみより成れるものにて
其間多少のHumourを興ふるのみにて彼の物語に於ける如く説明解釋批評等の文
句を加へざるものあれば讀む者に解釋的眼光無くば『ハムレット』も一篇の復讐
の茶番とあり『テムベスト』も『ファウスト』も只一篇の怪談たるに過ぎざらん現に
予が知れる某氏嘗て予に語りて曰くおのれ英國に遊びてはじめてシェイクス
ピアの脚本舞臺に演せられたるを見てはじめてシェイクスピアの非凡なるを
知りぬと予未だ同氏が何の邊に感じたるかを詳にせずと雖も思ふに俳優の技
倆妙にしてよく彼の作者の本旨を表し人物の性情を活現し得しに因るからん
かドラマの素讀して興淺く有形にして興幾層あることは今改めていふに及ば

すドレマは元と俳優に伴ふべきものなり然るに今や文園戯曲を興さんとする時に當りて汝ドレマを作るとも俳優は之を演せざるべし(具にいへば汝の作を有形にし解釋し説明する者絶えて無し)といはゞ我觀念を世間に傳へて人間に裨益せんと願はざる作者の外は誰か消望せざらんや真に世に益せんとするものは素より世間の褒美を求めんと願はざるや勿論あれど世に益せんと企望せる以上は廣く世間の同胞に向ひて本旨を傳へんと樂へるや疑ひ無し而して俳優の之に伴はざる以上は僅に具眼の識者二三に知られて其作いかばかり高上かりとも他の數百人の目には對牛彈琴の感を與へて止まん惜むべき至極かり我所謂朗讀法の本願は人性研究にありと雖も其第二の誓願は此欠乏を補うて未來のシェークスピア、ギョオテの説明者となり批評家となり兼て天命解釋の一助手とあらんとするにあり乞ふ俳優に代るかりと太速斷する勿れ俳優よりも遙に高雅に俳優よりも遙に精緻に俳優よりも遙に深遠なる着眼を有して原作者の本旨を穿鑿し其隱微を發揮し其秘密藏を發し他の死讀的同胞の聳したる耳を掃除し原作者と共に歎じ原作者と共に歎び我みづからも反省し又他人をして反省せしめんとするあり今假に『吉野拾遺』を讀み『文覺勸進帳』を讀み若く

は『太田道灌』を讀まんとするは學海先生篁村大人予が不敬の言を恕したまへ只是未來の大ドレマナストに向つて廷席を準備するに過ぎざるのみ (完)

『女殺油地獄』を讀みて感所を記す

『女殺油地獄』といふ淨瑠璃は享保六年の作と聞けたれば近松門左衛門が六十才の時の作あるべし近松の世話物大かたは男女相着の痴情を臺として綴りたるが例あるに此れは一個の我儘子の専恣放逸悻反剛腹あるをもて骨子とせり用心例と異なるに似たり、まかしながら然思ふは讀む者の力負といふものにて作者は別段の用心もあくて譬へば今の世の新聞記者が雜報をもつすらんやうに傳へ開ける儘を種として巧に潤飾したるに過ぎるべしまかばあれど物は見やう次第にて如何ようにも見らるゝものあり木の實の標ちたるを見て木の實標ちたりと見てさてやまば重力をささる便もあかるべく春去り秋來るは自然の法ありと搔撫に見てのみやまば榮枯盛衰の理を證すべき機遠かるべし仁の一字を甲人は釋して個人に對する小愛とし乙人は釋して宇宙を掩ふ大愛とすこれも釋する人の心々あり眼を開きて觀る時は三瞬の間にも三世因果はあ

女殺油地獄を讀み所て感す記

るべき理あり物は其形の大小に拘らず大なる眼をひらきて觀察するが學問の手段あるべしと斯う思ひつゝ手近ある近松が作を讀むに隨うて所感を録せしは去年の秋の頃にやありけん今取いで見るに一時の感に任せてそゝろに記せしものされば論序整はずして愚にもつかぬこといと多く人に見すべきものからねど往ぬるころ『日本評論』社の戸川殘花ぬしに約しつる兼言に背かむもつらければ元の儘の艸稿に此はしがきを添へて一時の責ふさぎに耻をさらすことゝはありぬ吳々も此評は近松が作を評したるにはあらず近松が作を讀みたる折の予が所感を記したるに外あらねば讀者其心して見たまへ

〔上の卷〕野崎開帳詣の條に大坂本天満町の油屋てしまや七左衛門の女房お吉が三人の女をつれて出茶屋に憩へりといふ事を叙したる序に始めて主人公を點出し是も同町筋向ひ河内屋與兵衛まだ廿三親がゝりといふ句ありて〔同じ卷〕れ吉が與兵衛への意見の言葉の中に「本天満町河内屋徳兵衛といふ油屋の二番息子」といふ文句あり扱又〔中の卷〕に徳兵衛が義理ある長子河内屋太兵衛に向かひていへる述懐に「與兵衛めに商ひの手をひろげさせ手代も置き庫の一軒もたてるやうにとあがいても」とありて〔同じ卷〕與兵衛を折檻の條にも面倒見て大さ

女殺油地獄を讀み所て感す記

な家の主にもと丁稚もつかはず肩に棒稼ぐ程費ひはつくおのれ今の若盛り一働き稼ぎ五間口七間口の門柱の主にと念願を立てこそ商人なれたつた一間まなかの門柱に念かけとあるを見れば河内屋といふは小体に商ひせる油店にして其義父徳兵衛の着實節儉の人物あること知るべし義理ある中の親子は萬事に窮屈なるが常理なるに主人公與兵衛がかゝる着實の節儉人の義子にありながら其行ひの放埒至極なると常理に背けるに似たり年齢わづかに廿三才とあれば遺傳の性癖は暫く措き習ひより得たる性癖は重に家内の影響なるべし此故に評者はまづ此義父と主人公との關係を詳かにせんとす

與兵衛と其義父徳兵衛との關係は中の卷なる徳兵衛の述懐に「そなた衆兄弟は身共が親方の子親旦那往生の時はそなたが七ツ野良めは四ツ坊さま兄さま徳兵衛とせうせい斯うせいといふたを彼奴がきつと覺はてゐる妻もはじめは内方さまの内儀様のと云た人叔父森右衛門殿が料見で其方が家を見棄ては後家も子供も路頭にたつ兎角森右衛門次第に成てくれと段々の頼ゆる親方の内儀と此如く夫婦にありさど語れるに盡きたり爰に徳兵衛の爲人を考ふるに其心さ

ま忠直にて謹慎深く着實にて思量ありされば用ひられても驕る色露ばかりも

女殺油地獄を讀み所て感す記

無く小心翼々ど己たのれを省み誤りて義に背き舊主の恩、知己の委託に戻らんかど揣々ど恐れ片時も安んぜざるもの、如し、祀るや在すが如しとは徳兵衛の舊主人に對する感謝の誠情まことあり彼れ舊主人の妻を妻とし舊主人の子を子としたれど其心の底を叩けば彼れは依然たる舊手代舊忠僕ちゆうあり子に對する時の心は舊主人に對する時の心に同じ慈愛あまのは表あらわにて忠順ちゆうじゆんは裏うらさりされば太兵衛に述懐するや其いふ所義父の聲にあらで忠僕の聲あり彼れ云へらく「尤繼父さればどて親は親子を折檻するに遠慮えんりょは無ない筈はずかれど親方の子こあるゆゑ答こたを當あたべき所無し」と是豊子を見ること舊主人の像を見るが如きもの、言葉にわらずや尋常じんじやうの人情にんじやうあらば世間の手前てまへつらければさぞいふべきに一たびもかゝる愚痴ぐしをいへること無し、與兵衛が暴言を吐けば聞流し足蹴あしげにかくれど抗はぬは皆此同じ心の業わざあり、匆卒に見れば是唯徳兵衛の愚直ぐちくにて意地無く思量無なきに因るやうなれど與兵衛が母を打擲するに及びて厥然まづとおどりかゝり「おうこもぎどり續打つづきうちに七ッ八ッ息もさせず與兵衛をぶちすはたど睨にらむ目に涙を浮べ「ヤイ木で作つくり土をつくねた人形でも魂入れれば性根がある耳みみわらば善よう聞きけ此徳兵衛は親おやがら主筋しゆうきんと思おもひ手向てむかひせず存分に踏ふれた」といへるを思へば前に抗かたはで踏ふられし

女殺油地獄を讀み所て感す記

は意地無く思量無なきが故ゆゑあらで大おほに思量する所ところありし故ゆゑあり主従しゆうじゆうの義ぎを思量しやうりやうして不孝ふけうの義子ぎしを見ること鴻恩こうおんある舊主人の肖像しやうじやうを見るにひとしき故ゆゑあり此故ゆゑに與兵衛が母に逐おはれて外との方かたへ出行しゆつぎを見送りては徳兵衛慨然がいぜんと聲こゑを放はなち「わいつが貌かほ付背格せいかく好成長せうせいぢやうするに隨したがひ死しかれた旦那だんなに生寫せいしやうシアレあの辻つじに立たたる姿すがたを見るに付與兵衛とめを追出おさす旦那だんなを追出おす心がして勿体なげ無ない悲かなしいと倒たふと臥ふし人目を耻はするに違ちが無しげに彼れは外と聞きを厭いとふに違ちがなからん彼れは分別ぶんべつ（思量しやうりやうあり力量りやうりやうあり、若もし外と聞きを厭いとふ心こゝろ奮ふ主しゆうを敬うやへる心に優やさらば實じつ子の面前まへんにて不孝ふけうの子に踏ふにちらるゝ淺あましき耻はをやは忍しのぶべき往い來き繁さかき門かどの戸かどに臥ふし倒たふれて放埒はなげ無な慚はの子の後影ごうかげを見送り婦女にょにょのやうにやは泣なくべき、徳兵衛の心に一點いっの私し無なきことは前後ぜんごに照てしていちじるし、悲かなむも怒おこるも舊主人きゆうしゆうじんを思おもへばあり、彼れの奮然ふんぜんと怒おこれるは舊主人きゆうしゆうじんの半身はんしんと信しんじたる我義理われぎりある妻つまを打擲うちせる不孝ふけうの賊兒さくじを見つる時ときあり腹はらを借かつた實じつの母ははに今のさま、脇わきから見る目めも勿体なげなうて身みが顛たふふとは徳兵衛が心の底そこよりわぶれたる言葉ことばなり「今打うたも徳兵衛はぶたぬ先徳兵衛さきとくへいどの冥土みやうどより手てを出でして打うちさると知らぬか」とは血涙ちゆうなみ雨あめとありて瀉なぐ時の聲こゑあり、彼れの其子そのこに對するや義父ぎふの資格しきかくをもちせて、舊忠僕きゆうちゆうの資格しきかくを

かてす女房お澤が長子太兵衛に語りさといふ縁言の中に「子共に遠慮あるからは現在腹に宿した母にも氣兼ねがあるかと思はぬ心置かる」といへる語あり徳兵衛の其妻に對するや人情三分義理七分氣兼ね遠慮纏綿たり兎もすれば「舊内儀」に對する心持も見ねたりけん與兵衛勘當の後徳兵衛がひそかに手しまやを訪ひお吉にあひて述懐せる事は夫と婦との間に義理の鐵壁ある證據あり徳兵衛曰く「實の母が追出すを繼父の我等輕薄らしう止められず」と爰にいへる輕薄は俗にいへる輕薄と同じからず俗には世間へ對していふ爰は女房一人へ對していふ徳兵衛が心中の世間は舊主人の半身たりし女房お澤一人なること著明あり聞けば與兵衛めは順慶町兄が方にゐるとやら若し此あたりへうろたへて見にましたら七右衛門殿御夫婦いひ合せ父親は合點随分母に詫言いたし土性骨入かへ二たび内へ戻るやうに御意見偏へに頼み入とは夫婦別ある證にて二人の子供に心を盡すは皆古旦那への奉公今與兵衛めを追出し一生荒い詞もさかぬ親方に艸葉の陰より悲を受る不果報は此徳兵衛ひとりといへるに舊主を敬慕せる心の誠を見るべしされど彼れは實に偏りて虚を忘れ一個人一身の義理に拘らひて社交世間の義理を忘れ忠僕としての本分に身を委ねて人の親として

の本分を忘れ主恩に報いざる可らざるを知りたれど報いすべき方法を誤りたり蓋し彼れ己に人の親たり其子不義不孝あらば子を規矯折檻せんに何の悖義かあらんまかるに彼れは曰く「親かたの子なれば折檻しがたし」と是主従の間の義理をもて父子の間を整へんとするものなり金尺をもて織物をさし藥量をもて穀物を量るたぐひなりされば長子太兵衛此謬を辨て曰く「腹に宿つた母ぢや人とつれ添ふお前眞實の父と存する應て婿を取る程背丈のびたお梶は打叩きなされても不道者には拳一つあてずはたえさせ萬事に遠慮が皆身の仇と太兵衛の言の如し徳兵衛が寛大は偶々與兵衛が性質を害ふに足りしのみ人倫社交の大道を餘所にいたればなり訓ふべき親に此謬あり與兵衛が放蕩無賴にて譬へば「まりのほぞけた錢さし」の如く籠で水くむ如く跡からぬけ一匁儲ければ百匁つかふ根生とあり意見一言いひ出せば千言でいひかへすに至れる勢ひの自然ならん多年辛酸の經歷を積み世の義理人の道をも辨へてありぬべき徳兵衛すら元が主筋下人筋の親と子釘をたへせぬ筈身の境界がくちをしといひて従僕の本分と親の本分とを無差別に見たりさすれば生年わづかに廿三にて條理を辨へぬ頑兒が徳兵衛とせいかうせいといひならはせし昔を忘れず親となれ

る。徳兵衛と僅たりし時の徳兵衛とを無差別に見做して子の本分と主人の本分とを混同したる當然べし、要するに徳兵衛は正直の實に偏りて權を知らず、平等の理義に拘らひて差別の理義に昏く、主恩の忘るべからざるを感銘したれど、親となりては別に盡すべき大任あるを忘れたり、彼れの舊主に對する尊敬はほどはと偶像崇拜の程度に達せり、譬へば專制時代の忠臣が其君に仕ふる心なり、君樂討の如く暴虐にて殘を行ふとも、そを制めん方は直諫か諷諫か、此二の外にいでず若し此二の方効無くば身退るか若くは生命を犠にして止まんのみ箕子比干の忠平手中務の誠は是あり、然るに徳兵衛の場合にては其身別に親といふ資格をもてれば慈愛至極して實母お澤がいへる如く、まだ此上に根性の直る樂に母が生膽を煎じて飲すといふ醫者あらば身を八裂を厭はじとやうに思へば、て子を諫めて親の死なんことは流石に常義の許さぬ所あり、古來時としては子の爲に死ぬ親もあれど、さるは慈愛の至極せる結果にて、理義の許す事にはあらず徳兵衛差別の理に昏けれど、斯ばかりは辨へたれば身を犠にせんとは思はざるべし、且身退くべきにもあらず、君臣の場合とは主客の位置顛倒したればあり、此に於きてや詮術を知らず徒に勘當と一喝して無賴兒を逐出して止む勢ひの

必然なるべし、但し忠臣の身退くや、堪くともおのが衷心の操に背かざりしことを思うて安んずるを得べし、徳兵衛は然らず、其與兵衛を逐ふや、尙ひそかに其跡を追うて手じま屋に到る、其衷情安んせざればあり、即ち彼れ若し忠僕の本分を盡さんとせば、堪くとも身退くまでに極諫せざる可らざれど、親といふ資格あれば之を行ふと叶はず、即ち惘然と去就進退に迷へり、されどみづからは此兩岐の由來を知らず、煩悶焦慮の末、纔に婦人の慈、朱裏の仁によりて刹那の安心を求めんとす、是また主従の分と親子の分とを混同したるより、生せり、さもあらばあれ、此根本の過失は大かれど、此れ時勢の果あり、彼れは徳川專制の全盛期に生れたり、忠義の爲に私情を擲ち一身の利害を餘所にして恩に報いんとするは當代の理想あり、從僕といふ資格よりいへば憐れむべきかれど、親といふ本分を忘れたる過は彼の眞理の爲に國家を國家の爲に父母を忘るゝ者の過失に同じ、思量經驗に富める親すら親子の分を誤れり、とせば、其子此親に養育せられて子の本分を誤れること、蓋し當然あり、父の義理に泥みて親の本分を忘れたるは義理を知らばなり、子の私欲に偏りて子の本分を忘れたるは義理をも人情をも知らねばあり、父は世故に老いたり、故に義理を知れり、子は世事に幼稚あり、故に情

女殺油地獄を讀み所て感す記

義を知らず、さすれば與兵衛が放埒無慚なるは父子の分を誨へ導くもの無かりしに因縁する所甚からずとすべし、是與兵衛の爲人を評するに先だちて其父徳兵衛の爲人を評せし所以あり

大聖孔子は孝をもて百行の本としたまへり、親子の分限は人の守らざる可らざる根底の大倫にして、また最も親易かるべき道理なり、夫子の教を立たまふに當り先づ親子をもて始めたまへるは此親易き道理を楷として啓蒙の道を開拓せんとおぼしければあるべし、然るに與兵衛の頑愚蒙昧ある殆ど實の母に對する孝子の分をだに知らず、豈義父に對する義子の本分を知らんや、況んや商人の務をや、況んや人間の本分をや、彼れの世を渡るは蠻人の欲に驅られて去就し、禽獸の餌を求めて往來し、蝸牛の日陰にしたがひて流元を道ひ廻るに似たり、ふみしめも亦く世の中を滑り渡りの油屋の名にし負ひて、賣溜錢は色狂ひ絞り取られて元も利もカスも残らぬ油桶重げに見せ、て親をわざむき身の非を掩ふに足る智慧はあれどそは私欲の奸才といふものにて、野蠻の智、頑童の智あり、野崎詣の途すがら叔父森右衛門の爲に懲されしを却りて方便として父母をわざむき金子を貪らんと試みしも此奸才あり、妹かちをすかして偽物の怪を粧はしめしも

女殺油地獄を讀み所て感す記

同じ源よりいでたり、私情の熾んざるが故に此奸才は沸なり、夫の経験派の學者が智能の發達を情感の作用に歸し兼愛の徳性をもて自愛の至極せるものとせる故なきにあらず、野蠻未開の初めには人皆私に専らにして他を顧る智能無し、現在の利害を知りて今を避まくする智能はあれど思念の夢にだに未來に及ぶこと無し、與兵衛の如きは然り、彼れ天が下に我あることを知りたれど他人あることを知らざるにひとし、其實の母すら習慣によりて母とせるもの、如く母として事ふまつるべき務めありと認めざること、其おうこを揮ひて母を打つを見ても知るべし、茫々たる習慣性と瞬昧たる遺傳性を除きさらば、與兵衛は髣髴たる一個の未開人たらん、眼中義理無く人情無し故に智慧あるに似たれども其智は只目前の小智あり、徳兵衛の「正直を見ぬいて」之をわざむき、蕙如にするも有形の罰の來らざるを察知し、またたいがい蹈つけ、手柄に婿が呼ばれうば呼んで見や見物せうと親の前に足踏のばす、傍若無人の小才智はあれど世に大道の流行ありて早晚形無き嚴罰下り天地廣しといへど終に不孝の子を容るゝ地を餘さず、果は千日千人聞万人聞け、十萬人残る方、かく世の鑑傳へて君が長き世に清からぬ名を残すべし」とは彼れ曾て知量する能はず、譬へば且あるを知りて

夕あるを知らず花咲くを知りて花散るを知らざる類あり、未開の蠻民にひとし、目前有形の物の外に怖るべきものあるを知らず、されば誤りて公儀の貴士人に泥をそゝぎては彼れ恐怖畏縮周章狼狽して爲す由を知らず、ア、お侍さま怪我でござる御免おさりませお慈悲、とほにづらかく公儀の強大なるを知り、目前の嚴罰の怖るべきを知ればなり、但し公儀の重んずべき所以を知れるには、あらず、彼れの公儀を恐れ士人を怖るゝは獸類の獅子を恐るゝが如く、一層強大なる腕力として恐るゝ也、法律を法律として恐るゝのみ、正義の掟として重んずるにはあらず、是もまた未開人の心あり、此故に白刃頭の上に臨まんとすれど、尙分疏すべき言葉を知らず、法律を正義の掟とせ、只管に強大の腕力と思へる故に、詭とも恐るまじと思へばなるべし、腕力の眼中には理も非も無しと思へば、あらん、されば彼れ徒らに逡巡畏縮す猶猛犬に出あひたる小狗のごとし、されば又猛犬は已に去りたれど尙「恍惚」と「酔ひたる如く」夢か現か、をも辨へず、逝去らんといふ分別もせず、南無三叔父の下向に切らるゝ筈、切られたら死なう死んだら如何しよと心は沈み氣は上り、逃てくれうとやら、氣付きかけいで、あがら「ハアかういけば野崎大坂はどちらやら方角が無い、此方は京の力彼の山は間か

但比叡山か何方へいたらば逃れうと眼も迷ひうるたへたる、是無智の本体なり、一たび心上市りては、斬らるれば死すといふ自明の原理だに忘れ去らんとす、人間の道を忘れ親子の本分を忘れたる其善なり、又お吉が意見を馬耳の風と聽流したるも其分にて、賣女に對して破約を怒り、千萬人の既物を我物顔に取りて引す、「馴染の河與が借るからは動かせぬ」と罵りたるも其分あり、されば又「わしの心は誓文かうぢや」と只一言の氣休めにいだきつかれて大に「悦喜」し「忝いと延びた顔」に痴愚の本性をあらはし、幾千人の見る目をも耻ぢず公道にて人と泥じあひします、狂愚の相を現す、皆是彼れが眼中に私情の外物無きに因るなり、掛くとも其情熾んなる時には義理も無く人情も無く親も無く母も無し、其際彼れをして恐れしむべきものは只一の強大なる腕力あるのみ、されば又濁血一たび沸かへりては、彼れ法印を見ること、蟲けらを見るが如く、義父を見ること、奴僕を見るが如く、妹を見ること、出來損ねたる機械を見るが如く、實の母に向ひてすら、謬信者の子の不信者がはじめて神佛の偶像に對するが如く、流石に遺傳と習慣性によりて、たゞちに唾棄するをたゆたへり、と見ゆれど、早晚奮起して粉砕にせんとするものに似たり、其眼中實の母すら無からんとす、げに子を見るこ

ど親にまかず母親お澤番然として「エ、もどかしい徳兵衛どの石に謎かけるやうに口でいふて聞やつか」と涙を呑みて罵りたるこれは夫への義理もあるべく女性の一時の激語にてもあるべきがまた與兵衛を知悉したる言葉あり此賊兒を窘めんとせば其方唯一ツより外に無し故に母親は激語して曰く「出てうせ〜うぢ〜ひろがば町中寄せて追出すと又おつとつてつゝばるわうこは怖い目知らぬ無法者をも動かすに足りぬべし此激語に伴へるおうこそアキメヤ一丈の損扨なれさすがに與兵衛も町中といふ強大腕力にぎよつとして吐胸つきたるけでん貌宛然観るべし

以上只我あるとを知りて義父あるとを知らざりし與兵衛の情態と履歷とあり「上の巻」野崎詣の條に野崎参りの屋形船卯月中ばの初段さ末の関においぐりてまだ肌寒き川風を云々といふ文句ありて「中の巻」太兵衛の言葉に「跡の月御主人の供して森右衛門が野崎参りの折ふし不道者の與兵衛も参り合せ」といふ文句あれバ與兵衛勘當の月は閏四月なること疑ひ無きに似たり現に同じ巻の結句に見れども餘所の繪幟に影も藏れて三匹とあれバ恐らくは四月の三十日かどにやあらん繪幟とは來ん節句の用意に逸早くもなびかせたるものをさせる

なるべし又下の巻七左衛門がお吉の法事を營める時の言葉に「誠に死んだ亡者が物語り四月十一日我等夫婦野崎参りいたせし日云々」といふ文句あり上の巻の出來事は四月の中旬あることとます〜明かり扱下の巻の初に「ふきなれし年も久しの蓬草蒲は家毎に幟の音のさばめくはおの子持の證かや」といふ句ありて「五月五日の一夜さを女の家といふぞかし」さては又此節季越すに越されぬ河内屋與兵衛手筈の合はぬ古裕又は掛も十チに七左衛門大かた寄て中戻りア、思ひの外早ひ仕舞ひ内の拂ひもさらりとしまひ又は與兵衛の言葉にも「七左衛門どのはいづ方へ定めて掛も寄ましよおといふ文句あれば當時の習慣は五月の節句にも諸拂ひをさせしこと、見たり即ちお吉殺しの月日は五月の節句の前の夜あることたしかかり森右衛門が廓にて與兵衛の事を探り五月の節句前か後かといひ只今参りがけ櫻井屋源兵衛へも立寄吟味いたせり五月四日の夜大金三兩錢八百請取たとある云々」といひ又花屋の花車がわたし方へも五月四日の夜に入て大金三兩錢壹貫文といへるなど合せ考へばます〜明かなるべし

又思ふに與兵衛勘當の日は五月の二日なるべくや與兵衛が義父に向ひて

いへる言葉に「けふは二日際といふて明日明後日萬事をさし置きけふの中
 三貫目と、のへて渡さしやれ云々」といふ文句ありさすれば跡の月云々
 とあるは跡々の月といふべきを大概にいひしものにや若し勘當の日を二
 日とすれば四日間と假定して解釋したる下の評論は誤れり
 案するに勘當の月日を假に閏四月三十日とすればお吉殺しまでに日數勘當の
 日を二日とすれば其間わづかに一日のみ四日の間あるべし此間與兵衛はいづ
 こにありけん彼の七左衛門かたにてお吉が三十五日の佛事營みける折に偶然
 鼠の取おとせる半切紙に一ツがき十匁五分五リ野崎の割附は殺しの夜與兵
 衛が取落してゆきしものちらん而して其割附に五月三日といふ日附あるを思
 へば殺しの前の日に例の色友達刷毛の彌五郎皆朱の善兵衛なごにひしこと
 ありと見たり、徳兵衛がお吉に向ひての述懐の言葉に「聞けば（與兵衛め）は順慶
 町兄が方に居るとやら」とありて綿屋小兵衛が借財を與兵衛に促る時の言葉に
 「順慶町へゆけば本天満町親御の所へといはるゝ」とあれば其居所は實兄太兵衛
 の許かりしこと頗るたしかなるが如し、然るに兄の家にありける間の事蹟は作
 者悉くこれを陰にし、噂にもほのかにも見せざれど此黒幕の中に主人公が主觀

の第一段變化はありきと思はる具にいへば彼れの心狀に一大變動ありきと見
 ゆ、茲に少しく其理を辯すべし
 「上中二卷」に見たる與兵衛は我あるを知りて他人あるを忘れたる人間かり
 しに「下の卷」に見たる與兵衛はたしかに我外に義父あることを認めたり、され
 ば二百目の借金を小兵衛に促られやうく「なだめて歸らせし後一錢の心當も
 なきに胸を痛め茶屋の拂ひは一寸のがれぬきさしからぬ此二百目と思案に苦
 める心の底に我以外の一物ある明かあり、何となれば茶屋の拂ひこそ直接に彼
 れが身の苦樂とはかれ、件の二百目の借財は五月五日を限り、義父の印判を盗用
 して、證文の面は一貫目正味は二百目といふ約束にて借入れたるされば五日の
 日がによつと出ると二百目變じて一貫目とあり、債主は直ちに徳兵衛に逼り其
 返済を促がすべきものなり、即ち義父の難義とはなるべきも與兵衛の難義とは
 ならぬ負債あり、義理を知れるものならば斯かる借財をこそ入しはに苦しく思
 ふべけれど、上中の卷に見えし與兵衛は無形の苦痛を知らぬものなり、嗚呼、作者
 といに至りて主人公の性質を打敗し、行爲の一致を失へるか、何となれば若し與
 兵衛が「前の卷」に見たる如き、我の外に親あることを知らざる没義理没人情の

無法者あらば只管まづ茶屋の拂ひをこそ氣にはせめまかるに茶屋の拂ひは一
寸のがれ今濟さずとも忍ぶべしといふは其本心我一身の利害を思へるのみに
あらで親に對する義務を思へること明かなり、與兵衛が義父を認め、義父に對す
る義務を認め、腕力の外に恐るべきものあることを認めたるや明かなり、是、主
人公の特質の前後矛盾せる證ならずや、さすれば作者此に至りて主人公の特質
を打敗し行爲の一致を失へりといふべきか
將た勘當後四日間に於て主人公が心狀に一變動の起りしか
假に後の假定をもて正しとせば如何にしてかゝる主觀の變化の起りしか
與兵衛がお吉に向ひての述懐に跡の月の廿日に親仁の謀判して上銀二百目今
晩限に借ました……手がたの面は上銀壹貫目借た金は二百目云々といへる
を見れば此借入は四月廿日にして勘當以前なりしこと明かなり人或は勘當の
日に與兵衛が叔父の名を使ひて三貫目の金を義父よりあさひき取らんとせる
條と照し合せて彼れが際といふても明日明後日萬事をさし置きけふの中三貫
目と、のへて渡さつしやれといへるは此借財の事の胸にある證據にて彼れが
返済に苦心せるは勘當後にはとまれるにあらずといはん、非なり、勿論與兵衛と

ても借財に苦心せざりしにはあらねど彼の折と此折とは其苦勞の鹽梅に相違
あり彼の折は謀判露見しては我爲に不便宜ありと思へる故に返済に苦勞せし
あり親の爲を思ひてにはあらず必竟彼れが三貫目を得んとせるは私欲の小使
に要する所あればにて其證據は同じ時父に向ひておかぢが病より何より大事
がある、其當座に母ぢや人にはいふたれと前置きして叔父の事をいへるにて
知るべし、其當座とは野崎詣の當座をいへるなりとすれば、正に是、四、月、中、旬、の、事
にて二百目を借入れける以前の事なり、蓋し其頃與兵衛の身にとりて大に金の
要る事のありしならん然るに母親分別ありて其時ぬくぬくとだまされながら
も流石に義理の柵ありてつかつかと親仁殿へ話さうりければこそ與兵衛小使
錢の乏しきに困み廿日に及びて小兵衛より彼の二百目の金を借入れしならぬ
さすれば三貫目の無心は二百目の爲に起りしにあらざりしこと知るべし、若し
また眞に借財の方を重しとしそれが爲に親をあさひかんとしたりきとすれば
三貫目といはで二百目に對して一貫目ともいふべきを大まかに三貫目といひ
しを見れば茶屋の拂ひ遊びの小使錢なぞこそ専ら彼れが心頭にはありけり、勘
當以前には義父の難義なぞいふ觀念絶わてあかりし事明かなり

然るにそも如何にしてわづか一月の間に彼れ忽然と義父に對する義務あることを知識するに至りしか、是難問あり、近松の此作を片輪として繋つべきか將た然らぬかも此難問一つに繋れり

案ずるに「ゴ」は人間を活し又は半死せしむ活すとは現在の死地より人間を救ひて未來の榮を望ましむるをいひ、半死せすとは人をして執着の絆を絶つ時を失はしめてよもやの霧中に迷はしむる事をいふあり、基督教は「ゴ」を利用して教を説き、佛教は「ゴ」を打破して一切空を説き、迷執半死の餓鬼を救はん

とす、共に其理妙あらぬにはあらず、但人間通常の例に照せば「ゴ」は人をして半死の餓鬼とせしむること多し、そは常人のいふ「ゴ」は基督教の「ゴ」と同じか

らねばあり、「上中二巻」に見ねたる與兵衛の如きは此俗に謂ふ「ゴ」あるが爲めに迷執の餓鬼とありしものあり、彼れ義父を侮り母を侮り専恣放逸おのが欲する事として成らざること無きゆゑに未だ曾て失望といふ事を經驗せざりしあり

夫れ失望の解は時と人によりて差あれども與兵衛の如きにとりては失望は却りて迷執、攘除の媒あり、依頼心を去ればあり、可愛兒に旅をさせよといふも此理なり、凡そ我が一身あることを知りて他あることを知らざるものに他あること

を知らしめんとせば彼れをして眞の一本だちとせしむるより外に方無し、感人を常に暖爐ある室中に居らしめば彼れはとく暖爐の暖きをさとらじ、俄に暖爐を取り去れ、彼れはとめて暖爐の暖きをさとらん、無くてぞ人の戀しかりける、とは無明のはじめて明くありし時の誠あるべし、必需は發明の母とはひとり智の上のみにいふことかは徳性上の變化も零仃孤立して後に起ること間々あり、古へより大事の思ひたちの屢々逆運、失意、失望、蹉跎の際に萌し頼の綱の切れよもやの霧の晴れし時に起りしも皆此同じ理あるべし

案ずるに與兵衛は其經驗の幼稚あると小兒に等し、彼れは恐らく打叩かれし事あかるべし、失望の味はひは一たびも知らざりしからん、其母親に折檻せらるゝやいへらく、此與兵衛が爰を出て何處へ往く所が、いとは何等の無心、無邪氣ぞ

二十三才の放蕩兒の詞に似して、八九才の頑童の我儘に似たり、勘當の何ものたるを會せざる事明かあり、蓋し彼れ我行ひの非あることを知らねば、夢にも此家を逐はるべしとは思はず、逐ひだすといふ事は意見といふもの、符牒の如くに思ひしからん此の故に實際逐出さるゝに及びては、ぎよつとして吐胸つきたる如何にすべきと、けでん顔したる自然あり、其時の彼れの心は夢に夢見たる如く

途方に暮れ進退に迷ひ彼の野崎にて叔父に懲らされし時の如く方角を失ひ去就を知らず茫然また惘然に立たる妻いかに哀れきりけん、甘き親を傷りて虎の如き頑童は其甘き親を失ひて悄然たること屠所の羊の如し、今宵はいかにしていづこに夜を明さん今宵は色友達にすがりても兎も角もせん明日は何とせん、只目前の苦樂を知りて未來の苦樂を知らざりし與兵衛も此の時に及びてはじめて未來といふとに心付きしあらんさはれ當日は目前に困れば深く未來を思ふに及びて或は怒り或は罵り或はもだへ或は怨み天を罵り親を怨みつぶやき／＼家を離れて其夜は皆朱が許にてや明しけん刷毛が宿にてや過しけん兎に角に友達の許に一夜を過せしやらん何とされば前々月の割附が此勘當の翌日ある三日の日附にて拂はれたるは其間あまりに隔たり過たり思ふに二日の夜友達にあひて嚴しく催促せられしにやあらんさて僅に十匁五分、いふ些少の割前に苦めらるゝに及びて彌々勘當の味を知りそめ、友達の親に似ぬことをも知り明日より後はいかにすべきといふ心配も募りしか懐に一錢の貯かし頭を下げ手をすりて詫ふれど聽かれざる苦しさにます／＼勘當のつらみを知り一生人に詫言いひし経験なき與兵衛されど爰に詫言の必要を知りて

まづ兄の許へ去はれゆきて詫言の手初めをや試みし是れを與兵衛が心狀に生ぜし第一の主觀の變動とす
 去かるに實兄河内屋太兵衛は中の巻にて見ねたる如く頗る義理堅き分別男あり、現に義父を諫めてといたし親仁さまが手ぬるい分別も何もいらぬ、與兵衛をばいだしてのけさしやれ死にをらば死に次第徹座愛着は残らぬと如來かけての母の言分からは何の遠慮勘當さされど切にすゝめし口もあれば勘當うけて來れる弟を義理にもおどかしく我家には入れざりしあるべし、不義を見て嚇たる君子の怒三分、義父へ對する義理六分、世間へ對する義理壹分、合せて十分の兄の折檻はさすがに無法者の骨身にも忘れぬ程に徹ねけんいでや此與兵衛蒙昧頭愚にて其濁血の沸かへりたる時にはほと／＼母をさへに忘るれさすがに習慣と遺傳にて母の母たるを知らぬにはあらずされば其兄に對するにも情沈みたる時には母親に對するに似たるものあるべし、加ふるに兄は腕力といふ一原素を加へてもてり、與兵衛の心中兄を恐るゝ情もあるべし、況んや進退全く谷まりて第一主觀變遷を経たる時に於て勘當の苦痛を覺りたる時に於て實兄の折檻にあへるをや、思ふに血涙と鐵拳と雨の如く下れる此友愛の折檻の中に與

兵衛が主觀の第二變動、即ち第二の心狀の變化起りしあるべし第二の變化とは
 我行ひの非ありしことを覺りて義父に對する義務を意識せる事是也
 綿屋小兵衛の言葉の中に「順慶町へゆけば本天満町親御の所へといはるゝ、親御
 へゆけば追出した爰には居ぬとある」といふ文句ありさすれば五月四日の夜は
 兄の許諾を得て順慶町を立出たること、并に親の許へゆくといふ口實にて兄の
 方を出出たること「親御の所へ」とある「へ」の字に明かあるに似たり、蓋し三日よ
 り四日へかけての折檻と剛意見にて悔悟謹慎の色いと著るゝ見れたるが
 故に兄もやうく心折れ、與兵衛が叩頭謝罪して「詫言の爲に義父の許へゆきた
 し」といひいでたるを實とし、斯くは許して出し遣けるにや、尤も「詫言の爲に云
 々」といひ出さとは評者の想像なれど前後の續きより臆測するに若し與兵衛の
 心中に前にいへる如き二段の主觀的變動ありきとせば、彼れ第一に二百目の債
 償の將に日限に通りたるを思ひいだし、如何にすべきかと煩悶さしあるべし、
 無形の不孝を悔ゆるよりも、有形の不孝を悔ゆると與兵衛の如き性資の者には
 最初あるべし、まかれども斯くと打明て兄に語るべきにあらねば表は詫言に托
 して兄の家をたちいで、兎や角と工面に困み、久しく途中に彷徨し遂に志を決し

て手島屋を訪ふに及びしならん、此時の與兵衛は一日前の與兵衛にわらず、勘當
 の苦しきを知り、友達の親に似ぬをも知りたり、兄の剛意見肝に徹えて我行ひの
 非ありしを覺りたり、義父徳兵衛と舊手代徳兵衛とは同体異資格なるべきを意
 識し、義父の慈仁の鴻大あると其恩の高きとを感せり、擧ぐども謀判して、義父に
 難義をかけたの忍びがたき大罪たることを感じたり、恐らくは此有形の不孝
 の罪を過去の不孝中の最大あるものと思ひしからん、此に於てや熱血性男兒の
 癖とて一意此負債を濟さざる可らずと焦心煩悶して、深く前後を思量する違な
 く、此不孝の借金を濟すこと叶はずば死ぬより外に分別無しと譯もなく、輕々し
 く死を決し、一生さゝぬ脇差さし死ぬか生るか今霽こじりの詰りの分別手島屋
 が返答次第にて定めんと思ひつゝ、彼家の門に立寄りけん然るに其門口にて端
 無くも債主小兵衛に邂逅しいよゝ、絶体絶命の實を覺りたれば金の必要を感
 ずることまず、切なりぬきさしならぬ此二百目有所にはあらうがな世界は
 廣し二百目さば誰ぞ落しさうなもの、と徒に天を仰いで僥倖を禱るに至れる
 こと彼れが性情の必然にて遣せし他人の難澁などは想像するに違なし偏に我
 と義父とあるを知りて他人あることを忘れたり、嗚呼與兵衛の如きは憫むべし彼

女殺油地獄を讀み所て感す記

れは他人あるを知りて他人を虐殘せんとするものにわらず、元より他人あることを知らぬなり、彼れ兄の教訓によりて漸く義父の敬はざるべからざるを知りたれど未だ人情をも義理をも解せざるあり彼の眼中の義理とは義父に對しての義理のみ世間人間に對しての義理とは彼れ未だ夢想せざるあり畢竟與兵衛は一を知りて二を知らず差別の義理は知り得たれど未だ平等の義理あることを知らず譬へば愛國の美德たることを知りて只管に保守の策を講じ未だ宇宙を愛するのとの美德たるを認めざるもの、如し夫れ一を知りて二を知らず差別を知りて平等を知らざるは歸納經驗の乏しきより生ずる自然の果あり豈ひど、り、與兵衛を咎めんや、

徳兵衛は平等に拘らひて差別を辨へず、其子は差別を知りて平等を知らず、而して親の失も舊主人といふ一個人に泥みて生じ、子の失も義父といふ一個人に泥みて生ず、共に其見る所の狭きより起れり、差別平等を双つながら調理せんとせば眼まづ大宇宙を看破せざる可らず

手島屋にての慈母とて義父との問答は人情の極致、一篇の精髄、淨瑠璃の麗卷、其子ならぬものもこれをさかば

“Turn his color and has tears in's eyes.”

若しこれを舞臺に登れば

“Would drown the stage with tears

。 。 。 。 。

Make mad the guilty and appall the free,

Confound the ignorant, and amaze indeed

The very faculties of eyes and ears.”

與兵衛無頼なりと雖も已に二段の主觀化を経たり、至慈ある父母の述懐を洩聞きて豈感動せざらんや木偶人と雖も嗚咽すべし況て彼は已に義父の恩を知り悔悟の妙光に照らされたり、豈此慈悲に感動せざらんや、已に感動せば氷の如き眼にも熱湯の涙あかるべしや、さきから門口に蚊にくはれ長々しい親達の慈歎聞いて涙をこぼせしとは其言甚だ粗撲あれど其撲にして粗ある所却りて至誠の言葉たる證あり蚊にくはるゝ有形の苦痛を忍びてかゝる無形の苦痛に泣きしは彼れが一生の初經驗あるべし二人の親の詞は其心魂にしみこみて悲しく前には此金調はずば自害して死うと覺悟し、懐に差脇さしはさいて出たれど

女殺油地獄を讀み所て感す記

女殺油地獄を讀み感所て記す

も只今兩親の歎き……を聞ては死んで此金親仁の難義にかゝること不孝の途上身上の破滅思ひ廻せば死ぬるにも死なれず生きてはゐられず絶体絶命進退維れ谷まり詮かたあさに初志の如くお吉に頼りて二百目の金を借らんとす其情憐むべし

お吉は頗る人情深き女あれども年もまだ廿七とあれば未だ人情の奥を知れるものにあらず兩親があづけゆけるちまき一わ錢八百これを與兵衛に與へば彼れ案外の賜に駭き歡ぶちらんと思ひもうけきこあさまは仕合せ也後ともいはすよい所へござんしだ是此錢此八百ちまきこ様へやれと天道からふりましたと勇みていふ聲聴くが如し然るに與兵衛ちつとも驚かずこれが親達の合力かと平然と問ひかへすお吉まづ案外を感じたりさる程に與兵衛は膝を進めて一伍一什を洩聞きつと語り只今より眞人間に成て孝行を盡す合點あれども肝腎のお慈悲の錢が足らぬといふて親兄にはいはれぬ首尾爰には賣溜掛の寄金もある筈新でたつた二百目ばかり勘當のゆる迄貸して下されと足らぬ理由はいはで突然に賣溜を貸せと云ふお吉二たび案外を感じつ

此時の與兵衛の心を分析すれば彼れ一圖に二百目を得て義父の難義を除かん

女殺油地獄を讀み感所て記す

とす我情懷を詳述するに違ちし即ち情の爲に理性くらみてこみいりたる理由を辨するに違ちし萬事獨呑込獨合點の趣あり孝行盡す合點といふ言葉と肝腎お慈悲の錢が足らぬといふ詞との間には大矛盾大撞着ありて拮据相容れざれど與兵衛みづからは知らずさて又新でたつた二百目とは時にとりて尤も不都合の詞にしてこは心計が廣袖の肌癖尙ぬけぬ故にて是非あき失言されどかゝることは彼れが腸を探りて後にこそ知らるれお吉はいかでさ思はん足らぬとさゝてまづ呆れたつたときと愛憎つきそれ〳〵奥を聞より口開け那邊に心があをった偽にも金貸して呉れとはいはれぬ義理世間の義理を欠いても金借て悪性所の拂ひして跡から段々いかうでさと眉つりわけて辱しめたる自然ありお吉案外に案外を重ねて愛憎盡きうとまじさ増すにつけ過去りし事をさへ想ひいだしいつぞやの野崎参り衣物洗ふて進せたとさへ不義したと疑はれ言譯に幾日かゝったやら喃うとまじや〳〵と憤として背向にありたる委宛然たり

與兵衛たゆめる色あくそべへにぢり寄りまからばいつそのこと我と不義に成りてかして下されと強談すは無法の骨頂の骨頂也但し與兵衛はまか思はず何

とされば彼れは世に我と義父との難義のいとつらきを意識したれど不義といふ名義の他人といふものにどりていかばかり難澁あるべきかを感せざれば也返る金あらば貸してもよさうかものと思へり

押問答再三に及びてお吉断々と動く色なく女おと思ふておふらしやると聲たてゝわめくぞやと叱斥す(翫らしやるか)といふ聲逆上せたる與兵衛の耳にも入りはじめて我言信せられざるかと感じ入要の理由を語らざる可らずとさとり「ハテ與兵衛も男二人の親の詞が心魂に染込で悲しいもの、翫るの侮るのといふ所へゆくことか何を藏しませう跡の月と子細残さず打明けたるおのづからさる述懐也有金たつた二百目で與兵衛が命をついで下さる御仁徳黄泉の底まで忘れうかお吉さま何卒貸して下され」といふ見るべし前に「たつた」といへるも心計が廣袖の肌癖のみにはあらで彼れは我命に對していへるあり一人の命の代とせば二百目は「たつた」あるべし彼れに決死の分別ありしや明か也、さすれば此時の彼れが聲と彼れが「目の色」とは悲絶ありしからん、愛憎つかせしお吉されどもまた少しく心動き「さうした事もと思ひ」たるまことに人情の自然ながら「かねての偽計是もまた其手よと思ひかへして、フウマがくしいあの偽わいの……」

からぬといふてはきつうからぬと排撥けしもまた自然の沙汰也、そは與兵衛の述懐金子要求の前に出すして要求を断られたる後に出たれば口實とのみ聞ねしも當然也、さもあらばあれお吉は性來情深く且は女氣の優しさに偽あるべしと思ひつゝも流石に棄がたき思ひもあれば「油取かへて」といはれて「言葉やさしく諾きて消ゆる命の燈火は油はかるも夢の間と知らで升取り柄杓取り」與兵衛の心をさだめんとす、是一つは断然借ますまいといひ放ちし與兵衛の血相の只からぬを認め心元かく思ひしにもよるべし

與兵衛の胸は二百目の必要に塞がり血この爲に上づり心この爲に顛倒す、二百目を得ば五日の旭光を見ることを得べし、得ざれば今宵が生死の瀬戸、奥の戸棚に上銀五百目餘り、恐らく尙別に若干の貯へもあるべし其金たつた二百目だけ欲しや、さりとてそを借るべき便は無し、夜は更る明日に咫尺、五日の旭が「よ」と出ば親仁の難義身の破滅兄にはいはれず、知己は無し、アレ〜段々と夜は更ける奥の戸棚に溢る、貯いつその腐れ殺して取らん、親の難義は不幸の塗上情知らずの女め、貸さずばよし、どうせ死かねばからぬ身此奴殺し金を濟し男を立て、後に死あんふ、然ちやと咄嗟の分別、濁血湯の如く沸かへり、心の鏡磨深々、遂

女殺油地獄を讀み所て感す記

に殘忍の白刃を揮ひて熱油はどばしる活地獄の慘劇を演出す、何等の慘狀ぞ、
 王齒をむきいだして笑ひ、サタンどんはがへりして欣び舞ふ、我と親とが無透明
 の目かくしとありて彼れ眼中に毛頭の人情をも見る能はず、即ち曰く、死と
 もかい筈尤もこたの女が可愛い程己もおれを可愛がる親人がいとしい金拂
 ふて男立ねばあらぬと、されど與兵衛も人あれば幾分の同情あきにはあらず、
 死にともかい筈尤も此の同情の影あり、只我と彼とを比べて我を天とし彼
 れを地とす彼れは他人をもて遙に我よりも劣るものとせり、與兵衛がお吉に於
 ける同情は殆ど常人が犬猫に於ける同情に類す、心で御念佛南無あみだとは人
 を殺す時の言葉にあらず
 女已に息絶にたり、與兵衛の心局驟然一變す、作者が絶妙の筆其狀を叙す、また那
 邊にか分析の筆を着けん、本文に就きて不可分析の妙を默會せよ
 日頃の強きも死貌見てぞ、つと我から心もおくれ、膝節がたたくがたつく胸を
 押さげくさげたる鍵をおツとツて窺けば蚊屋のうちとけて寝たる子供の
 貌付さへ我を覗むと身も頭へば伴てがらつく鍵の音頭の上に鳴神の落ちか
 るかと膽にこたへ戸棚にびつたり引出すうちがい、上銀五百八十目宵に聞

女殺油地獄を讀み所て感す記

いたる心當ねち込みねちこみ懐の重さよ足も重くれて、薄氷踏む火踏む此
 脇差はせんだの木橋から川へ沈む來世は見ぬ沙汰、此世の果報の付時と
 内をぬけ出一散に足に任せて
 嗚呼何等のおそろしき活畫ぞ、マッカン王を弑して後のマッベスの述懐と頗る
 相肖たり、がらつく鍵の音いかに百雷の一時におちかゝるが如く轟き、"all the house"
 に鳴渡りけん殺す時には心でお念佛南無あみだとつぶやきしも已に殺し了へ
 て鍵の音雷と轟き when he "had most need of blessing" how "Amidaobutsu" stuck in his
 throat? 其薄氷を踏み骸を踏むや how "every noise appalled him?"
 たしし與兵衛とマッベスとを比べば其意識上に大きき相違あり、マッベッ
 スは君臣の義を解し人情義理を解し我弑虐の大罪たることを意識して其君を
 弑殺す故に其怖るゝや意識の中より無意識に生じたる恐怖あり、與兵衛は然ら
 ず人情を知らず義理を知らず人を殺すことの大罪たるを知らざるにはあられ
 ど其何故に非あるかは明かに知らず故に彼れの怖るゝや死貌を見たる自然の
 刺撃あり即ち無意識の中より生じたる恐怖也、彼のマッベスは判然怖るべき故
 を知れり故に現場を離れても心神惱亂し顔色土の如く血に染める我手を見て

“What hands are here? ha! they pluck out mine eyes.

Will all great Neptunes ocean wash this blood

Clean from my hand?”

と戦栗苦叫す、蓋し其怖るゝ所無形の。大逆にある故に一滴の鮮血だに此大逆罪の符號とありてマッヘスの全身を震蕩するに足るあり、與兵衛は然らず、彼れの怖れは無意識の刺撃あり、有形の死貌の怖ろしきを見つる果あり、故に固の外にいづれば恐怖已に其半を減す、彼れは無形を怖るゝものにあらず、沈む來世は見ぬ。沙汰、此世の果報付時と内をぬけいで一散とあるを見て知るべし。[さきにも待は待ながらこちからひたと行通ふ道の犬さへ見しる程うつゝぬかせし河内屋與兵衛、小菊にあふせをたのむの雁よ新町の花を見すて、蜷川妓の花屋にたどりよる]とあるは何月何日の事にやあらん其次に見ねたるお吉が三十五日のたい夜よりは甚くとも一二日前日の事あるべし何れにしても殺しの日より一月餘り経たる事明かあり。與兵衛は金を得て借財を爲せしや否や本文には何の噂もなければこれに一定すませしあるべし只義の爲に死かんとまで決心したりし與兵衛が人を殺して

女殺油地獄を讀みて感所を記す

男をたて、後尙れゆゝと生延び而も新町蜷川と遊び戯れて日を送れること矛盾のやうされど彼れが性質の上より見ればさもあるべき事あり、前にもいへる如く彼れの義といふは義父一人へ對しての義あれば不義の借財を濟了すれば義務の肩はぬけたりと信せん一定也、彼れは負債といふ有形の物を濟す能はずば死かんとこそ思ひたれ無形の義理の爲に夢にも死かんとは想はざりき元來彼れの悔悟は失望困によりて萌し失望困は錢無きつらさより萌せし故に錢を得ては心また變るべし加ふるに彼れもとより法律の怖ろしきを知りてあれば人殺しの事露見すれば命無きことをも知れり忘れてもれ吉を殺せし事をば目貌にはいだすまじと決心して度胸を定めたる趣は花屋の花車が油屋の女房殺しを芝居にするげきと噂しても動せず大へいそらさぬ貌して手島屋の法事に臨み殺した奴もまだ知れず氣の毒千万したが追付しれませうとまらしく、七左衛門が圖星をさし妻の敵と名宜かけてもア、七左衛門れうじするなシテ彼れが殺した其證據はどそらとばけたる度胸に見ねたり、世なれぬ與兵衛に此度胸と見れば不思議あるに似たれど必竟は世なれぬばこそ此度胸あるかれ俚諺に謂ふ盲蛇にねぢずとは茲也人情を知り義理を知り良心もあり善

女殺油地獄を讀み所て感す記

惡の分別も明かにてこそ我も弱れ意も縮め我より外を知らぬ者ばかり猛きは
 かし與兵衛の如きは此時までも我行ひの何故に大逆あるかを知らず露見せば
 罰せらるべしとはよく知りたれど何故に悪しきかを明かにば知らぬ也
 終に與兵衛が進退極まり天網の其身を掩ふに及び叔父森右衛門といふ善知識
 あり此大絶望の瀬戸際に大慈悲の引導をす無明の暗忽然と散し真如の月光明
 皎々たり彼れ即ち覺悟の大音上一生不孝放埒の我かれども一紙半錢盗みとい
 ふこと遂にせず茶屋傾城屋の拂は一年半年れそあはるも若にあらす新銀一貫
 目の手がた借り一夜過れば親の難義不孝の咎勿体無しと思ふ計に目付人を殺
 せば人の歎き人の難義といふことにくらぶと眼つかざりし思へば二十年來の
 不孝無法の惡業が戸主どあつて與兵衛が一心の眼をくらましお吉どの殺し金
 を取しは河内屋與兵衛仇も敵も一ツ悲願南無阿彌陀佛と叫ぶ憐むべし是は彼
 れがはじめて人間に我の外に人あるを知り義理人情の止みがたきを知り善惡
 の流行因果應報の怖るべきを知れる時の言葉也彼れが有形の世界の外に無形
 の世界あるを見たる時也嗚呼此稚蒙兒其行ひは悪むべし其情は憫むべし與兵
 衛は父母に勘當せられて第一の失望を経験し此時はじめて義父の仁實母の慈

女殺油地獄を讀み所て感す記

を認めたりこれ彼れが無形を意識せる初めあり
 天網下り命究まり彼れ更に大絶望を経験す此時はじめて世間の義理人間の情
 理を解す是彼れが大無形を意識し人間に幽明二界あるを認めたるの時なり
 總評 此作を讀みて感じ得たる所は無限の私欲と有限の娑婆義理人情の浮世
 どの軋轢ありフライング我ド自然ドの衝突也世間を知らぬ我儘者と世間との撞着か
 り主人公河内屋與兵衛は天上天下我身あることを知りて他人の身あることを
 知らず眼耳鼻觸の上には他人あることを意識したれど徳義上には他人あるこ
 とを知らざるものありされば我一身の欲の遺方無きを知りたれど世に義理人
 情の止みがたきことを知らず又法律といふ形あるもの、怖べきをば知りたれ
 ど道徳といふ形なきもの、守らざる可らざるを知らず此故に情火ひとり熾ん
 にて分別の光明は秋の螢よりも薄く熱湯の如き血沙は沸かへれど冷水の如き
 理性は初めより濁りて澄ることなし正に是一個の多血的肉塊男兒あり心猿鎖
 を断ちて何れの處にか逸し去り意馬絆を切りて無碍縦横に狂奔すされば或は
 人情と撞着して之を蹂躪し或は義理と衝突して之を踏碎きまばらくは狂ひに
 狂へりといへども竟に自然といふ金剛壁に觸れて五体八裂し情火八散し滿身

の濁血瀑下雨瀉し了り始めて淨水的理性の泉迸然と沸のぼり、明月の如き靈光皎々と照射するにあひ、忽然血清み、飄然雲霧散じ、天上天下我一身の外に億萬の他人あることを悟り、我欲の遺方無きと同時に義理人情の止むべからざるを悟り、有形の制裁の外に無形の制裁あることを悟り、世に善惡の流行せることを悟り、因果應報の止むべからざるを覺悟す

近松が時代物

嘗て寺山屋川君つが番ひよしやく束なまご得送げぬ心苦しき此ごろの暮さも我身ばかりの夏かこ一層ひとしほおぼれて一日も早く此のつらさ逃れたく手文庫さかさまよくつがへて種々くさくささしたる草稿をあれかふれかき求むるうちふさ目よとまりしは去々たたくし年の暮る筑摩川みろささい、月の中人なつかしき百生のおとせ鏡奥山人やまのひとなどいふおかしき人達を集へて何如に近松研究会といふ者をわれ／＼率先して起さばやさしいいでける折おのれ例のよくも考へて手がしめよとて走り書きしる漫評の筋書なり當時の業志よれば時代物も世話物も一切詳密に解剖分析し中にも別きて傑作と思はるゝいと長々しく評釋すべしとなりき往ぬるる「日本評論」に「いだしし『油地獄』の評又『後の月影』にのせし梅川の評ふごの皆其折の遺物なすてまよさまで秀でとまよとも思われぬは只評言の筋書のみを作て悉しき口上にていひ添ふるここと

して會員よ示しき下に舉ぐるハ件の筋書の二三な？今見れば餘々大づかみよ旨ひ放ちたるまころ多くて我ながらかたはらいとくつやく公にすべきものは思はれど城南評論社の催促のいと厳しきを如何にせましましさらば近松の落葉集めたる此の破籠やぶかごをどに頁ついでの中に加へられてよとて

『城南評論』所載

世話物にてはほゞ性情悲劇の正脈を得たりとも見ゆる果林子が時代物を作りては殆ど別人のやうあるこそいふかしかれ世話物を見れば人物主因となれるが如きに時代物はおしあべて事の變化を主とし人物多くは人形にんぎょうなり世話物の人物は特質の中に普通性をも含みたりさるからに間々一個人にしてかたはら人間をも兼ねたりと見らるゝに時代物の人物は大概或る無形の性情の權化にして大づかみに謂ふ模型まがたたるに止まれり悉しくいへば時代物の人物は或は短慮一徹の勇或は未然洞察の智あどいふ質に肉を附け形を與へ假に云爲せさせたりと見えて其が心ざま極めて單純あり然るに世話物の人物は紙治となり茂兵衛とあり忠兵衛とあり清十郎與兵衛とありて現われたる所は特殊あれど其智情意の作用はほゞ人間の普通性にまがたがへるものゝ如し拙くとも彼の時代物の人物の譯も無く賢に譯も無く愚なるが如きとは同じからず加之時代物に

近松が時代物

ては事變といふ事變大かたは人心以外より來り突如と生じ忽焉と滅し剩へ最も大切なる大愁歎の因縁即ち彼のカマストロヒーの由來すら偶然の災厄に原けるが多しされば人と事との間に因果の關係甚だ疎にして吉凶禍福幸不幸盛衰榮枯の變化はおしあべて宿世の命運といふものに似たり世話物にも宿命の沙汰と解釋せらるゝ禍福の變なきにあらねど宿命説を離れても解釋の附くところが時代物との相違あり作者の本意はそのいづれにありしかいざ知らねど予は世話物の傑作の宿命説を離れても解し得らるゝとを信するものなりまかるに時代物の作に至りては此解釋の自在無し必竟世話物にては人物も人物の上に見ねたる因果も且つ特殊にして且つ普通あるが如きに時代物にては先づ其の人物は或る特性若くは特質の權化さればはゞ其質の普通性だけは備へたれど漠然茫然として廣きばかりにて捕へどころ無し即ち死せる模型たるに止まりて活きたる特殊の智情意なしさて又其の人物の上に見ねたる因果は如何にといふにこれはまたいと狭く特殊なり即ち其一人物の上のみ働く宿世の因果なり

以上は大概をいへるなれば多少の例外はあるべし且や下文にドラマ云々といへるは重にエリザ朝の性情悲劇を標準としていふあり又強ちドラマと非ドラマとの名目によりて近松が作の優劣を定めんとにもあらず且また宿命説の旨に成れる物語は總て非ドラマありといふにもあらず予は只世話物と時代物との間に結構の相違あることを指示せんと望むのみあり讀者其の心して下の略評を見たまふべし

近松が時代物

『最明寺殿百人上臈』を見るに是れは正しく謡曲ある『鉢の木』を臺として『源平盛衰記』の翻案を接木としたるものあり『女鉢の木』と題したる道行の條は文さへに彼の鉢の木をさながらに移したり只常世に代ふるに其妻を以てし處々に挿文して前段との脈絡を通じたり又文情相叶ふやうに女らしく文脈を和けて彼の勢揃への一段中に女武者の綺語を作り入れたるが相異ありその元となりし謡曲の『鉢の木』もこれぞといふ波瀾無き物語あればドラマには恰好あらぬをそを曲げて翻案したる『女鉢の木』の一段が只管目の芝居とされること怪むに及ばざる結果あるべし

さて本篇の前段は殆ど件の鉢の木とは離れたるものあり即ち最明寺時頼が剃髮して名越が谷の法華堂に故頼朝の木像を安置してこれを祀り神易と名づけ

たる御くじによりて政の當否を知らんと試みる由をもて發端し其子天女丸時宗と其弟式部時定とが參詣せるを序びらきの事件とせるあり案するに此淨瑠璃は三世命鑑といふもの、旨を骨として作り設けたりと見ゆ何とあれば時宗は義經の後身ありといふ事此序幕の中に木像の靈顯と神易とによりて知られそをもて後に至り天女丸と其叔父時定との間に争戰の起るべき主たる原因としたればあり即ち時宗は義經と化し時定は頼朝と化するあり之と同時に佐野の源藤太經景といふ時宗の侍臣が梶原景時の惡靈に魅せらるゝ事ありて突然逆權論と同じさまの争論を時宗とする事あり是また前世の因果の然らしむる所と釋したり次ぎに時定が兄時頼の坐禪中を機會として甥の天女丸を亡きものにせんと企て天女丸を捕へて押込めしを辛うじて逃いづるに及びて佐々木廣綱といふ者と前にいへる源藤太との間に宇治川の先陣めいたる所作あり一人は天女丸を討取らんとし一人はそを救はんとし到底時定の誅せらるゝに至りて局を結ぶ其間に天女丸を義經の再誕と唱へたる處まばくありて結末に二階道入道といふを辨慶に見たてたる場當りもありて文章は例の輕妙を極めて流麗艶美あれど筋は三世相の講釋を聽くが如く彼の希臘悲劇に謂ふニミシ

スの趣意とも同じからず剩へ最明寺殿といふ表題はありながら其人は全く客とありてどころどころに出沒するのみ天女丸主人公のやうあれど其性質の特に著く活きたるところもかく大づかみに評すれば血氣の少年に源九郎狐がつかたらん如し女鉢の木に至りては只一人經景の名あるが爲に前後の連絡あるに似たれど其實は別の譚ありこれにも譚の主人公はあれど因果を生みいだす主人公は無し

『川中島合戦』は前の作に比べて稍や秩序あり物語として見れば前より優りたるに似たりこれにも因果の主人公は無し或意味にていへば信玄と謙信とが主あるが如く又或意味にては勝頼と衛門姫とが主あるが如く又或意味にては山本勘介が主あるが如し作者は明かに信玄をもて良將の器を表し謙信をもて勇將の質を表せり即ち二人は智勇二性の權化あり故に信玄は譯もなく明察ある人の如く謙信は暗雲に勇猛短慮あるに似たり二人の間性の異なる由は明かかれど唯女の鳥羽繪と男の鳥羽繪とを見るがごとく男女の別は明かかれども只漠然と別あるのみ第一章は諏訪明神へ兩將の社參せるをもてはじまり村上義清の私曲と勝頼と衛門姫との私通とをもて兩將開戰の因縁とす勘介の事は第